

褐色の少年たち

藤永 潤 著

－教 室－

昭和四五年夏も終わろうとしている九月末である。ここは、北海道の第二の都市旭川。中心部から少し外れたところに位置する陽學小学校で、いま六時間目のチャイムが鳴ろうとしている間際である。木造の校舎では年期を感じさせ、正門から入ると建物の正面には、幾年たってこの姿となったのかツタが、縦横無尽に張り巡らされている。授業中の五年四組の教室では、間宮正太という少年が黒板の上に位置する文字盤の大きい「S E I K O」と刻まれた時計の針を見つめ、今か今かと終りのチャイムの鳴るのを待っていた。その周りでは、正太の友人である田中次郎や小森哲朗などが正太たちと顔を見合わせては、笑みを浮かべていた。やがて時計の針が動き、ピンポンパンポンとお決まりのメロディーを流し始めた。

「ふうー」とため息をつき、正太は周りの友人の面々をもう一度見た。

六時間目は、担任の小坂先生の授業だった。

「よーし、今日はこれまで…終わっていいぞ」

それと同時に週番である川治恵子が「起立！」と言った。その号令とともに全員が立ち上がった。

「れい！」

「さよおなら」

一斉にお辞儀をした。それと、同時にザワザワと慌ただしくなり、生徒たちは木製のいたずら書きが施された机の上に椅子を逆さにして重ね、教室の後ろめがけてギギギーと鈍い音を立てて移動し始めた。毎日掃除が当番制で生徒たちによって行われ、前側の床から掃除を始めるため、机と椅子を後ろに寄せるのである。

そのとき、担任の小坂が言った。

「次郎…あしたは遅刻するなよ」

その言葉で全員が大笑いした。

次郎は、照れ隠しに頭をかきながら、ひょこっとお辞儀をした。小坂はその様子を見て笑いながら、出席簿を小脇に抱えて教室を出て行った。哲朗が小坂の居なくなるのを確認すると、次郎に笑いながら近寄っていった。

「ばーか。遅刻ばかりするからだよ。ハハハ…」

「うるさいぞ。お前だって先週遅刻したべやー」

そうしている次郎と哲朗の後ろでは、掃除を始めた女子生徒と男子生徒が言い合いを始めた。原因は、男子生徒が

ほうきをギターのように持ち、ベンチャーズの真似をして、掃除をなかなか始めなかったためである。

「チャカチャカチャカチャーン…」

「早く、掃除しなさいよー」

「チャカチャカ…」

「何やってんの？…せんせーに言うよ」

「はいはい…」

といっても毎度のことなので、女子生徒も半分飽きれていたようである。正太は、次郎と哲朗に近寄った。

「おい、早くいくべ。」

ふざけていた哲朗と次郎は、正太の言葉にうなづき、教室の出口へと向かった。相変わらず、授業の終わった教室は、ざわめいていた。

教室を出た三人は、歩幅の狭い階段（小学生の歩幅に合わせた）を降りて、さらに、きしむ廊下を歩いて玄関へと向かい下駄箱までたどり着いた。

「正太。帰ったらすぐ、グランドに来るんだべ」

「ああ」

「次郎もか？」

「もち」

三人は『上』と、マジックペンでかかとに刻まれた上靴を下駄箱にしまうと、簀の子状の渡り板の上を歩き、短靴を置いた。

「他にもみんな来るのか？」と次郎が言い。

「ああ、洋二もジェスロもくる」と正太が言った。

彼らは、毎日のように、一度帰宅してから、自転車でグラウンドに集まっては、野球や鬼ごっこや探検をして遊んでいたのである。ちなみに、その日は三角ベースの野球をすることになっていた。

ーいつものグラウンドー

正太の家は、タバコ屋である。自宅にたどり着いた正太は、カバンを投げて、テーブルの上にある醤油せんべいを一枚口に加えて、すぐに家を出ようとしていた。その光景を見ていた正太の母、節子は怒鳴った。

「こらー！正太カバンをちゃんと片づけろ」

「頼むよ、しまっといて。忙しいんだよ」

「たくもーう。少しは、勉強でもする気にならんかねえー」

正太は、野球のグローブを下駄箱の中から取り出し、自転車のハンドルに差し込むと、車輪のところに取り付けられた鍵を外して、またがった。

「じゃあ、行ってくる」

「早く、帰って来るんだよ」

「ああ」

おもむろに、ペダルが踏み込まれて、二五インチのミヤタ自転車は、タバコ屋を後にした。自転車はセミドロップハンドルで、この時分の流行であった。さらに、変速機は五段で、正太の友だちの中には、前後の変速機が付いた十何段変速なんていうのに乗っている子もいた。しかし、乗り方の荒い正太の場合は、あちこちに傷みがきていて不都合な音が、海賊船のように鳴り響いていた。キーコラ、キーコラとグランドへと向かっていた。途中で偶然、哲朗のこぐ自転車に出くわした。

「おーお」

「おおー」

と同じ声を上げて、一緒に自転車を走らせた。歩道から車道を渡って、また歩道を渡るとき、彼らは路肩の段差を見事にポンと跳ねるようにして、越えて行くのである。やがて、グランドが見えてきた。

「今日、グラウンドだれか使ってるかなあ！」と正太が言うと、哲朗がニコニコしながら

「そしたら、常盤公園だべ」と言った。

彼らの遊ぶ場所は、自転車で行動できる範囲となるので、常盤公園や石狩川の河原と幅広かった。朽ちかけた木杭の垣根が学校の廻りを巡らし、とちの木の下をくぐり抜けて、火山灰の敷き詰められたグラウンドの脇の一部垣根が壊れている部分から、正太と哲朗が自転車を乗り入れた。鉄棒や砂場の横を通り抜けて、いつもの集合場所へとたどり着いた。そこには、次郎だけが来ていた。次郎は、向かいの石川商店で買ったイカの醤油付けの珍味を口にしながら言った。

「まだ、みんな来てないわ」

「おお、俺も何か買ってくるわ」

「あっ、おれも行く」と言って正太に哲朗が付く形で、石川商店に向かった。彼らのおやつやジュース類は、いつもこの店で調達していた。店は、古くから商いをしていたらしく、看板はあちこちペンキがはげ落ちていて、店主も老人であった。店の中に入ると、ジュース・コーラ類から菓子類さらには、簡単な文房具や、くじ引きなどが、密度濃く見事に陳列されていた。

「おじさん、これ！」

そう言って、正太が手にしたのは、マンボーと呼ばれる赤、黄、緑のビニールでタバコ状に包まれた砂糖を固めた

ようなお菓子である。

「じゃあ、おれはこれ！」

と言って哲朗は、小銭を店主に渡した。哲朗が手にしたのは、ラムネと呼ばれる、清涼飲料水のラムネをミニチュアにしたビニールのケースに入っている錠剤型のお菓子である。このお菓子は、本物のラムネに似た味がするのである。老店主は、しわくちゃな手で小銭を受け取り、大きく口を上を開けた深緑色に金色の線が入った模様の金庫に小銭を入れて、無愛想に釣り銭を取り出し哲朗に渡した。

「はい、おつり」

二人は、それらの菓子類を手にとると、商店から再びグラウンドへと向かった。

グラウンドに戻ると、数人の友だちが来ていて、キャッチボールをしていた。しかし、良く見るとグラウンドは正太たちの居ない間に、六年生のグループが使用していたので、使えない状態であった。次郎が戻ってくる二人に近づき言った。

「だめだよー。もう使われた」

と言って、グラウンドを指さした。そこに、ジェスロというあだ名の本暮三郎が近寄ってきて、しかたないという表情をして言った。

「今日は常磐公園いくべ！」

彼のあだ名の由来は、テレビドラマの『じゃじゃ馬億万長者』という中に登場するどこか抜けていて大喰いするというキャラクターが、三郎に合っているということから来ている。

「そうだなー」と言って、哲朗が辺りを見渡し誰が来ていないのかを確認していた。すると、約束して来ていないのは、中川慎一郎だけだった。

「シンだけだよ、まだ来てないのは…」

「もう来るべ」

そう言って、キャッチボールや話を楽しんで、時間をつぶしていた。次郎が思いだしたように言った。

「昨日のウルトラセブン見たか！」

「おお、見たぞ」

「あれって、最後ずるいよな」

「そうだよ。ずるいやっつけかただよなハハハ…」

少しして、慎一郎がゆっくりと、ブリヂストンの自転車を漕ぎながら木杭の壊れた隙間から、グラウンドに入り、みんなのところまでやってきた。慎一郎は、目を細めて少し笑みを浮かべて。

「なんだ、もう来ていたのか…」と弱々しそうな声をだした。慎一郎はいつも目を細めるクセがあり、神経質で気の弱い子であった。彼らは、全員揃ったところで、グラウンドをあとにして常磐公園へと向かった。

－常磐公園－

正太たちは、頭が鳩の糞で汚くなっている、永山武四郎の緑銅色の銅像の脇をすり抜けながら、常磐公園の中へと入って行った。銅像を通り過ぎると、火山灰混じりの土の道の先に、古潭石で造られた石碑の見える所まで来ていた。

「おっ開いてるぞ」と次郎が言った。そうしたら、ジェスロの自転車のペダルが強く踏み込まれて、みんなから群を抜いて進み出した。

「おれ！先に行って場所取るわ」

「ジェスロ。だいじょうぶだって！」

次郎の言った言葉は、ジェスロにはまったく耳に入らず、かなりのスピードで進んだ。その光景を見ていたみんなは、笑っていた。

「ジェスロらしいな」と哲朗が言った。

「今日は、誰がピッチャーをやるんよ」

「孝治、お前やれよ」

「おお、わかった」

と哲朗と三好孝治との間で、契約が成立したのである。彼らの野球は、三角ベースで、しかも人数が足りないから

ピッチャーは一人で、それぞれのポジションも一人ずつである。それで、余った者がバッターとなって、替わり替わる交代してゲームを進めるのである。

「おーい、バッチリ場所取ったぞ」と背の高い日に焼けて真っ黒なジェスロが大きめの声で手を振って言った。

「おーお、分かった」と次郎が返事をした。

すっかり遊び場の確保ができた彼らの三角ベースは、ホームベースがそこら辺に落ちている木の棒で、ホームベースらしく火山灰に書き刻まれ、各塁はダンボールなどの切れっぱしを使って形成されるのである。最初のバッターはジェスロだった。孝治は「いくぞー」と言うと、一球目を投じた。キャッチャーをしていたのが、次郎だった。バシッ！というグローブの球を受ける音がこだました。

「なーんだ。へなちょこだま」

そう言って、ジェスロは笑っていた。正太は一塁で、園田民男が二塁を守っていた。さらに、外野にドジな佐々木孝治と神経質で弱虫な慎一郎が守備についていた。観衆には、クラスの女子からは一番人気の幸田亮と手先の起用な林五郎がいた。審判の代わりをするのは、観衆に決まっていた。孝治が二球目を投じた。ジェスロは思いっきりバットを振ったが、空振りだった。

「ストライク！」亮と五郎が叫んだ。

「ちえ！たいしたボールじゃないな」

ジェスロが力んで、フォームを変えた。相変わらず、孝治は冷静で三球目を投げた。ジェスロが笑みを浮かべ、またバットを振った。コンという少し鈍い音を立てて、ボールが跳ね返された。しかも、球は神経質で弱虫な、慎一郎のところに行ってしまった。

「シーン！取れよ」と叫ぶ正太。しかし、球は、慎一郎の股のあいだを通り抜けて、遙か遠くへ転がっていった。正太がその様子を見て、慎一郎のあとを追っかけた。というのも、慎一郎がミスをするとうちに落ち込むので、正太がいつもフォローするという大役を預かっていたのである。その間調子に乗ったジェスロが走りまくっている。やっとの思いで、慎一郎が球を拾った。正太が両手を上げて、慎一郎に叫ぶ。

「シーン！投げろ。早く」

そうして、慎一郎は渾身の力を振り絞って、正太へと球を投げた。球は正太までは、届かなかったが正太のフォローがよく、彼がツバウンドで受け取った。正太は後ろを振り向き、ジェスロの動きを察知してホームベースめがけて、勢いよく投げた。そのようすを見ていた次郎が前進してきた。ジェスロは絶対にホームベースまでたどり着こうと走っていたので、ボールの動きは見ていなかった。見事ボールをキャッチした次郎が、ジェスロにタッチし「アウト！」と観衆の亮と五郎が言った。

「あれー？」とジェスロが球を見て、驚いていた。正太は笑みを浮かべながら言った。

「シン、よくやったぞ！」

さらに、園田民男が、ガッツポーズを見せて、良くやったということをアピールしたのである。

その声を聞いた慎一郎は、目を細めてニヤリと笑みを浮かべていた。そんな、流れでプレイは、進んだ。一人バッターが塁に出れば、観衆になっているものがバッターになり、観衆もバッターも順番が回ると、各ポジションのものが交代して、バッターと観衆となるのである。そうして、今度は観衆になっている民男が、常磐公園前にある商店へおやつを買いに、自転車にまたがり行ってしまった。太陽は、少し傾き掛けていて、空が薄オレンジ色になりかけていた。やがて、口にビニールの長い袋に入ったアイスクャンデーをくわえて民男が戻ってきた。左手に亮の分も持っていたのである。やがて、野球のプレイも終わり、民男は、古潭石の石碑の台の上に上り、腰掛けた。亮も民男に続き、台の上に上ってきた。

「サンキュー！」と言って、アイスクャンデーを手にして、少し融けかかった状態のアイスクャンデーの上部分を、犬歯で引きちぎりそこからビニール詰めとなった中味を吸い出すようにして、楽しんでいた。他の者も、商店からアイスクャンデーを買って来ては、みんな石の台の上に腰掛けた。それでも慎一郎は、台に上がらず、アイスクャンデーの一部を地面に落とし、蟻の群がる様子を観察して楽しんでいるのである。

「まいったな、明日ゴンゾウの授業があるぞ」

「あーあ、いやだな」

そこで、哲朗が突然笑いだした。それに気づいた正太が言った。

「どうしたんよ、哲朗」

「…ハハハ…、いやあーこのあいだの次郎を思い出して…」

すると、正太も笑いだした。

「ハハハ…あれは、おかしかった。教壇の下に閉じこめられて、ゴンゾウの乗った教壇が動いたもんなハハハ…」

「ばかいえ！大変だったんだぞー…あれは…」

と、苦み走った顔をして、次郎は反論した。彼らの顔は、夕焼けのオレンジ色で照らされて同化した色となっていた。笑った口の中は、緑や赤のアイスクランデーの色が溶け込んで、それは鮮やかな色彩に染まっていた。

「そろそろ、帰るか」という正太の声に、慎一郎は目を細目ながら、台の上の皆の方を見上げて、立ち上がり自転車の方へと歩いて行った。

「おれー帰るわ…」

「おー、また明日な！」

「おれも、帰えろーっと」

そう言って、石の台から次々に降りて来ては、自転車にまたがって、かれらは帰って行った。

ー転校生ー

翌朝、教室はいつものにぎわいを見せていた。正太のグループは集まって、朝の談話の最中である。次郎が自慢気に話をしていた。

「ほんとだって、おれ見たんだって…すごいめんこい奴よ…」

「親といっしょだったって?…」

「いや、おれも見たよ。あれは、間違いなく転校生だって…」

「何年生だろう…」

「どこのクラスに行くんだろう…」

とガヤガヤとしていた。そのときである。教室の戸が開いた。担任の小坂が入ってきたのである。噂は本当だったらしく、小坂は、転校生を連れていた。それは、日に焼けて、小麦色をしていて、どこか都会っぽい顔をしていた。着ている服も、みんなの物とは少し違い、派手な色彩のものを纏っていた。慌てた表情の生徒たちは、まるで席取りゲームのような早さで席についた。ニコニコしながら小坂が教壇に立つと、週番の後藤武が号令をかけた。

「起立！」

「おはようございます！」

「着席」

生徒の目は、新しい仲間に目が行き、落ち着かない様子であった。転校生がやってくると、いつも決まってこうい

う状態になるのである。

次郎が心配気に、小声で哲朗に言った。

「誰の隣かな？」

「そんなこと言ったって、空いているのはシンの隣だけだぞ」

「シンだって？」

その会話に気づいた小坂が、釘を指すように言った。

「次郎！うるさいぞ」

そうして、紹介が始まった。

「今日は、新しいお友だちを紹介します」

そうして、目の輝いた都会っぽい子は、一歩前に出て、小坂の説明が続いた。

「…えー、おとうさんの都合で東京から転勤となり、今日から一緒に勉強をすることになった。小栗美奈さんです。

…それでは、小栗くん…」

そう言って、小栗と呼ばれた子は恥ずかしげに言った。

「は・はい、…はじめまして…小栗美奈です。よろしく」

その言葉のあと、拍手が沸き上がった。

「それじゃあ、中川の横が空いてるな…」

その様子に次郎は悔しそうに「ちえっ」と言った。

そうして、小栗美奈は席についた。その後、小坂が出欠を取り始めた。その間も小さな声で、正太と次郎と哲朗が転校生の美奈について話していた。

「正太、あれじゃあ香川まゆみの一番人気は、ついにくずれたんじゃないか」

哲朗が、少し陰しい表情で言った。

「そんなことないって、香川は香川だよ人気は、変わらないよ」

「なんだ？おまえ、香川のこと好きなんか？…ハハハ」

「ち・違うって…」

「ハハハ…そうなんだ…」

出欠の番が哲朗に回ってきた。

「…小森？」

しかし、気づかないで次郎と討論していた。

「うむ？…哲朗！」

「は・はい！」

「…朝から何やってんだ。…田中！間宮！おまえらもか…」

「は・はい！」

「はい！」

そう言って、三人とも緊張した顔をして前を向いた。そして、三人を呼びつけた。

「またお前らか。三人とも出てこい…」

すると、他の生徒から声が上がった。

「やったー。キツネだキツネ…痛いぞー…ハハハ…」

そして、みんな笑っている。小坂もその期待に応えるかのごとく正太たちを、教壇の前に教室の後向き、つまり生徒たちと対面する状態で立たせた。三人は全員しまったというような表情をしていた。

「よーうし。今日は、とんがり付きだぞ」

と小坂が、拳の中指を一段高く見せびらかせて、笑みを浮かべた。

「次郎からだな」

「先生。それないよ…哲朗から…いて・いてて…」

小坂は、拳を次郎の頭の両わきからはさみ、次郎を持ち上げた。その時に、目が極度につり上がりキツネ面となるので、このお仕置きは通称キツネと呼ばれていたのである。その光景を見ていた、生徒たちは一斉に笑った。

「順番は早い方が、楽だぞ…じゃあ希望どおり次は、哲朗だ…」

「いた・いたたた…」

その痛がる、キツネ面に生徒たちは、さらに笑いを飛ばしていた。

最後の正太は、表情は険しいがじっとガマンをして、声は出さなかった。

「よーし。戻れ…今度騒いだら、教壇の下だぞ…」

その一言で、教室はシーンとなった。しかし、実際には小坂が教壇の下に生徒を閉じこめたことは、一度もなかったのである。教壇の下に生徒を閉じこめるのは、決まって大瓦権蔵（ゴンゾウ）であった。

一時間目は、その権蔵の授業だったので、小坂は連絡事項を告げ出席簿を小脇に抱えて、教室を出て行った。そのとたん、一斉にガヤガヤと、話声が湧くように出てきて、一時間目が始まる時間までの短い時間が過ぎていく。正太たちは、転校生の美奈の話で持ちつきりである。美奈は、転校してきたばかりで、落ち着かない様子であった。隣の慎一郎は、目を細めながらニヤニヤとほほえんで居たのであるが、早速女子生徒たちが、美奈の回りを囲んだ。

「ちょっと、シンどきなさいよ」その勢いで慎一郎は、権蔵の来るまで自分の席を奪われてしまった。女子たちは美奈に友好ともいえる態度で、近寄っていたが香川まゆみだけは、ツンとして自分の席からは立ち上がらなかった。

「ねえねえ、お父さんて何やってんの？」

「東京はどんなところ」

などと、質問責めである。正太たちは面白く無い顔をして言った。

「もう一時間目はじまるぞ」

「うるさいぞ！」

その言葉にも女子生徒は、まったく動じないようすで、東京から舞い降りた、珍しい新入生に目を輝かせていた。

そんなとき、決まって偵察に出る女子生徒がいて、教室の戸を少し開けて、権蔵の来るのを見張っていた。そんな中で、慎一郎がトボトボと正太たちのところへと情けなく歩いてきた。次郎は、笑いながら言った。

「おまえ、いいな。転校生のとなりで…」

「べつに…」

「おれと、席ばくるべ」（ばくるとは、北海道弁で交換するという意味）

「あーあ、いいよ」

その様子に哲朗が応えた。

「バーカ！ ばれるに決まってるべ」

そのとき、見張りをしていた女子生徒が小さな声で、皆に伝えた。

「来た来た、ゴンゾウが来た…」

その言葉と同時に、生徒たちはものすごい勢いで、席についた。

ガラガラときしんでいる戸を開けると、少しハゲ上がった五〇才程の仁王像にも似た大瓦権蔵が入ってきた。

「起立！」

「礼」

全員が、緊張気味で着席した。ゴンゾウは、珍しくニコリとして美奈の方に目をやった。

「おお、転校生か…小栗くんがいいのかな」

それに対して美奈は、首を縦に振ってうなずいた。

「わたしは、やさしいし授業も分かりやすいからなハハハ…」

その言葉に美奈は、笑みを浮かべていた。権蔵が次郎の方を見て言った。

「なあ、次郎！…」

「は・はい」

そうして、小さい声で「どこが…」と言った。

「次郎？ なんか言ったか」

「いや・いやなにもハハハ…」と、とぼけた。

そうして、次郎はマグネット付きのクツワのふでいれの蓋を開けて、シャープペンシルを取り出し、授業に入っていた。

ー夕暮れのグラントー

放課後、一度帰宅した正太と次郎、哲朗が学校のグラントで遊んでいた。グラントの脇には、鉄棒が低学年用の低い物、高学年用の背の高い物、半分土に埋められた古タイヤやブランコなど遊具がいろいろとあった。正太たちは、シーソに座り込んで、石川商店から購入した菓子類を食べていた。哲朗が、次の日曜日の話をし始めた。

「今度の日曜日さ、山椒魚をとりに、春光台に行かないか？」

「いいけど、ほんとうに、とれるんかー」

と、次郎が疑いの目で言った。

「だって、こないだ影山が、たくさん取ってきたって言ってたぞー」

「じゃあ、とにかく行ってみるべ」

と話が決まったようである。山椒魚とは、トガケのような形をしている生き物で、カエルと同じ両生類である。これらは、ちょっとした水たまりや小川などに卵を産みつけて、大量にふ化するので、そのふ化する前の寒天状の卵を捕獲しようというものである。カエルの卵と比較的にているのだが、少し生育するとエラが見えるので区別できるのである。

正太たちの会話の遥か遠くに、鉄の棒で組まれた雲梯と呼ばれる遊具がある。この遊具は、手でぶら下がって体全

体を振り子状態にし、その反動で梯子状になった次の手すりへと、移動していくものである。この雲梯に小さな体が一人ぶら下がり、軽快に移動して遊んでいる影があった。それに、次郎が気づいた。

「あれー？あれって、今日転校してきた奴じゃないか？」

「うむ。ああ本当だ」

「行ってみるべ」

「おー、行こう行こう」

正太たちは、シーソから立ち上がり雲梯へ向かって走りだした。近づくと、小麦色に日焼けした小栗美奈がニコリと笑みを浮かべて正太たちの方を見た。次郎が会話のきっかけを作った。

「なに、やってんの？」

ぶっきらぼうな言い方の次郎であったが、美奈は笑みを浮かべながら話しかけてきた。

「あっ！朝つり上げられた人たちだ。ハハハ…名前なんて言ったっけ？」

「あーあ、お・おれ次郎っていうんだ」

「おれは正太…それにこいつが哲朗」

「ねえっ、東京ってどんなところ？」

と正太が尋ねる。そうすると、少し考えた美奈が雲梯の手すりにぶら下がりユラユラと揺れながら答えた。

「うーんと、芸能人がいっぱいいるよ。…うちの父さん、芸能関係の仕事なんだ」

三人は芸能関係と聞いて驚いた表情をした。哲朗が言い出した。

「じゃあ、芸能人に会えるの？」

「うん。よく会うよ…このあいだは、ピンキーに会った」

「ピ・ピンキーだって…すっげー」

「すっげー…」

そうやって、正太たちは、目を白黒させた。美奈は得意気になって笑っていた。

少しの沈黙があり、今度は美奈が言い出した。

「ねえ、毎日グランドに来てるの？」

「あ・あーあ、みんな来るよ」

「ふーん…」

「そうだ、いっしょに遊ばないか？」と次郎が言った。

美奈は、笑いながら答えた。

「うん。いいよ…」

正太たちが、その返事を聞いて喜んだ表情を見せた。そうして、正太が思い出したように言った。

「そうだ、今度の日曜日山椒魚を採りに春光台に行かないか？」

それを、聞いた美奈は首を傾げながら質問した。

「さ・ん・しょう魚？って何？」

それに、補足するように哲朗が言った。

「カエルみたいなもんだよ」

「ばーか、そんなの採りに行くわけないよ」

と、その会話を聞いた次郎が否定して言った。しかし、美奈は笑いながら応えた。

「カエルみたいな？面白そうだね。行くよ」

「えっ！…」キョトンとする次郎の一瞬の沈黙のあと、正太が叫んだ。

「やったー！」

「やった。やった」と哲朗も叫んだ。三人はまさかの返事に驚きながらも喜んでいた。というのも、美奈は父親の仕事上、転勤が多く、したがって転校もひんぱんなので、友だちを大事にする気質があったのである。このときも美奈は、すでに正太たちを友だちにしてしまった。彼らの契約は成立し、二日後の日曜日は、春光台へと向かうこととなった。

やがて、日曜日の朝がやってきた。正太はいつもより早く目が覚めて、約束の場所へ向かうため、支度を始めた。
時計を見ると朝の七時である。それに気づいた母の節子が言った。

「正太。今日は早いんだね…」

「あーあ、ちょっとね」

と、笑みを浮かべながら応えた。そこへ、寝室から起きてきた父隆造が問いただした。

「正太、今日はどっか遠くにでも、行くんか？ハハハ…」

「なんで分かるん？」

それに、隆造が応えた。

「お前の顔見りゃあ、だいたいのは、分かるさ…なあ」

と、節子の顔を見る。それに節子が応える。

「そうだよ正太、あんたの行動はお見通しさ。…どうでもいいけど帰ったら宿題やるんだよ」

正太は、迷惑そうな顔をして答えた。

「分かってるって…うるさいなー」

節子がそれに、釘を刺すように言った。

「分かった、分かったって、正太いつもウソつくからさ…」

それに、隆造が助けるように言った。

「まっ、どうでもいいけれど気をつけて行ってこい」

「あーあ」

さらに、節子が問いただした。

「ところで、遠くってどこいくのさ」

「あーん？春光台」

「春光台？…そうかい、遠くへ行くときは、行き先だけは言っていないとだめだよ」

「わかったって」

準備の整った正太は、プラスチックで出来たケースにビニール袋を入れて自転車の方へ歩いていった。木製の古びた戸をガラガラと開け自転車を家から押して出た。空を見上げると、うっすらとして、かなり高い位置に、秋を迎える雲があり、半ズボンにTシャツ姿の正太は、大きく深呼吸をした。

「すごいなー、天気いいなあ」

そうして、自転車にまたがりペダルを踏み込んだ。相変わらずキーコラ、キーコラと、日曜日の朝に正太の自転車の音が響いていた。

集合場所の学校のグラウンドでは、正太が一番乗りだったらしく、まだ誰も来ていなかった。正太は、中くらいの高さの鉄棒にぶら下がり、坂上がりを一回した。続けて二回目を回ろうとしたとき、途中で回転を止めて逆さの状態で、じっと秋雲を眺めていた。この澄みきった空が、やがて極寒の冬になる前の序章でもある。ぶらぶらと揺れながら、もう一度感動していた。

「どうして、こんなにきれいなんだろう…そういえば理科時間に、秋の空のことを言ってたような気もする…」

と、そのとき正太の顔の前に、美奈の顔が飛び込んできた。

「なにやってんの？」

「はっ！」と、驚いた正太が鉄棒から落ちた。ドサッ！

「いてー…ツツツ」

「ハハハハ…」と、美奈が笑う。それに対して、正太が言った。

「ひどいなー…脅かすなよ」

「ごめん、ごめん」

そうして、逆さになった美奈の笑顔が、正太が起きあがると同時に回転して、普通の状態に戻った。

「まったく、東京娘は困ったもんだ…ハハハ…」

と、言って正太も笑って応えた。美奈は、赤に水玉の柄の服地に白のフリルが付いた襟の服を着ていて、その装いにあらためて驚いた正太が、美奈の服を指さして言った。

「それー？汚れるぞー。汚いところに行くんだから…」

「あっ！これ？…いいんだ、これもう小さくなってきたから…」

「ふーん？」

と、正太は首を傾げた。

「ねえ、東京では山とか川に遊びに行くの？」

「いやー、行ったことないよ。だから行ってみたくてハハハ…」

「そうか？」

と、そのとき哲朗が現れた。哲朗は荒い息をして全速力で来たようだった。

「まったー？…あれ一次郎は？」

「まだ、来てないよ」

と、言うとき哲朗は少し笑みを浮かべて言った。

「あいつ、学校だけかと思ったら、こういうときも遅刻するんだな」

「ハハハ…」

「ハハハ…」

と、三人して笑った。そこへ次郎が、ゆっくりと自転車を漕ぎながら現れた。

「あいつ来た…おーそーいぞー！」と、哲朗が言った。

次郎は、ニヤリと笑って見せた。

「おう、悪い悪い。かーちゃんがどうしても、飯喰ってけっていつて遅くなった」

「それじゃあ、行くか」

と、正太が言った。

「自転車ここに置いて行くのか？」

「おう、そうするべ」

そう行って、三人は自転車を垣根の脇にカギを掛けて止めた。春光台は、遠いのでバスに乗っていくのである。それぞれ、カギを掛け終えた三人は、美奈を連れてバス停へと向かった。

バス停に着くと、春光台行きのバスが来たが、乗るのは彼ら四人だけだった。プアーンというクラクションの後、ゆっくりと揺れながらバスが走り出した。バスの中は結構空いていて、正太たちは一番後ろの一段高くなっている椅子に並んで座った。窓の外からは、少しずつ太陽が高い位置へと向かって移動を始め、その日は間違いなく、残暑が

予想された。美奈は、左の窓側に座り、外を眺めていた。次郎が正太の顔を見て言った。

「ほんとうに、採れるかな山椒魚…」

すると、哲朗が言い出した。

「いや、大丈夫だって…おれ、いろいろと情報を集めたよ、いい場所知ってた。」

「ほんとかよー」と、次郎がほほえみ、正太もうなずいていた。

美奈は、窓から正太たちの方を向き笑った。

バスに乗っている時間がかなり経ち、目的の停留場が近づいていた。バスは、ブレーキを踏んだ後に、プシュッと排圧を逃がす音が時折聞こえていた。

「おい、次か？」と、次郎が言う。

「おー、そうだ」と哲朗が、降車の合図のボタンを押した。ガーッと鈍い音を立てて、次の停留場で停車と知らせるランプが点いた。バスは、停留場に近づき、だんだんと速度を落とし、正太たちはバスが完全に止まる前から立ち上がり、出口に揺れながら歩いて行った。やがて、バスは停車し、そのブレーキのショックで正太たちは、前傾姿勢となった。小銭を料金箱に入れて、正太たちはバスを降りた。

「あれー？」と、正太が頭を掻く。もう少し先の春光台の山の麓に、もうひとつ停留場が見えて、バスはそこへと向かっていた。慌てた、表情をした次郎が言った。

「しまった！降りるの一つ早かった」

「たくもー…、あんなとこまで歩くのー」

「いいべや、歩くって健康にいいんだぞー」

と、次郎が言い訳のようなことを言った。そのようすに美奈が笑っていた。

「いいじゃん、歩こう」と、美奈は軽く応えた。といってもバスはもう行ってしまったので、歩くしか手段は残されていなかった。四人は、未舗装の道路を歩き、残暑の暑さを味わっていた。丁度、春光台の麓から百メートルほど差し掛かった辺りで、防空壕の跡に差し掛かった。

「美奈…これ防空壕だぞ」

と、正太が言った。

「防空壕？って何」

そこで、自慢気に哲朗が説明した。

「防空壕って戦争の時、空襲から避けるために隠れた穴のことだよ」

「へえー、中に入ってみようか？」

と、好奇心旺盛な美奈が言った。それに、慌てた次郎が言った。

「バカ言え、こんなところに入ったら、バチあたるぞ！…それに骨があるかもしれないし…」

「面白そうじゃん入ってみようよ」と、次郎の言葉にお構いなく、美奈は言った。

「おー、入ってみるか？」

「入ってみ・る・か？」

正太は、次郎の顔を見て言った。

「次郎は、入らないんだろ…おいてくぞ」

「ちょっ・ちょっと待てよ。おれだって入るさ…でも、やばいと思うよ…」

と、次郎は小言を言った。

四人はミステリアスな、空間へと入るため、表情が強ばっていた。正太、美奈、哲朗、次郎の順番で、ゆっくりと防空壕の入り口から入って行った。防空壕の入り口は、コンクリートで馬蹄形に作られていて、中へはひんやりとした階段で降りて行くのである。当然中は奥へ行くにしたがって真っ暗な闇と化し、奥からは、ポタンポタンと滴が落ちる音がこだましてくるのである。足元は、濁った浅い水溜まりとなり、セルロイド製の壊れた人形が、正太たちの歩いた後の水溜まりの波紋で揺れて、目をパチクリと開いたり閉じたりを繰り返していた。次郎が震える声で言った。

「ヤバイよ…何か出て来そうだよ」

「怖いなら、戻ってもいいぞ次郎」

哲朗は、二人の会話とは別に、防空壕の壁面などを眺めて言った。

「すげえなー。こんなところに隠れてたのか？…」

「ああ、せまいんだな」

と、正太が言った。美奈も口を開けたまま、辺りを見回し言った。

「すごいねー、隠れてた人は助かったんだろうか？」

と、そのとき正太が、大声を出した。

「うわー！」

その声で四人は全員一斉に泥水の中を走り出して、明るい防空壕の外を目指した。慌てた次郎は、足をすべらし泥水の中に転んだ。

「痛ってー！」

そうして、再び立ち上がり四人とも防空壕の外に出た。次郎が憤慨して、言った。

「ひでえーな正太…どうしたんだよ、急に大声だして…」

「どう？驚いた？…」

「ひどいよ…」と哲朗が言った。

「ハハハ…あーあ、驚いた」と美奈は、笑いながら言った。

「美奈。お前が変なこと言うからだぞ」

と、次郎が言った。

「おもしろかったから、いいじゃない」

と、美奈は言い、つけ加えるように正太も言った。

「そうだよ。次郎がドジだから、はまっただけさ…ハハハ…」

「チェッ！」

と、次郎が足を押さえて言った。そうして、また春光台へと向けて歩きだした。

麓に着くと、哲朗が先頭となり調べてきた場所へと誘導していた。上り坂は、火山灰の地質で、雨の濁流の跡で地面には、かなり深くねった溝が幾本も、刻まれていた。正太たちは、その溝をピョンピョンと飛び越えるようにして、渡って行った。辺りの草原には、もうススキが繁っていた。空は相変わらず、秋のウロコ雲が、まるで動きを止めたようにたたずみ、空気も澄み切っていた。丘に上がると、市内が見渡せた。次郎が言った。

「哲朗。ほんとに場所わかってるんだろうな」

「ああ、任せておけって」

そういつて、ススキを一本むしり取り、それを振り回しながら先導をきった。やがて、道は二手に別れていたが、哲朗はどっちにも進もうとしなかった。

「えーと？…ここを真っ直ぐだよ」

そう言って、哲朗はしげみの中に入って行った。

「ここ？」

「ああ」

そう言って、ほかの三人もしげみに入って行った。

しげみの中は、背の高い草で正太たちの姿は完全に隠されていた。さらに、足元はデコボコで、ゆっくりと進んで行った。少し進むと、草丈が低いところがあり、その周辺は雨水によってできた、水溜まりがあちこちに見られた。

「気をつけないと、ぬかるぞ」

「おお」

そう言いながら、さらに進んで行った。正太は、水溜まりの中に山椒魚の卵がないか、確認しながら進んで行った。

「哲朗。まだ進むのか？」と、正太が言った。

「小さい木がある辺りに、たくさんあったって言ってたぞ」

次郎がそれを聞いて言った。

「おい。…あの木じゃないのか？」

次郎の指さした先には、背の低い広葉樹が数本並ぶようにして、立っていた。

「あれだ、あれ…」

と、哲朗が叫び早歩きを始めた。走れるほど足場が良いわけではないので、気持ちは先に行っているのだが、なかなか先には進まないのである。そのとき哲朗が、中くらいの水溜まりに足を落とした。

バシャッ！「うわっ！」という音ともに水しぶきが立ち上がり、正太にもそのしぶきが掛かった。

「つめてー！…汚ねーな」

と言って、正太は手に付いた泥水の滴を、振り払った。

「わるい、わるい…いやーつめてー」

と、哲朗が苦笑いをした。

広葉樹の側まで、近づくとそこには、幅一メートル、長さ三メートルほどの水溜まりがあり、水の中を覗くと黄土色になって枯れている草と葉が底を埋め尽くしていた。正太たちは恐る恐る近づき、水溜まりの中を覗いた。足元は、水溜まりの際に差し掛かると、ブチュブチュと鈍い音を立てて、陸地にある枯れ草の間から、濁った水が湧き出てきた。

「おい、どうだいるか」

「あっゲンゴロウ！」

と、哲朗が言った。

「ゲンゴロウじゃなくて、た・ま・ごだよ」

なぜか、皆は小さな声で会話していた。水溜まりの水面には、数匹のアメンボが波紋を立てて泳いでいた。そのとき、美奈が叫んだ。

「ねー。これのこと？…変なのあるよ、ここに」

と、指を差した。

「どらどら…」

と三人は、近寄って行った。

「あったー！」

「やったー！ハハハ…」

そう言って、四人はその周辺にしゃがみ込んだ。太陽は高くなり、汗が流れていた。水の中には、たくさんの寒天状の卵があり、それらは水溜まりの中央部に漂っていたため、正太が手を入れて採ろうとしたが、届かなかった。

「くそー、採れないぞー…」

と、正太が言うと、次郎が正太の顔を見て言った。

「じゃ、おれやってみるわ…」

と、言って一メートル幅の水溜まりを跨いだ。

「いいぞ、次郎」

と正太が言った。股を大きく開き、かがんで水溜まりの中に手を入れた。寒天状の卵に、次郎の手が届いた。

「ヤ・ヤッター！…ほら、早く受け取れよ」

「おお、…よし離していいぞ」

寒天状の卵は、正太の手に渡った。正太は、すぐに持ってきたビニール袋に卵を入れた。美奈がその光景を見て言った。

「ちょっと、触らせて…」

「気持ち悪いぞ…きっと」

「ほんと？」

それでも、ビニール袋の方に目が行っている美奈の方に正太は、袋を広げ差し出した。

「ほらー」

美奈は、おっかなビックリと寒天状の卵の表面に触れたのである。

「うわーっ？へんなのー…これ生きてるの？」

「生きてるよ」と、哲朗が言った。

次郎は、もう一度手を水の中に入れて、次の固まりを採り哲朗に差し出した。

「哲朗。はやく…」

「おお。ほら…いいぞ」

と、そのとき百メートルほど離れた、場所にドカーンというものすごい音を立てて、黒煙が上がった。四人は驚き、その黒煙の方を見た。

「なんだ？」

と、次の瞬間、それよりももう少し手前に、二回目の爆発が起きた。

「おい！たいへんだ…じ・自衛隊の弾だ」

と、正太が言った。水溜まりを跨いでいた、次郎が慌てて元に戻った。

「みんな、にげろー」

そう言って、正太たちは全速力で荒れたしげみの中を、走り出したのである。しげみに入ってきたときは、早歩きしか出来なかった四人であるが、危機を感じたときは、まったくの別ものであった。ガサガサと深い丈の草原を抜けて、砂利混じりの道路までたどりついた。四人は、かなり荒くハアハア…と息をしながら、少しのあいだ沈黙が続いた。

「あーあ、…助かったハアハア…」

その直後に、草原の中には数発の大砲弾が打ち込まれたのである。

「おかしいな。ここ演習場なんて聞いてないぞ…」

「あっ！…これ」

そして、次郎が指さした先には、木製の腐れかけた小さな看板があり、そこには『自衛隊演習地に付き立ち入りを禁ずる！』と書かれていた。

「…こんなの、来たときからあったかー？」

「ないよな…」

「だって、入った場所と違うから…」

演習地には、バラ線ひとつなく、どこからが演習地かまったく分からない状態だった。バラ線が張り巡らされていたのは、立て看板の周り数メートルだけであった。落ち着きを取り戻した四人は、ゆっくりと歩きながら話した。

「ひどいよな、自衛隊も」

「ああ、…でもほら！」

と、哲朗がビニールに入れられた山椒魚の卵を見せた。

「あっ。おれのがないぞ」

と、次郎が抗議した。それに対して正太が言った。

「いいよ、おれのこんなにあるから、分けてやるよ」

「ほんとか？」

「ああ」

美奈もその光景を見て言った。

「ねえ！それ少し分けて、小坂先生に渡したら…」

「あいつに分けてどうするんだよ」

「教室で飼うの」

哲朗が左の手のひらに右手の拳をパチンとたたきつけて言った。

「名案だ！」

そうして、案がまとまったのである。

－ 町外れの良太 －

そうして、正太たちは丘を降りるため来るときに登ってきた火山灰の坂を下って行った。と、麓まで降りると。左手の小川が流れている辺りに、少年たちがたむろしていた。正太たちは、何をしているのか気になった。

「哲朗、あそこでなんか採ってるぞ」

「なに採ってんだ？」

「行ってみるべ」

「おお」

そうして、四人は小川の方に歩いて行った。そこには、春光台を遊びの縄張りとする少年たちがいて、皆小川にに手を入れていた。正太が鼻を垂らした一人の少年に話しかけた。

「なに、採ってんだ？」

「あー？ザリガニさ」

驚いた表情をした、哲朗が目を丸くして言った。

「ザリガニが採れるのか？」

「ああ、…ほらっ」

そう言って少年は、錆びた空き缶の中を見せた。その中には、三センチほどの赤茶色のザリガニが、入っていた。その瞬間少年は鼻をすすった。次郎がのぞき込みながら言った。

「いっぱいいるのか？」

「ああ、…なんぼでも採れるさ」

正太が少年の顔をのぞき込むようにして言った。

「おれたちもここで採っていいか？…町からきたからザリガニ採ったことないんだよ」

「おう、いいぞ教えてやるよ…ついてこいよ」

そう言って少し上流に上がって行った。美奈が哲朗の手の中にある空き缶の中を歩きながら覗いた。

「どれどれ…どんなの…あっ、かわいいハハハ…」

少し登ったところで、少年が止まった。少年は、小川の方を指さして、手を川の中に入れた。

「いいか。…こうやって石ごとすくうようにして、採るんだ」少年は、砂利をすくい上げて、手のひらを広げてみせた。

「ああ、残念、入ってない…でもこうやってすくうと、砂利に混じってザリガニが入っているから…やってみろよ」

正太がいち早く、川に手を入れた。ザザザ…と音を立てて小川の底が一瞬濁り、正太の手の中に砂利が握られて、指の隙間から濁った水がこぼれ落ちた。正太はゆっくりと手を広げた。

「こうか？…」

「ああ、そうだ。…あっ！入ってる…ほら逃がすなよ。いるぞ」

「あっ！ほんとだ」

そうして、正太は慌ててプラスチックの容器に、採ったザリガニを入れた。それを見た次郎と哲朗が慌てながら、小川に手を入れた。

「おれもやるよ」

「おれもだ」

しかし、正太が採ったのは、偶然でそんなに簡単には、採れないようだった。美奈は、正太の採ったプラスチックの中のザリガニをじっくりと眺めていた。今度は、哲朗が声を上げた。

「やったー！でっけえぞ」

そうして、哲朗の右手には他のよりかなり大きいのが、入っている。

「いてー・いてて」

哲朗は、ザリガニの爪に挟まれて、悲鳴を上げた。その光景を見て次郎が大笑いしている。

「哲朗、ザリガニに遊ばれてるぞ」

「うるせー」

と、言って哲朗もケースに入れた。今度は美奈が哲朗の採った大きなのをマジマジと見ていた。

「やったねー」

と言って、次郎がザリガニを右手で上げて、何とか一匹採ることができたのである。結局成果としては、正太と哲朗が各二匹、次郎が一匹ということで合計五匹も採ることができたのである。正太は、採り方を教えてくれた少年に近づいた。

「結構採れたよ」

「ああ、そうか俺たちは、毎日来てるからもっと採ってるよ」

「ところで、名前なんて言うんだ？」

「小室…みんな良太って呼んでるよ」

「おれは、間宮…正太でいいよ…また来るから仲良くしようぜ」

「ああいいよ」

そう言って、良太と正太たちは、友だちになってしまった。正太たちは、良太に別れを告げた。

「じゃあまたな…」

「おお、またな…」

四人と良太は、お互いに手を振りながら去って行った。やがて、バス停から正太たちは、プラスチックケースを大事に抱えて、市内中心部行きのバスに乗り込み、春光台を後にした。

ー全校朝礼の朝ー

一夜明けた朝、学校内では全校朝礼のためザワザワとしていた。哲朗は、昨日決定したように山椒魚の卵をビニール袋に入れて、持ってきていた。ざわめいている教室内では、他の生徒に自慢するように山椒魚を見せていたのである。美奈は、女子生徒の集団の中に入り、話をしていたが一瞬正太たちの方を見て、ニヤッと笑ったのである。女子生徒の一人、川治が言った。

「ちょっと、哲朗何持ってきたんだろう」

「なんか、カエルだか山椒魚だかの卵だとか言ってたよ」

と、それに対して塚田昌子が言った。他の者も次々に「きもちわるーい」と言った。しかし、美奈はそれを聞いて何も言わず、ただ思いだしたように笑っているだけだった。

とその時、校内放送がかかった。

「全校朝礼が始まりますので体育館に集合してください」

と、放送部の女子生徒が放送し、その放送後、哲朗はビニール袋を机の上に置き、みんなと一緒に体育館へと向かったのである。体育館へ向かう廊下の床は、ミシミシときしむ音がこだまし、廊下の壁には、生徒たちの習字や絵が、飾られていた。階段を降りて、理科室の前に差し掛かった。理科室の中には、人体の勉強をするために使われるガイ

コツや、いろいろな動物の剥製やホルマリン浸けがほこりをかぶって無造作に陳列されているのが見えた。体育館の入り口に到着すると、入り口の両わきには、『週番』と書いてある腕章を左腕にした生徒が目を光らせていた。ザワザワと生徒たちは、天井の高い木造の体育館の中へ入って行った。体育館の天井は、かなり太い木の柱が交互に渡されていて、柱となっている木は、所々ひび割れが入っているのが目立っている。前方には、一メートル五〇センチ程の高さの演壇があり、そこには司会の先生が歩き回っていた。

「小さい前並え！」

担任の小坂が、号令をかけて生徒たちを背の小さい順番に並ばせた。生徒たちは、両手を脇に付けて手を前の方へ伸ばして、間隔を整えた。背の低い慎一郎が、後ろの中島に手の先で、頭をどつかれていたずらをされていた。慎一郎は、目を細めて振り返りながら睨んだ。そこへ担任の小坂が叫んだ。

「シン！前を向け」

慎一郎は、背が低いため前の方で目立ち、小坂には中島がいたずらしたのを、発見することが出来なかったのである。慎一郎は、シブシブ前を向いた。中島は、ニヤニヤと笑っていた。その時、マイクの声が館内をこだました。

「あーあ。ただいまマイクの試験中…」

「あー、静かに」

マイクから声を出しているのは、音楽担当の柳田だった。柳田は、細い体に尖った顔をしており、目付きも陰しか

った。普段は優しいのであるが怒ると結構怖い存在でもあった。

生徒たちは、除々に静かになっていき、演壇側へと集中していった。柳田がマイクで話だした。

「えー、と今日は校長先生よりお話がありますが、少しざわめいているので静かにしないと校長先生が話をすることができません…」

館内は少し、静かになったが数人の生徒がまだヒソヒソ話をしているようで、その声は、やはり目立つ存在となった。と、突然柳田がものすごい剣幕で叫んだ。

「静かにしろ！」

その声は、体育館から教室まで響くほどのものすごい迫力だったので、生徒たちの話は、ピタリと止まりたいへん緊張したものへと一変した。館内は、シーンとなり沈黙が続いていた。柳田の目は光り、彼は左手で拳を作り自分の顔の前に持ってきて、腕時計をじっと見ていた。シーンとなった体育館の外からは、スズメのチュンチュンという音だけが聞こえてきた。なおも、長い長い沈黙が続き丁度一分が過ぎたところで、柳田が口を開いた。

「よーし、一分だ。いいかお前ら、時間というのは大切にしなければならん。一人でも規則を守れない奴がいたら、全部に影響するんだ。今お前らは、一分間という時間がどれだけ長い時間なのか良く分かったと思う。おしゃべりしていたらこんなに長い時間があっという間に過ぎていくんだぞ。分かったな…それでは、校長先生お願いします」

そうして、それ以後生徒たちは、完全に静かになり校長が演壇の中央にゆっくりと歩いてきた。

「おはようございます…」

「お・は・よう・ございます！」

という生徒たちの元気な声が体育館にこだました。

「えー、今日も天気が良く、実にすがすがしい日ですね。柳田先生がおっしゃられたように、時間というのは大切にしなければなりません…」

校長の長い、話が始まった。正太たちも、じっとがまんして話を聞き入っていた。しかし、長い時間の朝礼となると、決まって倒れたり、しゃがみ込んだりするものが登場するものである。一人が倒れれば次々に倒れていった。月曜の朝は決まって全校朝礼なのである。校長の話が終わると、生徒会長が出てきて連絡事項を告げた。

「今日は、一時間目に学校の周りの清掃をします…」

そうして、連絡を告げたあと、長い朝礼が終わり、教室へと向かった。

ーにぎわう清掃ー

生徒会長から連絡で、その日の一時間目は、学校の周りの清掃をすることになっていた。

「さあ、グラウンドに行って石拾いだぞ…いくぞ」

全員が席を立ったので、椅子を引きずる音がガガガ…と響き、担任の小坂は、生徒を連れて教室を後にした。

グラウンドに出た正太たちは、数人がブリキ製のバケツを持たされて、残った生徒は、一斉に横一列に並び石拾いを始めたのである。さらに、石を拾う担当とは別にゴミを拾う担当がいて、その生徒は、ゴミ拾い用のゴミバサミを持ち、他のものはそのゴミを受けるためのビニール袋を持参した。正太たちは、石拾いをしていた。次郎が調子よく、連続して石を拾った。

「哲朗。遅いぞ！おれこんなに拾ったもんね」

「ハハハ…、おれなんか大きな石を集めてるから…ほら！」

そう言って、哲朗が手の中にある石を見せた。それに対して、次郎が反論した。

「あっ！だめなんだぞー…選んで拾っちゃ」

正太は、バケツを持っていた。

「次郎、早く持ってこいよー」

そう言って、バケツの中を見せた。バケツの中には数人によって拾い集められた石が沢山入っていた。哲朗は、大きめの石を集めていたので、重たく感じてきて、次郎より先に正太のバケツへと向かった。

「入れるぞ！」

「おー」

そう言って、少しバケツを下げた。ガラン・ガランという音を立てて、哲朗の手からバケツに石が投げ入れられた。

「うわー、重てー…だめだ哲朗片方持ってくれ」

そう言って哲朗の助けを求めた。哲朗は、バケツの取っ手をもち、重くなったバケツを二人で移動することにした。

「おい、ちょっと待てよ」

と石拾いをしている生徒に、正太が告げると。待機していたリヤカーへ、バケツの中の石を捨てに行った。

ザッザッザッ…と重たい足どりでリヤカーまでたどり着き、正太と哲朗は、腰を入れた。

「せーのー」

というかけ声で、二人はバケツを持ち上げて、リヤカーの中にバケツの石がガランガランと移された。リヤカーを押しているのは、用務員のおじさんでグレーの制服に手ぬぐいを首にぶら下げて、時折顔の汗を拭っていた。

「いっぱい拾ってきたなーハハハ…」

と、おじさんが言った。

「ハハハ…」と、正太と哲朗が笑いながら、空になったブリキのバケツをぶら下げて、みんなのところへ戻って行った。

ゴミ拾いの生徒たちは、ゴミバサミを使って、丹念に落ちているゴミを拾っていた。落ちている物の中には、アイスクャンデーの包やちりかみ、ビンの蓋と多種多彩なものが、落ちていた。拾い出すと、ビニール袋はすぐにいっぱいになっていった。これらも、ビニール袋がいっぱいになると、もう一台のリヤカーが待機していて、それらの上に集められていた。これらの清掃は、定期的に行われていた。

校舎の裏側では、小さな野菜畑があり、かぼちゃやなすび、トマトなどが植えてあり、定期的に生徒たちが管理をしている。これらの、野菜は時折もぎ取られ、生徒たちのおやつとして、与えられていた。

やがて一時間目の終わりの時間が迫り、清掃は終わった。

－小坂の理科－

清掃を終えて、教室に戻ると哲朗は、すぐにビニール袋の中の、山椒魚の卵をのぞき込んだ。

「あーあ？…なんかぬるくなってるなー大丈夫かな」

「そんなん、大丈夫大丈夫」

と、正太が言った。他の男子生徒たちも哲朗の周りに集まり、袋の卵を見ていた。

「どらどら。見せて見ろーよー」

と、影山が言った。

哲朗が影山に袋を見せると彼は、首を傾げながら言った。

「おれの取ってきたのより、なんか大きいな？」

と、そのとき担任の小坂が、入ってきた。哲朗はすかさず、ビニール袋を持って小坂のほうに進み出て言った。

「先生、これ？」

「うむっ？…おおなかなか面白いものを採ってきたな」

「はい。…これ教室で飼ったらいいと思って…」

「…そうだな、それはいい考えだ。何になるか楽しみだな哲朗。じゃあ、哲朗を飼育係りにするから面倒をしっかりと見ろよ…」

「あー？はい」

「みんな、哲朗がカエルの卵を持ってきたから教室の…」

「せ・先生これ山椒魚だってば」

「あっ？そうか山椒魚か…悪い悪い。えーとだから教室の後ろで飼います。みんなどういふふうに変化していくか観

察してください。…哲朗。じゃあ預かろう後で、ケースに入れて置くからな」

そう言って小坂は、ビニール袋を受け取った。

二時間目の授業は、小坂の理科で実験の日だった。教室では、グループごとになって行われるため、机を班ごとに固めた。机の上には、小坂が箱に入れて持ってきたビーカー、フラスコ、アルコールランプなどを配置し、実験の準備が整いつつあった。そこで、小坂が教壇で話始めた。

「えーと、今日は五八ページの酸素、二酸化炭素というところを勉強します」

そうして、生徒たちは、実験となると少し開放された気分になり、ざわめきがあった。生徒たちは、小坂に言われたように、教科書の五八ページを開きノートとシャープペンシルをカチカチとやり始めた。

「えー、このわたしたちの地球上の表面には、酸素や二酸化炭素などの気体があり、そのお陰で植物や動物…つまりわたしたちも含めて、呼吸をして生きていくことができます」

生徒たちはうなずき、小坂の話は続いた。

「それで、今日は二酸化マンガンを使って、酸素を発生させてみましょう」

次郎は素朴に質問を小坂に向けた。

「先生、植物も息するんですか」

小坂は、笑みを浮かべて応えた。

「次郎、なかなか良い質問だ。…でも次郎、これは先週勉強したところだぞ。なあ哲朗」

哲朗は、理科にはすこぶる強かった。得意気になって哲朗が応えた。

「はい、植物は太陽の光で光合成をするので、二酸化炭素を吸って酸素を吐き出します」

「そうだな…次郎分かったか」

「あー？はい」と、言って首を傾げた。哲朗がそのようすを見て、小さな声で言った。

「次郎。わからなかったら後で教えてやるよ」

次郎は、うなづいた。

「えーと、今回の実験ですが、アルコール・ランプを使いますので、取扱いには、充分注意してください…いいか影山」

「あっ、はい」

アルコール・ランプを使う場合は、小坂も危険がともなうので、充分な注意が要された。実験が始まり、フラスコの下で青白くほのぼのとした火が、ともされていた。着火には、マッチが使われてマッチの使い方に慣れていない生徒が、うまく火を付けることができずに、マッチの軸を数本折っている姿も見えた。不慣れな生徒には、周りの生徒が笑い、そして出来る者が代わりに火を付けていた。そうして、小坂の神経質な目が光る中で、二時間目の実験は何事も起こらず続いていった。

－給食当番－

午前中の授業を終えた教室では、給食当番の生徒が白い帽子に、白い割烹着姿で、給食のワゴンをもらいに行った。今日の当番は、幸田と慎一郎と数人の生徒だった。幸田と慎一郎は、給食のワゴンをもらうため、給食のワゴン置き場にたどり着いていた。

「シン。うちのは、これだよ…そっち持てよ」

と、幸田が慎一郎に言った。慎一郎は、首を縦に振り、ワゴンを押そうとしたが、持とうとした右手が、熱くなっている鍋の縁についたので、飛び上がってしまった。

「イッチー！」

そうして、左手で右手を押さえたり、右手を振ったりしていた。そのようすに幸田が近寄ってきた。

「だいじょうぶかシン」

慎一郎は、真っ赤な顔をして言った。

「だいじょうぶ…」

そうして、右手を確認するように眺めてから、もう一度、ワゴンを押して行った。ワゴンは、不規則な床板に邪魔されて、多少左右に揺れながら階段までを移動した。給食の時間となると、各教室は、ざわめいていた。他のクラスの給食係りの生徒も順番に、ワゴンを各教室に移動していた。丁度階段に差し掛かったとき、ワゴンが押せない状態

となるので、幸田と慎一郎は、ワゴンを持ち上げる形となる。ワゴンを持って階段を登る作業はかなりの重労働なので、低学年は、上級生に手伝ってもらう仕組みになっていた。幸田が気合いをかけた。

「シン、持ち上げるぞ。せーの」

「せーの」

そうして、幸田と慎一郎は、ワゴンを持ち上げて階段を一步ずつ上がって行った。慎一郎は相変わらず。目を細めていた。そのとき、上から女子生徒がものすごい勢いで、階段を掛け降りてきた。ダダダ…

「うわー！」

「きゃー！」

その女子生徒たちと、ぶつかりそうになって、もう少しで給食の入ったワゴンをひっくり返しそうになったが、何とか惨事は避けた二人だった。

「あぶないべやー…気をつけろー」

幸田が女子生徒に言った。慎一郎も目を細めて睨んでいた。それに対して女子生徒が素直に謝った。

「ごめんごめん」

これが幸田でなかったら、女子生徒は知らない顔をして、去って行ったということが、慎一郎には分かっている、むなしい表情をした。その表情を見て幸田が慎一郎に言った。

「シンどうした？いくぞ！」

「ああ」

と情けない声を出して。階段を最上段まで上り詰めた。

「はあー」

「ふうー」

と二人は、ため息を付き、教室からはにぎわいの声が響きわたっていた。おなじクラスの他の給食係りは、既に到着していて、幸田たちが到着すると、各生徒に配膳をすることになっていた。

「おー来た来た」

「早く早く」

と、教室内の生徒たちが叫んでいた。この日の給食のメニューは、コッペパンに牛乳にスープ、鯨肉を揚げた物等で、特に鯨肉を揚げたものは、生徒からの人気を呼んでいた。鯨肉を見つけた生徒たちは、互いに声を出して、喜んでいた。

「やった！今日はくじらだ」

「あーあ、ほんとだ」

「やったねー」

配膳を待つ生徒たちは、アルミ製の大きな皿を保ち、大きな皿は4つのくぼみがあり、それぞれにパンやおかずを盛りつけられていた。もうひとつは、アルミ製のボール状のカップがあり、そこには大根と人参を千切りにしたスープが注がれていた。生徒は、順番に盛りつけされた、食器を各机の上の色とりどりなナプキンの上に置き、食事の合図が出るのを待っていた。

まだ、並んでいる次郎が、慎一郎に言った。

「シン、おれにそれ沢山入れろよ」

と、クジラ肉を指さしている次郎に、同じ給食係りの小宮民子が言い返した。

「だめだよ次郎！一人分は決まってんだから…」

「ちえーうるさいやつ」

その様子を見て慎一郎が、ニヤニヤと笑った。やがて、全員に給食が行き渡り席についた。

「いただきます」

という号令で、小坂も生徒も一緒になって給食を食べ始めた。

正太は、まずコッペパンにかぶりつき、牛乳の紙でできている蓋を上手に開けた。中には、蓋を開けるのが苦手な者もいて、ズボッと牛乳ビンの中に指を入れてしまう生徒もいるのである。

「うわっ！」

と、次郎が悲鳴を上げた。どうやら、次郎も牛乳の蓋を開けるのが苦手な一人だったらしく、ビンの中に指を入れてしまったようである。周りにいる生徒からは、笑いが出る。

「やった！やったー！ハハハ…」

「うるせー、失敗したんだよ」

そう言って、次郎は自分の親指をくわえて牛乳をなめていた。

この牛乳の蓋を集める専門の生徒もいた。影山である。

「シン、蓋くれよー」

「ああ」

慎一郎は、開けた蓋を影山に渡した。給食の時間も半ばを過ぎると、男子生徒はほとんどのものが、食事を終えていて今度は、女子生徒にいたずらをしにいくのである。牛乳を飲んでいる松本の前に次郎が行った。

「ベロベロ…」

と言って、相手が吹き出しそうな顔をして、笑わすのである。と、そのとたんに「ボハーッ！」と松本は次郎の顔に、牛乳を吐きだした。

「うわー！…汚たねー」

そこで、担任の小坂が言った。

「次郎。自業自得だな…お前が悪いんだぞ…まあ、好きな人にはいたずらをするというからな…」

「ウワーイ！ウワーイ！」

と言って他の生徒たちが、喜んでいた。次郎は真っ赤な顔をして言い返した。

「先生、違うって！」

「おお、むきになったなハハハ…」

そのようすにハンカチで口を拭いた、松本も真っ赤な顔をしていた。

給食を残すのは、女子生徒が多く、学校のきまりで給食を残してはいけないことになっていた。そういった時も必ず男子生徒が、文句を言うのである。

「あっ！だめなんだぞー残したら…」

と、哲朗が人参を残している田中に言った。田中は渋い顔をしていたら横に座っていた、川治が言った。

「ケー。鼻つまんで食べちゃいな」

田中は、いやいや鼻をつまんで人参を口に放り込んだ。そうして、人参が喉を過ぎるとハァーとため息をついていた。

やがて、給食の時間が過ぎて、号令がかかった。

「ごちそうさまでした」

－影山の家でのパッチー

放課後になって、その日は影山の家前でパッチ（めんこ）をすることになっていた。影山の家は看板屋で正面玄関は、車が二台入れるような間取りとなっていて少年たちは、その空きスペースを利用してパッチを楽しむのである。車庫兼作業場の周りには数々の看板の材料になる板やブリキ板、さらにはペンキなどが置かれていた。中央には、ダンボールで作られたパッチをするための台が置かれていて、それぞれに持ち込まれたパッチが台の上で闘いをしていった。中には大きいパッチ、小さいパッチと等級があり、等級別に勝負されるのであるが無差別級のパッチ合戦には、力が入るのである。いちばん小さいのは牛乳ビンの蓋である。パッチは、対戦相手のパッチをひっくり返したら相手のパッチをもらえるというルールになっていた。正太も大きなお菓子のガンガンに、きれいに並べられたパッチを持ち歩いていた。そこに、影山の父である宗男がタバコ屋から帰ってきた。

「おー。やっ取るかーハハハ…」

「おじゃましてます」

「おじゃましてまーす」

と少年たちは、口々に挨拶をしていた。

「おお、ゆっくり遊んでいけ」

「はい」

と言って少年たちは、笑顔で応えていた。

「それー！」

「えいやー！」

と、挨拶をするやいなや、パッチ戦が展開された。パチッ！と音がして狙ったパッチがひっくり返ると、相手は「ちくしょー」と悔しそうに叫ぶのである。そんな中、正太は後ろの方で噛んでいたガムをパッチの裏側に貼り付けた、そうして、もう一枚同じ柄のパッチを裏に貼り合わせて、イカサマパッチを作った。それを、こっそりと次郎にだけ見せた。次郎は、それを見てククク…と小さな声で笑いながらうなずいていた。相手は影山で自慢のパッチをダンボールの上の真ん中に堂々と置いた。

「正太の番だぞ…おれの月光仮面は強いぞ、今まで負けたことがないんだ」

「よーし！取ってやる」

と、正太がパッチを親指、人差し指、中指に挟み込み思いきって、パチッ！とやった。月光仮面は、さすがに強く、フワッと少し持ち上がったが、ひっくり返らなかった。

「ハハハ…無駄無駄」と影山が笑いながら、月光仮面のパッチを持ち上げた。

「正太、こんどはその赤影を取ってやる」

そうして、影山は渾身の力を振り絞って、パッチを台に叩きつけた。パチッ！というものすごい音がした。その瞬間、正太のパッチは、ひっくり返ったが、裏側も赤影だったので、ひっくり返らないように見えた。頭を搔きながら、影山が言った。

「あれー？…赤影強いなー」

そのようすを見て、次郎が笑っていた。

「すっげー、月光仮面も強いけど、赤影もな。哲朗、お前の番だぞ」

つぎの瞬間、哲朗のパッチが、台の上で音を立てた。

「あれ、これ強いは」

次は、慎一郎もパッチを乗せて、正太がイカサマパッチを台に叩きつけた。パチッ！という音ともに、ついに月光仮面がひっくり返り、その他のも全部ひっくり返った。

「ああ。月光仮面がやられた」

と、その時、哲朗が首を傾げた。

「ち・ちょっと待って…」

そうして、哲朗は正太のパッチをじっと見た。正太は、ばれそうになったので哲朗の気を引いた。

「どうしたんだよ、哲朗早く次やるぞ」

「あーっ！これー…ずるしてる」

と、哲朗が赤影パッチを持ち上げた。裏表を皆にひっくり返して見せると次郎が突然吹き出した。

「ハハハハ…」

そして、影山が叫んだ。

「正太、ずるいぞ月光仮面を返せ！」

正太は、笑いながら月光仮面のパッチを影山に返した。

「ほらー…ハハハ…だってすぐに気づくと思ったら、皆気づかないんだもなーおかしくて、おかしくてハハハ…」

「ハハハ…これは、おかしいやハハハ…」

皆は、笑い転げていた。

その時、ピーピーピーという音が聞こえ、看板取付に行ってた従業員が戻り、トラックをバックで、作業場に入れようとしてたのである。影山の父宗男が戸を開けて、中から出てきた。

「おーご苦労、ご苦労」

と行ってトラックの方へ近寄った。少年たちは、二台分ある車庫のなかの一角に、パッチの台を移動した。

「ワカ！すまんー」

と従業員が、影山に言ってバックを続けた。影山は、従業員にワカと呼ばれていたのである。従業員の英治が野球

帽をはすかいにかぶり『かんぱんの影山』と横に書き込まれた白いトラックのドアを開けて、降りてきた。

「いやー、今日は暑いっすわー」

「そうか、たいへんだったな。…まあ中に入ってコーラでも飲め」

「ああ、すいやせん」

と言って、英治が笑った。その横では、相変わらずパッチ合戦が開始されていた。英治と宗男が戸を開けて、家の中に入って行った。その直後、影山の母民江が顔を出して言った。

「さー、みんなコーラだよー」

民江の手には、大きなおぼんに乗った、統一されていない様々大きさのグラス にコーラの泡がはじけていた。

「わー！…ああどうも」

「おばさん、どうも」

と、言っておぼんに集まってコーラを美味しそうに飲んだ。

－熊の噴水－

数日後、天気は快晴で、すがすがしい日だった。授業を終えた正太はすでに、自宅に付き、醤油せんべいを一枚口にくわえて、いつものように、自転車にまたがった。

「こらー！正太またかー…カバンをかたずけろー」

と、言う節子の声にも動じずに正太は捨てぜりふを吐いてペダルに力を入れた。

「じゃ、かあちゃん頼んだよ」

「なにが頼んだだよ、まったく…」

正太たちは美奈と待ち合わせをして、常磐公園のボートに乗るため集合することになっていた。メンバーはいつもの次郎、哲朗トリオで、美奈の家の前に集合した。美奈の住んでいるところは学校のすぐ裏で、上下三戸の合計六戸入居されているアパートでかなり古びれていて一階の右端だった。三人が集まったところで、正太がドア・チャイム鳴らした。ブーと鈍い音が聞こえ、ガタゴトと物音がした。うす青色の所々錆びた鉄のドアが、きしむ音とともに開き、真っ黒顔に白い歯が目立つ美奈が顔を出した。

「ああ、きたー…よいしょ」

と言って、赤い短靴を履き、外に出てきた。

「美奈。乗れよ」

「うん」

美奈は、自転車を持っていないため、正太の自転車の荷台に座り二人乗りで、常磐公園まで行くことになった。

「よし、いくぞー」

残暑ともいえる暑さの中、正太たちは自転車をこいでいた。車の多い公園前の道路を横切ると、常磐公園の正門である。正太は、公園内に入ったので、ギヤを一段落として、ペダルを軽くした。美奈が笑いながら言った。

「結構、後ろってお尻がいたいね」

「ああ、そうか座布団でも持ってくればよかったな」

「いいよ」

「そうか」

公園内では、鳩が至るところで餌を啄んでいて、歩いているものの目を楽しませていた。さらに、正門から中に進むと、中島にある上川神社の東宮の屋根が木の陰から見え隠れしていた。その周りには、深緑色の池の一部が回り込んでいた。すでに、何艘もの赤、白、黄色にペンキで書き込まれた番号の付いたボートが池の中に散乱していた。その池の周りをぐるりと周り込むようにして、ボート乗り場まで急いだ。

ボート乗り場まで、到着したが正太たちは、すぐにボートには乗らずに、ボート乗り場の道路を挟んで向かい側に

ある。商店で、チョコ味のドンやビニール入りのジュースを買い込んだ。

「おれ、これー」

「おれは、メロン味」

買い物が終わると、火山灰の道路の真ん中で、正太がボートの料金を、回収し始めた。

「はいはい、割り勘割り勘」

左手の上に並べた、小銭を確認すると、正太はボート乗り場の発券売り場に行って、小銭を出した。

「子ども四人…」

「時間は？三〇分？一時間」

「一時間」

「はい」

そう言って、発券売り場のおばさんは、ニコニコしながら券を正太に渡した。券を受け取った正太が、ボート係りのおじさんに券を渡した。すると、おじさんは、無口のまま四人に手招きをした。残っているボートは五艘で、そのうちの29番と書かれたのが、長いカギ付きの棒で、手繰り寄せられた。四人は乗り場の岸で用意されるボートに近寄った。無表情なボート係りのおじさんは、手と足でボートを固定し、また手招きをした。その指示に正太たちは、哲朗、美奈、正太、次郎の順番で、揺れ動くボートに乗った。ボートは岸から静かに離れて行った。

「最初、おれ漕ぐわ」

と正太が言ってオールを取った。ギーコラギーコラバシャバシャ…と、ボートは池の中央目がけて進んで行った。

「うわー、涼しいー」

「ほんとほんと」

と、美奈の言葉に次郎もうなずいた。

「だけどさ、東京も暑いけど旭川も結構暑いね」と、美奈が言った。

「そうさ、旭川も夏は暑いのだ」と、哲朗が応える。

ボートは池の中央に、進むにつれて他のボートにも近づいて行った。この日も結構ボートは混んでいたもので中央付近と狭い所は、ぶつかりあって進んだ。

「あーあーあー、ぶつかるぶつかる」

と、そのとき向こうからきた、男女の乗ったボートが急速に近づいていた。ガンガガガーと、ぶつかったあと、こするようにしてボートがすれ違った。

「悪いなー、悪い悪い」

と、相手のボートの男がニコニコしながら謝り、通り過ぎようとした。

「いよーっ！御両人、熱いよ」

と、次郎が男女を冷やかすと、女の方が小さな声で「なに？あの子ども」と怪訝な顔をした。男は「いいからいいから、子供なんだからー」と、女に言ってなだめていた。

「ちえーっ、何が子どもだいバロー」

と、次郎が言った。

「しょうがないじゃん。子どもなんだから」

と美奈が言い返した。

その様子に、哲朗と正太は笑っているだけだった。と、哲朗が先ほど買ったチョコ味のドンとビニールのジュースを袋から取り出した。

「ジュース出すよ」

「おお、それぞれ」

そうやって、ボートの後ろに座っていた哲朗が、美奈に袋を手渡した。正太もオールから手を休め、袋を受け取りジュースを取り出した。最後に、ボートの前側に座っている次郎に渡った。ボート乗り場からは制限時間になったボートをスピーカーで、放送を掛けて呼んでいた。

「一二番、五四ばーん。お時間でーす」

正太は、チョコ味のドンをパクつき、ジュースを半分飲むと、「ハアー」というため息をついて、再びオールを漕ぎ

だした。ギーギーという音と、時折ジャバージャバーという、水しぶきの音がしてボートは進んで行った。

「正太、一周してくるべ」

「おお、…じゃあ左から回っていくぞ」

「おお、いけいけー」

池は、二つの中島があり、その島にはそれぞれ一本の橋が掛かっていた。その大きくカーブする右周りのルートに正太は、ボートの向きを向けた。ボートは、後ろ向きに座って漕ぐので、正太は時折後ろを振り返って、進路の確認をしていた。

「あっ、タニシが浮いてる」

「どれどれ」

「ほんとだ」

と、哲朗が池の中のタニシを発見し、次郎がのぞき込んだ。

「なんか、でっかくて気持ち悪いな」

と次郎が言った。美奈は、池の水面に指を付けてみた。シャバシャバという、水を切る音がした。

「冷たいよこれ」

「ヒルが手に付くぞ」

「ヒル！」

と、次郎が脅かした。しかし、哲朗がそれに反論した。

「ヒルなんて、そんな簡単に来ないよ」

「次郎、脅かさないでよ」

「ハハハ…」

と、そのとき正太の漕ぐピッチが上がった。

「よーし、それー」

と、力の入ったボートは、より加速して大きな左側のカーブに差し掛かろうとしていた。左手の岸では、築山の上に小さな屋根付きのベンチがあり、その麓では犬を散歩させている老人が歩いていた。右手の岸は、東宮のある島で緑に囲まれていて、大きな屋根が見えていた。その屋根の上には、複数の鳩が止まっていて、のどかな情景であった。

だんだんとボートが右に曲がって行った。それに伴って、池の幅も狭くなっていった。さらに、ギーコラギーコラと進むと、力が入るにしたがってオールが、水中に入らなくなり空振りして、水しぶきを上げた。その水しぶきが、ボートの上にまで飛んできた。

「キャー！」

「冷てー」

という声が美奈と哲朗から上がった。正太は、二人に笑いながら謝った。

「ハハハ…悪い、悪い」

と、正太は力尽きて、オールを止めて惰性で池の中をボートが滑って行った。それを見た、次郎が腰を上げて言った。

「正太代わるぞ」

「おお…一気に漕ぎすぎた…つかれた」

二人は中腰でボートの中を移動した。ボートは、グラグラと揺れて完全に直立すると転覆を起こしそうであった。

「よいしょ…いいか？」

「おお」

「次郎、早く早く…岸にぶつかる」

「早く」

と哲朗と美奈が叫んだ。次郎は、必死にオールを捌いた。

「任せておけって、オールを握らせたら右にでるものはいないんだから」

見事にコースは、戻りゆっくりとボートは、東宮に架かる橋の下を通過しようとしていた。向こう側からは、他のボートが二艘ほど来ていて狭い橋の下をすれ違った。橋の下は、太陽の光線が閉ざされて、池を反射したユラユラと

揺れる光線が橋の裏側を照らしていた。橋の裏側のコンクリート部分には、ボートが通るたびに誰かがいたずら書きをしたらしく、数々の書き文字が施されていた。

正太たちの乗ったボートとすれ違うボートは橋の下でギリギリの幅で交差しなければならなかった。

「おう、ぎりぎりだなー」とすれ違うボートに乗っていた男が笑いながら言った。すれ違うときは、それぞれのボートがオールを上げてボートの脇にピッタリと付けるようにして、惰性で進んだ。さらに、お互いに手でボートがぶつからないように押し合いながら橋を通り過ぎた。

「やったね！」

と、次郎がいうとほかの者も「やったやった！」と喋って笑った。そうして、次郎の漕ぐボートは、順調に進んで行った。

さらに細い水路を進んで行くと、がちょうがガーガーとけたたましい鳴き声でボートの脇をスイスイと通り過ぎて行った。

「がちょうだ！…」

「がちょうって、頭にコブあるよな」と、次郎が言った。

「ああ、がちょうのコブってなんかごついよな」と、哲朗も言った。

その言葉に美奈は、がちょうに視線を向けて「ほんとだー」と言いながら、手に持っていた、チョコ味のドンを一

掴み、がちょうが気づくように池の中に放り投げた。

「たべるかなー」

「あー、池に投げちゃだめなんだぞー」と、次郎が言ったそのとき、がちょうがそれに気づき、向きを変えてガーガー鳴きながら、正太たちのボートに寄ってきた。

「あー、来た」と正太がボートの先端に座りながら言った。

「あーほんとだ！」

と、その瞬間、グワッグワツとがちょうの声をまねして鳴きながら投げた。がちょうは一瞬にしてドンを食べてしまった。そのようすに、先ほどまでだめだと言ってた、次郎が叫んだ。

「おおー、おもしれーもっとやるべ、もっとやるべ」

と、みんなの顔を見た。その言葉に哲朗が笑いながら応えた。

「おまえ、さっき池に投げたら、だめだって言ったべー」

「ばーか、それは汚すなってことだよ。がちょうがドンを喰うから大丈夫さ」

すると正太が「調子のいいやつ、まるで植木等じゃないか」と言い、美奈が「ほんと」と言った。すると次郎は「おーお、そんなこと言ったら、ボート揺らすぞ」

と、言ってオールを上げて、両手を左右の縁に付けて、体を揺さぶりユラユラと揺さぶりだした。

「うわー！」

「きゃー！」

「やめろー」

という三人である。と、次郎の脇には、がちょうがガーガーと鳴いて、袖をつついていた。次郎は、驚き揺らすのをやめた。

「おお、な・なんだーこいつ、びっくりするなー」

そのようすに、三人が笑い正太が言った。

「がちょうがやめろと言ってんだよ」

「それより、ドンをよこせてさ」

「一度やったらくせになるねこれー」

と、言って美奈が再びドンを池に投げ込み、がちょうに食べさせた。がちょうはドンをやればいくらでも着いてくるようであった。

「まずいよこれー…なんぼでもついてくるよー」

と、正太が言うと、名案でも浮かんだかのように、哲朗が言った。

「そうだ、大量にばら蒔こうよ…そうしたら、食べてるあいだに行ってしまうばいいんだ」

「それは、名案だね」

と言って、美奈がドンを袋の半分ばら蒔いた。

「行けー！」という哲朗と正太の声に、次郎は必死になってオールを漕ぎはじめた。バシャー、バシャーという水しぶきとともにボートは、進んで行った。がちょうたちは、ドンを拾いながら、一瞬目を正太たちの方に向けたがドンを拾っていた。

「やったー！」

「うまくいったよー」

と言った瞬間「あぶない」という、美奈の声がこだました。ドドーンというボート同士がぶつかる音がして、向こうから来ていたボートに体当たりしたのである。先頭に座っていた正太が相手のボートの中に転げ落ちた。

「いてー！…あっ済みません」と言って笑いながら、正太は頭を下げた。相手のボートには少し年輩の夫婦が乗っていて、笑って頭を軽く下げるだけだった。次郎や哲朗、美奈も軽く頭を下げた。

「次郎、こっちによせろよー」と言う正太の声に次郎はボートを寄せ、正太は元のボートに飛び移った。そのあと、相手のボートの夫婦は、

「あっ！ボクこれあげるよ食べな」といって、お菓子をくれたのである。

「あっ！どうもすみません」

と、正太が言うと

「遠慮はいらないよ…元気いいね」

とニコニコと笑いながら、手を振っていた。正太たちも手を振っていて、ボートは互いに反対方向へとすれ違って行った。小島に架かる橋を抜けると、その先には、完全に錆色になった熊の噴水があり、口から水を吐き出していた。それが池のシンボルにもなっていたのである。次郎は、その方向へとボートを漕いで行った。熊の噴水が近づいてくると哲朗が言った。

「ちょっとと待てよ次郎、水がかかるぞ」

と、その言葉に無視するように笑いながら、次郎は全速力でオールを動かした。正太も叫んだ。

「やっやめろー」

「うわー」

と、美奈も叫んだ。

熊の噴水は目前に迫り、その側を通っていた他のボートが、笑いながらやがて突入するであろう正太たちのボートに視線を浴びせていた。と、そのとき、噴水の下にボートが突入した。突入したと同時に、次郎はオールを立ててスピードを減速させた。

「うわー！」

「きゃー！」

「冷たい！」

という悲鳴がしたが、噴水の吹き上げる水と水面に落下するバシャバシャバシャという水音で、ほとんど悲鳴が消されていた。

周りを通過中のボートに乗った者は、その光景に笑いを飛ばしていた。この『千鳥ヶ池』では噴水から吹き上げるアーチ状の水の下をくぐり抜けるのが恒例の行事となっていたようだった。と、そのとき運悪く噴水の水が次郎の所を直撃したのである。

「うわー！つ・つめてー」

と言って、今度は立てていたオールを必死になって、動かし噴水の中から脱出をした。

「ハハハ…」

「ハハハ…ばかみたい」

「自分でやって、自分でかかるなよー」

と、三人が言った。次郎は、シャツがベチャベチャになって言った。

「そんなー、ひでーや。なんでおれだけがこうなるわけー」

「やっぱり、正義は勝つんだよ」

と哲朗が言った。美奈もその言葉につけ加えるように言った。

「ほんとほんとばかみたい…でも、おもしろかったハハハ…」

そこで、正太が笑いながら言った。

「もう一回行くか？」

「冗談じゃあないよ」

と、濡れたシャツを摘むように指先で引っ張りながら言った。

そのとき、岸边の方で二人自転車にまたがったまま、正太たちの方を向いて指をさしている少年がいた。それは、となりのクラスの生徒だったが、四人はそれに気づかないで、はしゃいでいた。やがて、自転車の二人は、再びペダルを踏んで、去って行った。

－権蔵の授業－

翌日、学校では三時間目の授業の最中で、五年四組では権蔵が社会の授業を行っていた。黒板の横にはすでに三人の生徒が立たされていた。

「えー、だから島原の乱では、沢山の兵隊が飢餓で死んでいったということだ…分かるな…」

と、そのとき権蔵の右手に握られていた短目の白いチョークが宙をものすごいスピードで飛んだ。バチッ！という音と同時に「いてーっ！」という声が上がった。

「こらー！影山！出てこい…」

その、権蔵の大きな叫び声に立たされている者や他の生徒も一瞬ビクリと、体が動き緊張した。影山は、右上の頭部を右手で押さえて、前を向いた。

「影山。さっきからくっちゃべってばかりいて…早く出てこい」

そう言って、権蔵は影山を睨みつけた。影山は、緊張したままゆっくりと立ち上がった。

「影山。早く出てこい…ついでに投げたチョークを拾って来い…早く」

そう言うと、影山はチョークを拾いシブシブと前に出て行った。権蔵は、立たされている三人の方を見た。

「杉山。バケツに水を入れて持ってこい…いっばいだぞ」

「は・はい！」

そうして杉山は、バケツを取りに行った。

「よーし、お前らも席に戻っていいぞ。代わりが来たからな」

立たされていた、残りの二人はホッとした表情で席に戻って行った。

それとは、入れ替わりで影山が権蔵の側まで行き、チョークを差し出した。権蔵は拳を握り、影山の頭を一発殴りつけた。

「いてー」

と、言って影山は、頭を押さえる。

「お前の頭も痛いかもしれないけど、影山！相当に石頭だな」

と言って、権蔵は自分の手に息を吹きかけていた。その様子に、生徒たちからは笑いがこぼれた。

「お前ら、笑っているのもいいが、明日はわが身だぞ…くっちゃべっていたら容赦なく影山のようになるからな…わかったか」

「はい！」

と生徒から声が上がった。

やがて、杉山がブリキ製のバケツを持って戻ってきた。杉山は、教室の中を見回しながら権蔵に近づいた。

「影山、杉山のバケツを受け取れ」

「えーえー？」

と、抗議のような声を上げた。

「何がえーえーだ！バカモン…早くしろ」

「はい」

そう言って、影山は杉山からバケツを受け取った。

「よーし、影山！…そのバケツを頭の上に乗せて立ってろ」

「えー！？先生…こんなの頭の上に乗せたら、背が伸びなくなっちゃうよ」

「影山。それだけ身長があれば大丈夫だ。それとも、バケツが小さいか？」

「い・いえ！」

そう言って、影山はバケツを頭の上に乗せて、両手で支えた。影山の表情は、緊張したものになり、右に左にと小刻みに揺れながらもバランスを取っていた。

「よーし、じゃあ授業を続けるか…」

そうして、授業が再開された。正太は、次郎と顔を見合わせて笑っていた。

「間宮。何かおかしいことでもあったか？」

「いえ、ありません」

「そうか…」

杉山も席に戻った。しかし、生徒は授業が再開されても、黒板の横に立たされている影山の方に目がいつていた。

影山も苦しながらに、教室の生徒たちの方に目をやり、いろいろな表情をしてみせて生徒たちを笑わそうとしていた。

権蔵が影山の方に目をやると苦しそうな表情に戻し、黒板に向かったり、生徒たちの方を見ると、変な表情をしていた。しかし、すでに権蔵には、影山のやっていることはお見通しで、生徒たちの方を向いたまま言った。

「影山…随分と余裕があるな。せっかく席に戻してやろうと思ったが、まだ大丈夫そうだな」

「せ・先生それないよー」

「うるさい。立ってれ」

それを聞い影山は、悔しそうな表情をした。生徒たちは、そのようすにさらに笑った。やがて、十分ほど経過した頃、影山の力も段々と衰えてきた。表情は険しくなり、真っ赤な顔をしていた。ゆらゆらと揺れる幅が激しくなってきた生徒たちは、

「あ・あああ…」

と言った瞬間、バケツが影山の頭上からひっくり返ったのである。ザバーッという音とともに、バケツの水が影山の足元にこぼれた。

「うわー」

「キャー」

という声に黒板の横の床がベシヤベシヤになってしまった。

「バカモン！だれがひっくり返せと言った。早く雑巾で拭き取れ…おい！誰か手伝ってやれ、間宮！それから次郎…」

そうして、黒板の横では、数人の生徒が雑巾バケツで影山のこぼした水をかたずけた。

－対　　決－

その日の放課後、正太、次郎、哲朗の三人で学校からの帰り道である。道路の脇にはナナカマドの木が並び、道には、とちの木の実が、誰かに踏まれて潰されていた。

「…影山は、おっかしかったよな…ハハハ」

「ああ、あいつ馬鹿だよ」

「そうだよ。権蔵に分かるようにしゃべっているからだよ…ハハハ」

三人が歩いていくと、学校の敷地のはずれで、隣のクラスの生徒たち数人が正太たちの行く先を並んで、腕組をしながら塞いでいた。

「な・なんだー？おれたちかー」

と、次郎が他の二人に言った。

「どうも、そうみたい」

「なんだー？」

と、哲朗が言い、そのあと隣のクラスの集団から一人前に出てきた。それは、森沢で学年では番長格の芹沢の子分だった。

「おい、間宮とお前ら。ちょっと来いよ…」

そう言って、森沢は顎で集団の方へ案内した。正太は怪訝な顔をして言い返した。

「なんで？」

「いいから来いよー」

正太たちは、何が起きたのか分からないまま、言われるとおりに芹沢の集団について行った。正太たちを含めた数人の集団は、学校の裏の方に回り込んで歩いた。

学校の裏に着くと、丁度正太たち三人を取り囲むようにして隣のクラスの生徒が並んだ。そこで、芹沢が言い出した。

「お前ら、転校生の小栗と仲良くやってるんじゃねえかよ」

正太たちは、一瞬何を言われてるのか分からなかったが、すぐに気がつき

「ああ？ぷふうー」と、吹きだした。

「かっこつけんじゃねえよ」

と、芹沢が言った。

「おれ、見たんだぞー昨日」

と、森沢がつけ加えるように言った。

「なーんだ。そんなことか、常磐公園か？」

「そうだ」

「だったら、手ぐらい振れよハハハ…」

「なにー！」

「だから、なんだって言うんだよ」

隣の生徒グループと、正太たちの言い合いが始まった。

正太たちの学年では、女子生徒と遊ぶという習慣があまりなかったので、芹沢グループに情報が入った時点で、面白くないという感情が走り、言い合いとなったのである。

「だから…いい気になるなってことだ」

正太は、次郎と哲朗の顔を見て、首を傾げた。言い合いをしている場所は、校舎の丁度裏側で、しかも窓が無くコの字型になった空間だったので、通りかからない限り、誰にも見られることはなかった。

「そんなのないよ…悔しかったら自分たちも、女子と遊べばいいべやー」

と次郎が言った。

「なにー！」

と、それを聞いた森沢が次郎の方に近寄り、左の頬に一発、げんこつをくらわした。バチッ！

「いえー、…このやろーなにすんだー」

それがきっかけで、三人と集団が喧嘩となった。芹沢は正太ともみ合い、お互いに殴り合っている。

「このやろー」

「やったなー…えーい」

哲朗は山下ともみ合い、鼻血を流していた。相手は全部で六人もいたので、正太たちにとっては、不利な喧嘩だった。なおも、殴り合いを続けていたら、丁度通りかかったクラスで一番人気の幸田亮が、その喧嘩に気づき走って近づいてきた。

「お前ら、なにやってんだー！」

幸田に気づいた、山本が近寄ってきた。

「亮。お前もやる気かー！」

そう言って、山本が手を振り上げて亮に殴りかかろうとした。その右手を亮が簡単に払いのけて、胸ぐらをギュッと捕まえた。

「やめろって言ってんだ」

と、亮が山本を睨み付けて、迫力のある声で言った。

「・・・・」

山本は、無言で緊張した状態で、首を縦に振るだけだった。つぎに、亮は哲朗が相手にしている山下とのあいだに入った。

「やめろーって、いってるだろーばかやろー」

またもや、亮は山下の胸ぐらをつかみ、止めようとした。しかし、哲朗が

「そうだ、亮やっちまえー！」と、言ったので亮が振り返り「哲朗お前もだ！」と言った。

と、そのときである芹沢が、突然大声を上げて泣きだしたのである。

「うわーん、うわーん」

という、予想もしなかった声に、皆が一斉に芹沢のほうに注目した。見ると芹沢の右肩にはしっかりと正太がかみついており、全く離れない状態だった。全員は、喧嘩の手を止めて、一瞬の沈黙が続いた。

「うわーあ」

という森沢の声と驚いた表情があった。その他の隣の生徒も、ただただ様子を見つめているだけだった。番長だった芹沢が正太にかみつかれて泣いている姿は、あまりにも拍子抜けだったのである。我に帰った亮が最初に口を開いた。

「正太！もういいよ…正太」

そう言って、亮は正太の肩を軽く叩いた。

「いてーうわーん、うわーん」

という、芹沢の声だけがこだました。

「芹沢、大丈夫か？」

と亮が、芹沢に寄って行き顔をのぞき込んだ。次郎は、正太の肩を軽く叩き、よくやったなという表情をした。芹沢は、目を真っ赤にして泣いていた。正太は、まるでスッポンのように、芹沢の肩にかみつき離れなかったので、さすがの芹沢も痛さをこらえきれずに、泣きだしたのである。少しして、芹沢は泣き止もうとしたが、ヒクッという興奮状態を繰り返していた。隣のクラスの他の生徒たちは一人二人と「行くかー？」「ああ行くか？」「俺も…」と言って、去って行った。残された芹沢と亮と正太たちだけが、その場に残った。そこで、芹沢がやっと口を開いた。

「か・かっこわるいよなーおれ」

そこで、正太が言った。

「んなことないって…おれが悪かったよ」

「おれもー」

「おれもー」

と、次郎と哲朗も続けて言った。

「ほんとかー？…でも俺が一番悪かったんだなー」

それを聞いて、正太が言い出した。

「芹沢、いっしょに遊ぶか？」

「えっ？」

「そうだよ…芹沢」

と、亮も言った。その言葉に再び芹沢が言った。

「ほんとにいいのか？」

「おお！」

芹沢の表情がニコニコ顔に変わって照れくさそうに頭を掻いた。と、そこで亮が言い出した。

「ところで…お前らの喧嘩の原因でなんだー？」

正太と芹沢は、顔を見合わせて、

「あっ？ハハハハ…」

と、笑いだした。それにつれて次郎と哲朗も笑いだした。

「お前ら、変だぞー」

と亮が言った。そこで、正太が亮の方を見て言った。

「実はな…」

と、急にヒソヒソ話になって、亮の耳元でささやいた。

「ほんとかー！…おれも、聞いたからなー」

「おおー！いいぞ亮もいっしょだな！」

「おお！」

と、このメンバーの話し合いがついた。

－集中豪雨－

九月も終わりに迫った頃、天気の良い日が続いた。連日の雨で、正太たちのグラウンド遊びもすべてご破算である。こういうときは、必ず誰かの家に集まって、遊んでいるのであった。しかし、この日ばかりは、天変地異が起きたのかというほどの大雨であった。学校が終わり正太は、家に帰っていた。空は午後四時だというのに、かなり薄暗い状態で、正太の家のタバコ店でも客足がパタリと止まっていた。正太は、テレビのダイヤルをガチャガチャと回して、番組を見ていた。ガラガラと店の戸が開いて、黒い雨ガッパ姿の新聞配達のおじさんが新聞を届けに来た。

「いやーあ、すごいすっねー…はい夕刊」

「止みそうもないかねー」

「奥さん、ぜんぜんだめだわー、ほら、この通りの角では、吹きだした水で、下水溝の蓋が開いていて、ダンプが車輪落としちまって立ち往生だ。まったくひどい雨だ…んじゃー」

「はい、ごくろうさん」

その会話を聞いていた正太が、節子に言った。

「かーちゃん、なんだって？ダンプ落ちたって？」

「ああ、そう言ってたよ」

「おれー見てくるは」

「雨強いよ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

そう言って、正太は下駄箱から、ゴム長を出して履き、黄色い傘を引っ張り出して、店の前のドアを開けた。

「うわー！すっげー雨」

正太は、カポカポっというゴム長で歩く音を立てながら、表に出て行った。黄色い傘が、シュカッ！と広げられた。

結構風もあるようで傘は、幾度か風圧にあおられて、正太も厳しい顔で傘を押さえつけた。歩道と車道のあいだの少

し低くなった部分には、かなりの深さの泥流が溢れて流れていた。通りを通過する車の数も極端に少なく、時折通る車はゆっくりと前進し、かなり高い水しぶきを上げていた。店の前に出ると、正太は新聞配達が指さしていた方角に目をやった。すると、丁度信号機のあるあたりで深緑色のダンプが左側に傾き、下水溝に車輪を取られて止まっていた。落ち込んだ下水溝からは、なおも泥流がゴボゴボという音と共に溢れ出ていた。正太は右手で傘を持ち、左手を眉の上に添えてのぞき込むスタイルでダンプを見つけた。

「ありゃー！すげー」

と、一声あげると慌てて家に戻ってきた。

ガラガラと戸を開けて大きな声で叫んだ。

「かあちゃん、すげーわ！ほんとにダンプが落ちてる」

それを聞いた節子は、

「どれどれ…」と言って、店の戸を開けてのぞき込んだ。

「哲朗と次郎に電話しちゃお」

と言って正太は、黒いダイヤル式の電話機の受話器を持ち上げた。

「…あっ、こんにちわ間宮です。あの一次郎くん居ますか…はい」

節子が戸を締めて、戻ってきた。

「正太、そんなの電話して呼ぶんじゃないよ。この雨なんだから」

正太は、手を立てて左右に振った。

「…あっ、次郎か？…おう。すっげーぞ家の前。ダンプが下水に落ちてんだ…おお、来い来い」

正太は笑いながら、また外に出ようとした。

「次郎くん、来るのかい」

「ああ、哲朗も呼んでくるってさ」

「まったく…こんな雨の中…」

と節子の言ったあと、正太は表に出た。

歩道と車道の間の水たまりに降りて、ガボガボな長靴で水の中を、漕ぎだした正太の目の前に、突然一匹のどじょうが泳ぎだした。

「おっおー！」

と叫び、しゃがみ込んだ。そうして傘を下に置き、素手でどじょうを捕まえようと、必死になった。

「おお、このやろ一動くな」

一旦どじょうを掴んだもの、手の間からスルリと抜けてしまった。

「ああだめだー」

そうしているうち、下水溝からはさらに数匹のどじょうが上がってきて、車道の水たまりの中で暴れていた。

「おおー！すげー」

そして、雨に当たりながら、もう一度どじょう採りに専念した。

「うっ！よーし」

そして、どじょうが一匹正太の手の中に入った。正太は慌てて車道から歩道を通り店の中に入って行った。

「かあちゃん！バケツバケツ！はやく…」

「バケツ？」

「どじょうだよ、どじょうを採った」

「ええー？」

そして、正太は両手を上げて節子にバケツを要求した。それで節子は、慌ててバケツをとりに行った。

「これでいいかい…」

「ああ、」

正太は、バケツの中にどじょうを離した。どじょうは水の入っていない、バケツの中でくねりながら暴れていた。

「あっ、水入れなきゃ」

と言って、水道の蛇口のほうにバケツを持っていき、ジャーという音ともに三分の一ほどの水をバケツに注いだ。

その中でこんどは、どじょうがシュルシュルと素早い動きで泳ぎまくっていた。と、そのとき節子が思いだしたように言った。

「正太。傘は？」

「ああ、表だよ」

「まったく、もうー」

さらに、そこに次郎と哲朗がやってきた。

「正太くーん」

その声を聞いて正太が玄関に走り寄った。

「おお、早くこいよ！表でどじょうがとれるぞ」

「えっ！」

という驚きの表情をした次郎たちであった。

正太はバケツを哲朗に渡し、手招きした。哲朗は、バケツの中のどじょうをのぞき込んだ。

「ほんとだ。どじょうだ」

バケツを持ち、正太たち三人はどしゃぶりの中の外に出て行った。

「ここだよ、ここで採ったんだ」

「えーっ！こんな泥水の中か…何もいないぞ」

と、次郎が言った。すると、次郎の後ろに居た哲朗が叫んだ。

「あっ！居た！」

「どこっ？」

「あれっ！」

その言葉に次郎が、しゃがみ込んだ。ザバザバと長靴で泥水の中を漕いでいきその中でうねっているどじょうを両手で掴み込もうとしたときである。次郎が足をすべらして、顔面からおもいきり転んでしまった。バシャー！

「ハッハハハハ…」

「ハハハ…」

と、哲朗たちが笑っている。

「そんなに笑うことないだろー」

と、その様子に次郎が立ち上がり抗議をした。哲朗と正太は、両手を次郎に向けて、軽く円弧を描くようにして、手のひらを否定するように振った。と、その時さらに、雨足が早くなったのである。ザザザーという音の中、三人はもう傘を投げ捨てて、ベシャベシャになりながらどじょう採りを続けていた。

「うひゃー、ひどい雨だ」

「子どもは、風の子、雨の子だよ…かんけーねーな、ハハハ…」

と正太が叫んだ。

「次郎！足んどこだ居るぞ！」

「おお。ほんとだ」

「ワーハハハ…採った採った！…ほらー！」

そう言って、次郎は哲朗の持っていたブリキ製のバケツにどじょうを投げ込んだ。

結局、どじょうの成果は、五匹だった。ベシャベシャになった三人は、ひとまず正太の家の中に入った。

「いやいやいやー、あんたら風邪ひくよ。正太、奥からタオルもっといで…」

「おばさん、すみません」

節子は、しかめっ面だったが、その声に顔を緩めた。

「じゃあ、あったかい番茶でも入れるか…あーそうそう、正太！」

「おお！」

「冷蔵庫に、栗羊羹があったろー…あれ持ってこい！」

「おお！」

そう、言って正太はタオルを次郎と哲朗に投げつけて、自分も頭からかぶり、冷蔵庫の扉を開けた。

「おばさん、悪いねー」

と次郎が言うと節子は、

「子どもが遠慮するもんじゃないよー」

と、笑いながら言った。

その後、哲朗と正太が同時にクシャミを二回ずつした。その様子に次郎が、

「あーあ、二人とも風邪だなーウ・ウ・ウ…クシャ！」

と、結局次郎もクシャミをしたのである。

「ちょっと、あんたがた風邪ひかないでよ！」

と、節子が叫んだ。それに対して次郎が言った。

「おばさん、子どもはカゼの子だって…ハックション！」

「おやおや、ほんとかね…とにかくほらー」

そう言って、節子は番茶を三人に差しだした。そこに、外で仕事を済ませてきた父の隆造が入ってきた。隆造は、黒い傘をたたみ、二～三回バサッバサッと雨水を払うと、傘立てに差し込み、肩をすぼめて入ってきた。

「いやー。おい近文で床上浸水だってよー、こりゃー仕事にならんわ…ハハハ」

「近文！…じゃあカッちゃんとか大丈夫だろか」

と節子が心配気な表情を見せた。それと同時に、次郎と哲朗が挨拶をした。

「おじさん、おじゃましてます」

「こんにちわ」

「おおー、こんちわ…うむ！おいどうしたんだ。お前ら」

そこに正太が間髪を入れずに言った。

「トウチャン！あれだよあれ！バケツの中…」

それを聞いて、隆造は靴を脱いで居間に上がり込み、バケツの中をのぞき込んだ。

「おーっ！なんだ？今晚は柳川か？」

と、叫んだ。

「ち、ちがうよー」

と正太が睨みつけ、つけ加えて節子が言った。

「なんだか、この子ら家の前の下水から溢れている水の中から、採ってきたらしいよ」

「ほーう！こんなの上がってくるんだな」

と感心した表情を見せた。

－ 妄 想 －

翌日は、ウソのように晴天に恵まれた。学校では、相変わらず朝の騒がしい状態が続いていた。しかし、次郎と正太の二人が欠席していたのである。

「哲朗！正太と次郎きてねーぞ…どうしたんだべ」

そこで、哲朗はクシャミを一回して言った。

「きっと、あいつら風邪で休んだんだ…だってクシャ！おれも風邪だから…」

「なんだーそれー」

「いやー、昨日雨の中どじょう採りしてたんだ」

「雨の中でどじょう？…どじょうすくいかな？ハハ」

「いやあ、正太の家の前の下水から水が溢れてきて、そこにたくさんどじょうが上がってきてさ…」

「へえー？そんなところに？…ハハハ…だけど馬鹿だよ。あの雨の中…」

「いいじゃないか。別に」

そう言って、開いている椅子を哲朗は見た。それを聞いていた美奈が哲朗に言った。

「えー、風邪ひいたのー」

「ああ」

その返事にうなずいた。

一方、正太の家では、正太が昨夜出した三九度の熱が冷めて、ほぼ平熱に近づいた状態だった。子どもならではの回復力でもある。二階の正太の部屋では、布団にくるまり、呆然とした状態で天井の模様を見つめていた。窓からは、明るい日差しが差し込み、窓際にあった朝顔の花がきれいな薄紫色を醸し出していた。あの嵐のような集中豪雨から嘘のようにスズメがチュンチュンと鳴いている声があちこちから聞こえてきた。枕元にあったブリキ製の洗面器の中には、手ぬぐいが無造作に漂っており、手ぬぐいの隙間から底に到達した日光の光が、反射して天井に丸い光の明かりとなって写し出されていた。

「あーあ、明るいなー」

と、呟いた。それから正太は、両手で布団を上の方に引っ張り鼻まで隠れるようにして、再び天井の模様に目をやっていた。

「うむー？」

と、正太は目をこらして光に照らされた空間を見た。そこには、普段は考えもしなかった光景が、静けさの中で展開されていたのである。上からゆっくりと回転しながら、ふわりふわりと落ちてくる塵の細い毛のようなものが見え

た。それは、正太の顔の上に向かって降りてきたが途中で進路を変えて、右の方向へと移動して行った。さらに、次に発見した塵は、螺旋状にくねっていて渦を巻くようにしてゆっくりと降りてきていた。ところが、これも途中で進路を変えて今度は逆に少し上昇した形になり、それから横に少し流されてから、再び螺旋状に回転しながら落下していった。

塵の動きをじっと観察していた正太は、次に天井の模様に目が行った。そこには無機質な模様があり、よくよく目を凝らして見ていくと、幾重にも同じ形の模様のパターンがあることを発見して、それらの組み合わせで天井の板が、作られているのが分かった。さらに、その一つ一つの部品ともいえる模様を良くみると動物の顔に見えたり、化け物の顔に見えたりもしていたのである。いつしか正太の目はあちこちに不自然に動いていて、ふうーと息を吹く度に舞い上がる、塵にも目が行っていた。いつしか、正太は静かに目をつぶり再び眠りに入ってしまった…

「おーい、哲朗。これ正太のところに持って行かないと…」

次郎は、その日の給食と宿題を哲朗に渡そうとしていた。

「ああ、分かってるって、おれの方が近いもんなハハハ…」

と、それを聞いていた美奈が、ものすごい勢いで走り寄ってきた。

「ちょっと、待ってよ！これわたしが持って行くんだから…」

「なんだ、美奈。正太が好きなのかハハハ…」

「そうだよ！だから、早く渡して」

そうして、美奈は、給食と宿題を受け取った。そうして、終業のチャイムと同時に美奈が、正太の家めがけて早歩をして向かったのである。その後ろに五メートル程離れて、次郎と哲朗が続き、テクテクと進んで行った。しかし、良くみると、さらに後ろにはクラスメイトが順番に全員ついてきていたのである。その中には、先日喧嘩をした隣のクラスの芹沢の姿もあった。そうして、よくよく見ると美奈は、黄色い交通安全の旗をかかげて行進しているのである。

「はい！元気良く…」

と、ついには正太の家の前に到着して、クラスメイト全員が家の周りを取りまきドアのチャイムを鳴らした。

「正太！正太！…」

という声に正太は、眠りから目を覚ましたのである。目を開けると節子が立っていた。

「友だちが、来てるよ？」

「あっあー？今降りてくよ」

と、言って居間に丹前を羽織って降りて行った。

「正太だいじゃうぶか？」

「な、なんだーお前かー」

と、夢とは違う相手に正太は、残念そうな言葉を吐いた。その言葉に、哲朗が憤慨した表情をして言った。

「お前かーってことないだろうーほら、給食と宿題」

そう言って包を渡した。

「あっ！いや、すまんすまん。そういうことじゃないんだハハハ…」

「なんだ。元気なんだあ」

「ああ、だいぶなー…上がれよ」

「おい、いいのか？」

「かまわんて」

その様子に節子が、苦笑いしながら言った。

「哲朗くん、正太の風邪移されるんじゃないよ…」

「あっ、はい！だいじょうぶです…おじゃまします」

「はい」

そう言って哲朗は、正太の家に上がった。

一方、次郎の家には神経質な慎一郎が、給食と宿題を持って訪れていた。

「なんだよーシンかー…宿題！ばーか俺は、病人だぞー宿題なんかいないよ…」

その言葉に困っている慎一郎が、相変わらず目を細めて苦笑いをしていた。次郎の母、梅が困った表情の慎一郎を見て次郎に言った。

「次郎だめだよ、たかが風邪ぐらいで学校休んでー、ねえー」

と、慎一郎の顔をのぞき込んだ。慎一郎は、それにさらに困った表情をしながら、「はあーはい」と小さな声で返事をした。

「おーお、なんだシン覚えてろよー明日」

「何いってんのーちゃんと宿題しなさいよー…どうもねシンちゃん」

「あーはい…じゃあー」

そう言って、慎一郎は帰って行った。

慎一郎が帰った後、次郎は独り言を言った。

「ったくー！病人に宿題させようなんて、学校も何考えてんだか？」

梅は、それを聞いて次郎の頭をコツンと軽く叩いて行った。

「お前みたいのがいるから、学校が必要なんだよー…そんなこと言ってたら、また鬼瓦先生にガッチリと言っとくよー」

「まってくれよかーちゃん、やらねえって言ってねえよー」

「分かればいいんだよ。分かれば…」

実は、鬼瓦権蔵は梅の姉の義理の兄だったので、事あるたびに権蔵に伝えていたのであった。そのため、次郎は、鬼瓦と聞いただけで身震いするのだった。

正太の家では、哲朗がプラスチック製のケースに移されたどじょうを眺めていた。

「へえー、こいつ結構めんこい顔してるじゃないか」

「おお、そうなんだよ」

「そういえば、山椒魚どうなった」

「おお、これかー」

そういつて、棚の上に乗っているプラスチックのケースを指さした。

「へえー、だいぶデカクなったなー…おう、ちゃんとエラが見えてる」

「お前んちのは、どうなった」

そこで哲朗は、すこしがっかりした表情で応えた。

「なんかうちのは、山椒魚じゃないみたいなんだー…」

「じゃない？」

「そう…あれ、カエルだったみたいだ」

それで、少し笑いながら正太が励ますように言った。

「哲朗、これかえったら、分けてやるよー」

「ほんとかー」

「おお」

と、そのとき節子が再び上がってきた。

「正太、また友だち来たよー…今度は女の子。正太ももてるんだね」

正太と哲朗が顔を見合わせて言った。

「美奈か？」

そう言って、正太と哲朗は二人して階段を下って行った。

階段を降りると、そこには確かに美奈が立っていた。と、その後ろには芹沢も一緒に来ていたのである。

「おお、…あれー？せりざわー…まあ、上がれよ」

それに対して芹沢が言った。

「なんだ、哲朗も来ているのかー」

そうして、美奈と芹沢が正太の部屋に案内された。

美奈の手には、ケーキがあり正太に手渡された。

「えっこれー？いいの？」

「みんなで食べよー」

「サンキュー…へへへ…」

そう言って正太が照れた。

そうして、それぞれに分けられたケーキを片手に、風邪を吹き飛ばすような元気な会話が交わされた。

－ 2 B 弾戦争 －

時は流れ、秋も終わりに近づく頃、正太たちは以前、寺があった広大な瓦礫まじりの空き地で放課後の遊びが始まっていた。天気は良く空はウロコ雲が天高くゆっくりと流れていた。

空き地の周りには、木の柵が張り巡らされていた。正太たちのグループは、慎一郎や幸田、ジェスロ、それに隣のクラスの芹沢も加わっていた。この日の遊びは、2 B 弾と呼ばれる爆竹のようなもので闘うというものだった。2 B 弾は、爆竹よりも簡単に着火ができた。形状は、三～五ミリ程の紙で作られた円筒系のもので、色彩が黄色や赤、緑

のシマシマ模様であり、その片方に丁度マッチの端に付けられている硫黄状の着火材が塗られていた。このため、着火する際には、マッチの箱の、こする部分でシュッ！となぞるだけでよかったのである。この着火後、十秒ほどでドカーンという音と共に、爆発するのだ。爆竹と比べれば破壊力が弱く、爆発までの時間に余裕がもてるのが特徴だった。

「シン！危ない」

「うおっ！」

ドカーン！と、慎一郎の頭の側で、2 B弾の炸裂によって、発生した紙屑が飛び散った。そのことによって、慎一郎の頭の上には、紙屑が付着していた。さらに、慎一郎は、人差し指を耳の中で回転させるようにして、しかめっ面をしていた。

「だいじょうぶかーシン」

と、幸田亮が近づいてきた。

「シン、耳を塞さがんきゅーだめたべや」

と、次郎が叫んだ。それを、聞いていた慎一郎は、ただただ、しかめっ面をしているままだった。

「いやー、キーンってなってる…」

と、慎一郎が亮に言った。

「そりゃあ、そうだよ、耳の側で鳴ったもんな」

と、亮が応え、

「みんなー、頭とか顔に投げるのはやめるべー」

と、正太が叫んだ。実際にその2 B弾を投じたのは、ジェスロだった。ジェスロは、頭を搔きながら、

「シン。ほんとに大丈夫か？」

と、言うとき苦笑いをして、右手の手のひらをジェスロに向けながら、小刻みに頭を何度も縦に振った。ジェスロは、慎一郎の方に手を軽く振れて謝った。

「ごめんなシン！」

「い・いや…いいよ」

と、慎一郎と仲直りすると、再び闘いが開始された。

「おーい、はじめるぞー！」

と、正太が叫び、哲朗が、

「十数える間に散らばるんだぞー！」

と、言った。

その言葉に、全員があちらこちらに、散らばって行った。

「…九・十いくぞー！」

数え終わるとたんに、再び2 B弾戦争が始まった。正太の手にあった2 B弾がマッチですられて、早くもジェスロめがけて、投げ込まれた。

「うわっ！」という声に、ジェスロは耳を押さえた。と、どういうわけか全員一斉にジェスロめがけて、2 B弾を投げつけたのである。

「それー！」

「うわっ・やっやめろー！…ずるいぞー」

バーン、バババーンという音で、ジェスロのいた辺りが、連続的な爆発となったのである。

「やったー！ハハハ…」

と、全員が笑い、爆発の紙の破片だらけになったジェスロが憤慨した表情を見せた。

「なんでよー。おればっかり狙うんだよーずるいぞー」

「いいべやージェスロ、これも試練だ。よーし数えるぞー…いーち、にいー…」

「うわっ！まずい」

と言って、今度はジェスロが慌てて、遠くへ走った。その直後、一斉にバババーンという爆裂音が聞こえた。こうやって、正太たちは2 B弾遊びを繰り返していた。鬨いも、終わろうとしているその時、次郎の居る辺りで連続的な

爆発音がした。

次郎の表情が、一瞬止まり宙を見ていた。次郎の方を良くみると、単パンの右ポケットから煙が立ち上っていた。他の者が全員駆け寄ってきた。

「どうしたんよー」

「次郎！どうしたー」

次郎は、呆然とした表情で、静かにポケットに手を入れて言った。

「うわーあ、あ・穴開いたー」

ポケットに入れられた手は、ポケットの下で指が見えていた。次郎は、抜き出た指を、ユラリユラリと動かしていた。

「じ・次郎。お前まさか、マッチと2 B弾を一緒に入れてたんじゃ…」

「ああ、どうやら…」

「ばっかだー」

「やった、やったーハハハ…」

次郎は、2 B弾とマッチの箱を同じポケットに入れていたために、動き廻った瞬間に、勝手に2 B弾がマッチの箱で擦れて、着火したのであった。このことによって、ポケットの中で束ねてあった。2 B弾が、一斉に炸裂してポケ

ットを破ってしまった。さいわい次郎の足には、ヤケドがなかったが買ったばかり短パンに穴を開けた次郎は、青い顔をしていた。

「まっずーいよ、この短パン、このあいだ買ったばかりなんだー。かーちゃんにガッチリやられるよ」

「あ〜あ、これは御愁傷様」

「うんなー、人のことだと思ってー」

「そんなこと言ったってしゃーないべー」

「まあなー、いいやハハハ…」

そこで、幸田亮が全員に聞こえるように言った。

「いいか、みんな2 B弾は絶対にマッチと一緒に入れるなよ」

「おお」

そうやって、2 B弾戦争の幕は降りた。

「おい、あの上に上がってみようぜ！…ほらーあそこに梯子があるしー」

そうやって、正太は空き地の隣にあるボーリング場を指さした。

「おおー、探検だ探検！」

正太たちは、ボーリング場の壁に埋め込まれた、鉄の梯子をめがけて歩きだした。

「おい、大丈夫かーあんなところ登って。誰かに見られたら怒られるぞー」

と、心配気に哲朗が言った。

「哲朗。いいよ、登らなくても、だけどお前見張りだぞー、なあ、みんな！」

「そうだよ」

「そうだそうだ」

その言葉に哲朗は、慌てた表情をして言った。

「待てよー、おれだって登るよー」

「ハハハ…哲朗がびびるなんて珍しいな」

「ハハハ…行こうぜ！」

と言って、さらに梯子に近づいた。

まず、最初に次郎が登り始めた。鉄の梯子の一番目は、少し高い位置についていたので、背伸びしてみたが、とどかないので飛びついたのである。

「エイ！…よしつかまったぞ」

そう言って、次郎は腕に力を入れて登り始めた。二本目からは結構楽に上がることができた。そうして、次々に正太、慎一郎、亮と登って行った。上を見ながら登っていた正太は、次郎の足から落ちてくる土を目に受けた。

「うっ！…ち・ちょっと待て、目に入った」

正太は、登るのを一旦やめて、片手を離して目を擦った。

「次郎。土落ちてくるべやー」

「おお悪い悪い」

そう言って再び、屋上への登頂が始まった。最後に哲朗が鉄梯子に手を掛けて登り始めて、次郎はもう屋上に達していた。

「うわー、広れー」

続けて、正太が上がってきた。

「よいしょっと…おっほんとだ。広れー広れー」

次々と少年たちは、屋上に上がってきたのである。と、そのとき少年たちの登頂への動きが一瞬止まったのである。亮が叫んだ。

「シン！何やってんよー早く上がれー」

亮は、慎一郎の足を見て事態を飲み込んだのである。良くみると慎一郎の足が震えていて、こわごわの声を発した。

「た・高い…」

「シン！下見るからだよ…下見るな！」

「ああ…」

亮の言葉に慎一郎は上を向いた。

「どうだ！だいじょうぶか？」

「ああ…なんとか」

そうして、ゆっくりと錆び付いた手すりを一歩ずつ上がって行った。

「よーし、いいぞ…ウウウッ」

思いだしたように、亮も下を見てうなったのである。亮も、下を見てはいけないと、サッと上を向いて上がりだした。

「なにやってんだよー…早く上がってこいよ」

と、次郎と正太がはやし立てた。屋上の上には、トタンの破片やベニヤ板などいろいろなゴミが散乱していた。しかし、それらのゴミは正太たちにとっては、絶好の遊技となったのである。細かく四角形に切られたトタンは、表が薄い青で裏がネズミ色をしていて、それを正太が拾った。

「おい！これ手裏剣にいいぞ…」

「おお、やってみるべー」

「やってみるべー」

そういつて、次郎は大きいベニヤ板を持ち上げて屋上の端にある壁状になっている部分に立てかけた。正太は拾ったトタンの破片を右手の親指と人差し指で挟んで横投げで「エイッ！」と投じた。トタンの手裏剣は、クルクルと回転しながら、地面とは水平な角度を保ち、さらにはベニヤ板に近づくにしたがって、大きなねじれ状態に回転しながら、パチンと音を立ててベニヤ板につき刺さった。

「スッゲェー！」

と、見ていた者は感心し、次々に落ちていた。トタンを拾った。と、そのとき最後に哲朗が、鉄梯子を登り終えて上に上がってきた。

「うわーあ、すげーな…それ」

と、手裏剣劇を見たのである。

ジェスロが投じた手裏剣は、バシッ！と鈍い音を立て、ベニヤ板に刺さらないで下に落ちた。

「イエー！へたくそー！」

と、他の者から非難を浴びた。

「ちがわーい。この手裏剣がだめなんだよー」

そう言いつて、ジェスロは落ちていたレンガの破片で、トタンの先端をコンコンと叩いて、曲がった角を鋭角にしたのである。そうして、ニコリと立ち上がり、投げる構えを見せた。今度は、手裏剣が見事にベニヤ板にタツン！と音

を立てて突き刺さった。

「ほーら見ろよ、こいつのせいだ」

と、自慢気な表情を見せた。それを見ていた他の者も、

「あー？おれのも曲がってる。ジェスロそのレンガ貸せよー」

「高く付くぞ。一回二〇円だ！」

「いいから、貸せよー」

そう言って、次郎がジェスロからレンガを取り上げた。

少年たちは、カンカンコンコンとトタンの先を鋭角にしては、ベニヤ板に投げ込むという動作を繰り返していた。

トタンの手裏剣は、一回刺さると、先が変形するので、毎回修正が必要だった。

そうこうしているうちに、太陽が傾いてきた。

「おい、もう行くべー」

「おお」

と、言って少年たちは登ってきた鉄の梯子に順番に足を掛けて降り始めた。最初は次郎で、次に哲朗さらに慎一郎というふうに降りて行ったが、途中で哲朗が叫んだ。

「イテテテテ…」

哲朗の手の上には、慎一郎の足が乗っており、哲朗はそれをこらえていた。

「あっ！だ・だいじょうぶか？」

と、慎一郎は目を細目ながら足を上げた。

「おお、だいじょうぶだ。シンゆっくりとな…」

と、哲朗が言った。そうして、全員無事に鉄の梯子を降りた。

－雨の体育館－

その日の天気は、あいにく雨だった。雨というのは全体的に暗い雰囲気ただよっていた。授業は、小坂の理科の時間であったが、窓の外では学校全体を覆いつくしても、まだ充分におつりがくるほどに、大きく見える真っ黒い雲が、ものすごい速さで、校舎の上を移動していた。と、そのとき突然ゴロゴロっという雷の音がけたたましく鳴ったのである。

「きゃー！」「うわー！」

と、女子生徒が叫んだ。その声で男子生徒が驚き、再び「おー！…びっくりしたなーも」と、叫び声が上がったのである。

そのようすに、担任の小坂が笑みを浮かべて言った。

「すごい雷だなあ…哲朗。今の雷はどれぐらい離れた所で鳴ったか分かるか？」

と、突然疑問を投げつけた。その言葉に、理科の得意な哲朗がうろたえて返答した。

「えっ！せんせ一分からないよーそんなこと…」

小坂は、得意そうな表情をして言った。

「そうかー、さすがの哲朗でもだめかー？…分かったやついるか」

しかし、生徒たちは互いの顔を見合わせながら、首を傾げていた。それで、返事は、とうとう戻ってこなかった。

「うむー、いいかあー。雷のあのゴロゴロって…」

と、説明を始めたときに、再びゴロゴロと大きな雷の音が響き、女子が叫んだ。

「きゃー！」

と、そのとき次郎が、

「うっせーな川治！お前の声のほうが、よっぽど大きいや」

「ちょっと！ひどいねー…そんなこと言ったった怖いんだからしょうがないしょ」

と、言うと言明の途中で腰を折られた小坂が言った。

「啓子。雷恐いか？ハハハ…でもな、しょうがないんだよ、この星にいる限りはなあ。」

「そうだそうだ」と、次郎が言った。

再び小坂が話始めた。

「だから、いいか？雷のゴロゴロはな、音だから音速でやってくるんだ。だからピカッと光ってから時計を見て、ゴロゴロと鳴るまでの時間を調べれば、どのくらい、離れているか分かるんだよ」

と、そのとき薄黒い空で、衝撃的な青い光を放った。

「よし！今からだ」

と、言って小坂が腕時計の秒針を見た。それから、数秒後にゴロゴロという雷の音が鳴り響いた。それと、同時に小坂が少し笑みを浮かべて言った。

「今ので九～十秒くらいだから、音速が秒速三三一・四五メートルということはうむー…だいたい、三キロぐらい離れているな。音の間隔がさっきより多くなっているから、川治！大丈夫だ。雷は、離れているぞ」

生徒たちは、それを聞いて感心した表情を見せた。

「へえー、すげえやー雷の居場所まで、わかっちゃうんだ」

「せんせ、また光った」

「よし！」

そう言って、小坂がまた腕時計を見た。生徒たちは、正面にかかっている壁掛け時計を見つめた。音は、さっきよ

りまた間隔があいた。

「一五秒くらいかな？川治！どのくらい離れたか分かるか」

その質問に川治は、「うーん？…」と首を傾げたのであるが、大きな声で哲朗が叫んだ。

「せんせ、五キロ近いと思う」

小坂は、得意気になっている哲朗の表情を見て、笑いながら言った。

「ハハハ…そうだ哲朗。さっきは、分からなかったが今度は、大丈夫だな…哲朗。父さんと母さんに教えてやれよー驚くぞ」

それを聞いた、哲朗はニッコリとしながら、

「はい！」

と答えた。

「哲朗は、理科得意だからなー」

と、次郎が言った。

「次郎、お前は体育が得意だろ」

と、それを聞いていた小坂が言った。

「ちょっと、ドジるけどな」

と、つけ加えるように正太が次郎の顔を見て言った。そのとたんに、教室中が笑いの渦となったのである。

次郎は、頭を掻きながら、

「まっ、ちょっとなハハハ」

と、言ってみんなと一緒に笑った。

やがて、昼になり給食も食べ終わると、正太たちは雨のためにグラウンドで遊べないため、体育館へ向かった。

体育館では、すでに何人もの生徒たちが、低学年から高学年まで走ったり、ボールを使って遊んでいた。古びた体育館の床は、多少ガタガタになっていたが、運動をするには、支障がなかった。

休み時間に生徒たちは、道具室から自由にボールなどを、出して遊ぶことができたので、正太たちはバスケットボールを取りに行ったのである。体育館の壁の一部には、丸い木の棒を数本、平行に取り付けた部分があり、これは体育の授業のときに使われていた。やがて、次郎が道具室から、バスケットボールを取ってきて、大きなドリブルを繰り返しながら、走ってきた。

「正太、ほらっ！」

と、言いながら次郎は、正太にバスケットボールをパスした。バスケットのゴールは、小学生用に低めの位置に取り付けられていて、体育でバスケットの授業をするとき以外は、ネットが外されていた。

「おうっ」

と言う声と、バシッ！というボールを受け取る音が聞こえて、正太はゴールのある方へ走って行った。ドスンドスンと正太はドリブルを繰り返して、ゴール下まで行くと、ドリブルを止めた。

「グーとチーで決めるべー」

と、正太が言う「おー！」というかけ声のあと、ジャンケンが始まった。

「グーと、チーで合った人！」

「合った人！」

「あっ！おいしい…だめだ」

「合った人！」

という、ジャンケンのグーとチーの同じ、手を出した者どうしが、チームに分かれた。と、その時、影山が走ってきた。

「おーい、ちょっと待ってくれー…おれも入れてくれー」

その声に、正太たちは、影山の方へ目をやり叫んだ。

「おお。早く来いよー」

「カゲ！…次郎の方へ入れ」

「ああ」

そうして、正太たちはゲームを始めた。

「そーれ」

と互いにボールを取り合い、ドリブルが始まり、ゴールめがけた。体育館には、他のクラスや他の学年の生徒たちも散乱していたので、ゴールの中にも、いろいろな生徒が入り乱れていた。チームは、正太チームと次郎チームに分かれていて、正太の方には、慎一郎、哲朗がいて次郎チームは、影山と幸田とジェスロというメンバーであった。どうかんがえてもこれは、次郎チームの方が有利である。ボールを先取した、正太は、独走体勢でゴールを目指した。正太は、他の関係ない生徒の間を上手く縫って、走って行ったが、それにぴったりとくっつくようにして、影山がボールを奪いに来ていた。しかし、ここでは正太の方が1ランク上で、見事に影山の攻撃を交わしていた。と、独走体勢から一気に、ドスンというジャンプをした音が響き、ゴールした。これが、見事に決まり一点入ったのである。

「やったー！…いいぞ正太」

と、哲朗が叫び、慎一郎がガッツポーズを決めたのである。

「チェッ！」

と、それとは対象的に次郎が悔しがった。

今度は、次郎たちの番になり次郎が、ゴール下の外からパスをしようとした。「影山！いくぞー」

と大声を出して、次郎はボールをおもいきり投げた。

影山は、「うおおっ」と声を上げて、一旦、手からバウンドして落としそうになったボールを再びしっかりと掴み、ドリブルを始めた。哲朗がそれ対して、がっちりと、マークした。ドタンドタン…と影山は走り、遠くから正太が哲朗に叫んだ。

「哲朗！取ってやれー取ってやれー」

それを聞いて、幸田が叫んだ。

「影山！パスッ！」

哲朗は影山に追いつき、一生懸命にボールを奪取しようとしたのであるが、幸田の合図に気づき、目を横目状態で走り続けて、哲朗のスキをついて幸田にパスした。

「ほら！」

ボールは、哲朗の见ている前を横切り、幸田の手に渡った。幸田は、駿足だったので、独走状態となりゴール下まで、簡単にたどり着いて、正太とは違った見事なランニングシュートを軽く決めてしまった。

「よーしっ！」

と、影山がガッツポーズを作った。ゴールのリングから回転しながらボールが転げ落ちてきて、床でバウンドをしたボールを正太がすかさず取り、パスを哲朗にした。

「よーし、今度はこっちの番だ」

そう言って、哲朗がドリブルしながら走りだした。哲朗には、ジェスロが付く形で正太側のゴールへと、進んで行った。しかし、体の大きめのジェスロにかかっては簡単にボールを取られてしまったのである。

「しまった！」

「ハハハ…」

とジェスロが笑いながら、次郎にパスしたのである。勝利は、圧倒的に次郎チームが優勢であった。と、後ろ向きに走って次郎は、ジェスロのボールを受けようとして、ボールが手に当たった瞬間に、背中に衝撃を感じたのである。

「うっ！」

と、思った瞬間に次郎は、両足が床から離れて宙を舞った。背中には、二年生の男の子が居て、体当たりしてしまったのである。二年生の子も、次郎と一緒に同一方向に吹っ飛んでいった。正太たちは、瞬間的に次郎に視線が集中し、次の瞬間には次郎と、男の子が転がって止まった。バスケットボールだけが、数回バウンドして、体育館の壁側に向かって転がっていったのである。さらに、次の瞬間、男の子がウーンという大きな声を出して、鳴きだした。次郎は、男の子の方を向きながら、

「イッテー！」

と、表情を苦くして言ったのである。立ち止まった正太たちは、一瞬の沈黙の後駆け寄ってきた。

「だ・だいじょうぶか？」

と、幸田が大声を上げた。みんなは、次郎と男の子の周りに集まった。ジェスロが、男の子の名札を見て、驚いた表情をして言った。

「やっやバイよー…この子、六年生の田上の弟だよ」

六年生の田上といえば、この小学校では、いちばん恐れられた存在だった。それを聞いた次郎は、いきなり立ち上がった。

「えっ！おい、だいじょうぶか？」

そう言って、次郎は自分の膝から流れる血と痛さも関係なく、田上の弟の肩を両手で掴んだ。

「なあ、おい、だいじょうぶか？」

田上の弟は、泣くのを必死でこらえようとした。しかし、クスン、クスンという横隔膜の痙攣だけが続いていた。それでも、その子は、次郎の方に涙目で、向きながら、ゆっくりと首を縦に振った。

「だ・だいじょうか？…そ、そうか、よかった」

と、次郎はその子の頭の上に手のひらを乗せて軽くなぜた。

「ご、ごめんな」

「うん」

と、田上の弟はうなずき、ニコッと笑顔を返して、立ち去って行った。次郎は、その直後に、自分の膝を見て、
「いてー、いてて」と叫んだ。周りのものは、笑いながら、
「なっなんだ。次郎のは、たいしたことないんじゃないかハハハ…」

しかし、次郎はため息をついて、
「おれ、保健室に行くは…」

と言って体育館を去った。

ー寺裏の銀杏の木ー

大休寺の中通り側に、大きな銀杏の木があって、風の強い日とか雨の翌日などは、決まって銀杏の実が落ちているのである。その日も、雨の翌日だったので正太たちは、銀杏を採ろうということになり、正太、次郎、哲朗、美奈とそれに新しくメンバーになった、芹沢が加わっていた。銀杏の木の下は、落ちた葉が雨水でぺタリと地面に張り付き、その中に雨の湿りに取り残された、雨蛙が正太たちの様子をのぞき込むように、ゲロゲロと鳴いたあと、ピョコンと軽快に飛び跳ねながら、草むらへと消えて行った。葉の上には、残った湿り気を楽しむかのように、ゆっくりゆっくりと大きなでんでん虫が、はっている。

「どうだあ～！落ちてるか～！」

「おお、いっぱい落ちてるぞ」

と、次郎が叫んだ。正太たちは、大きなビニール袋を手にして、拾った銀杏の実を集めていた。

次郎は、銀杏の木の樹冠を見つめて言った。

「だけどさあー、この上に上がればもっと銀杏が採れるよなー」

「うん、だけど坊主がきたら、怒られるぞ」

正太と哲朗もビニール袋を持ったまま、樹冠を眺めた。と、そのとき芹沢が言った。

「坊主なら、おれが見張るよ…だから、いいぜ！登っても」

「うむー？」

と、正太がしばらく沈黙した。

「登ったら？怒られたってどうせ一回じゃん」

と、美奈がつけ加えるようにいうと正太が、

「よし！登ろうぜ」

と言って、哲朗と次郎の顔をのぞき込んだ。

「おお」

「登ろう」

と、哲朗と次郎が言った後、さっそく先頭を切って、正太が一番低い枝につかまった。そうして、背伸びをしたようにして、左足を木の突起している部分に引っかけて、かなり太い枝に上がった。

「すっげーや！蟻だらけだ」

と、正太は叫んだ。木の幹には、列をなして蟻の行列が、樹液を求めて上がり下がりしていた。樹皮は、結構ゴツゴツとしていて、少年の手では丁度掴み易い形状となっていた。

「蟻だって？」

「ああ、もう少し上がってくると、いっぱいいるよ」

次郎は、しかめっつらをして、先に登っている正太の居る辺りを見た。正太は、登ってくる次郎の顔を上からのぞき込み、ニコリと笑った。

「なあ、正太。銀杏ありそうか？」

と、哲朗が声を上げた。

「まだ、上に上がるらないとわかんないよ」

と、正太は答えて、又一步上の枝に上がって行った。三本ほど上がった辺りで、正太が叫んだ。

「おお！少しあるぞ。…美奈一落とすぞ！」

「うーん」

と言ったあとに、丁度手の届く辺りに、銀杏の実があり正太は、左手で枝につかまり、右手で銀杏の実をむしり採り、下に放ったのである。

「どうだ！下まで落ちたか？」

「きたきたー」

と、美奈のカン高い声が聞こえた。木の下では、美奈が落ちてきた銀杏を回収して、芹沢が見張りをするという番をしていた。次郎と哲朗も次々に上がって行き、木の三分の一くらいのところまで来ていた。

「だめだ。あるけどもっと上に上がるわ」

「おお、あがろあがろ」

と、行って木の高さの半分くらいの所を越えて、ついに三分の二くらいのところまで来ていた。

「うわあー、あるある、すげーあるぞ」

そういつて、正太は片っ端からむしり初め、下に落とした。下では、忙しそうに美奈が落ちてきた実を、広い集めていた。次郎や哲朗も正太に追いつき、次から次へと、ドンドン落としていった。

「こりゃーいいや」

と次郎は、得意になって、落としていたら、正太が言った。

「次郎、落ちるなよ」

「ばーか、こんなところから落ちないよ」

正太は、採れすぎる銀杏に飽きてしまい、もう少し上に上がることを、決意した。

「お前ら、採ってれよ…おれは、もう少し上がってみる」

「ああ」

そう言って、正太は、段々と細くなっていく幹を一步ずつしっかりと登っていった。それと、同時に幹は風で揺れているのを感じた。揺れている幹からは、ギギギーという、音が聞こえてきて、枝の先の葉が風にそよいでいた。もうこれ以上は上れないというところまで、上がった時、幹の揺れは最大限になり、正太はガッチリとつかまって、辺りを見渡した。と、その先には、陽學小学校の屋根がユラユラと揺れている、正太の視線の中に入ってきたのである。

「すっげー、高いんだーこの木」

と、独り言を言って、そのまましばらく、景色を見ていた。

そのときである。木の下では、大人の声が聞こえてきた。

「シーッ！」

と、次郎が人差し指を立てて、静かにするようにとの仕草を作った。

「おおー、ずいぶん拾ったな、ぼく…」

声のする方には、大休寺の雑用係りの叔父さんが、拾い集めた銀杏を見て芹沢に話しかけてきていた。芹沢と美奈

は、不味いということ隠すように笑みを浮かべながら「はい！」と、元気の良い返事をした。そうして、去って行くとしたとき、叔父さんは足を一旦止めて、芹沢の持っているビニール袋をもう一度、見返した。

「うむー？」

と、首を傾げたので、芹沢は不味いと感じ、叔父さんに向かって笑いながら話かけた。

「いやあーハハハ…、雨でずいぶん落ちてますね。銀杏」

「ううん、ああそうだね」

と、叔父さんが言い、美奈もニコッと笑みを浮かべてうなずいた。と、そのとき次郎が、目の前に降りてきたクモに驚き、足をすべらした。ズザザーと、いう音がして、落ちはしなかったが、次ぎの枝に引っかかったのである。そのあとすぐに、叔父さんは木の上の少年たちに気が付き、目をやった。

「やっべえー」

と、芹沢が小さな声を出した。叔父さんは、上の方の幹に目をやり正太たちを発見した。

「こらー！…だれだ一木に登っているのは…」

そうして、芹沢と美奈の方にも目をやった。

「陽學の生徒だな…先生に言いつけないとならん…おい！降りて来い。早く」

と、木の上に向かって叫んだ。正太たちは、「ちえっ」と声を上げて、ゆっくりと銀杏の木から、降りてきたのであ

る。

「お前らも一緒だな…たくもう、だめだよ木に登ったら」

哲朗、次郎、正太の順に木から降りてきて、正太たちは、叔父さんの前で立っていた。

「まったく、ちかごろのガキはどうしようもないな、落ちたらどうするんだばかもの！」

と、叔父さんが正太たちに向かって怒鳴り、正太たちは、全員下を向いていた。叔父さんの表情は厳しいものがあり、どうもおさまりがつかないようである。そのとき、ひょこひょこと寺の境内から、年老いた住職が歩いてきた。住職は、叔父さんと少年たちを見つけると、近寄ってきたのである。

「竹部さんや、どうした」

「ああ、住職。この子たちが、銀杏の木に登っていたので、ちょっと叱っていたところですよ。まったく、どうしようもない。学校に連絡しなくてはならんでしょう」

住職は、その言葉に少し困った表情を浮かべて言った。

「うむ一、竹部さん。この子たちは、わたしに任せてくださいますか。それにほら草刈が待っているし…」

竹部は、あまり納得した表情はしていなかったが、住職の言いつけだったので、うなずいた。

「はあ、まあそう言うなら…」

「ああ、よかった。…君たち、ちょっとついてきなさい」

と、住職はか細い声をだした。正太たちは竹部に軽く頭を下げて、ゆっくり住職のあとをついて行った。

「おい、まずいよ…」

「学校に知らされるよ」

砂利混じりの境内をジャシッジャシッと歩いて行き、寺の玄関にたどり着いた。

「ささっ。上がりなさい」

と、手招きするように住職が軽い口調で言った。

「は・はい」

と、正太たちは簀の子板のところで短靴を脱ぎ捨てて、寺の中に入って言った。住職は、廊下をさらに進み、部屋の前で止まった。引き戸をササーと静かに開けると、正太たちを中に招いた。

「おお、どれどれ随分と沢山とったようだね」

と、芹沢が持っていた、ビニールの袋を眺めた。

「すみません」

と、正太が頭を下げた。住職は、ほほえみながら右手を芹沢の持っているビニール袋の方に差しだし、

「ちょっと、見せておくれ」

と、言った。そうして、住職は手に取ったビニール袋の口を大きく開けて、中に鼻を入れて、息を軽く吸い込んだ。

「ううん、銀杏の香りじゃ…」

「あの一う？」

と、正太が首を傾げると、住職が正太の顔を見て言った。

「うん？…あっそうかハハハ…、銀杏を採るのはいいよ。ただし、この銀杏はまだ若い。下に落ちている銀杏はな、丁度いいんだが、まだ落ちてないのは、ちょっと若いぞ…」

そうして、袋の中に手を入れて、銀杏の実をつまんで見ながら再び言った。

「…うむ？まあ、これは大丈夫だろ。家の寺の銀杏はおいしいよ。だけどね、ぼくこの銀杏はみんなが欲しがっているから、下に落ちただけにしてくれないかね。それに、木からおちたらケガをするしね。…これは、持って行きなさい」

と、芹沢の手に戻した。

「えっいいんですか？済みません」

「ハハハ…いいんだよ。…あっ、そうだついて来なさい」

そう言って、住職は再び部屋を出て、正太たちを手招きした。長い廊下を歩いていくと、大きな本堂に差し掛かり、
そうして、住職が振り返った。

「ああ、そこに座りなさい」

そう言って、座布団のあるところを指さした。住職は、本堂の中で供えられている菓子を両手で数個持った。そうして、座っている正太たちのところに、戻ってきて、菓子を配り始めた。

「これを、食べなさい」

「えっ、あ・ありがとうございます」

「あっそうそう、わたしじゃあなくて、ちゃんと仏さまに御礼を言うんだよ」

「はい！」

そういうと、正太たちは合掌し、御礼を言った。しかし、次郎だけが、両手をパンパンと大きな音をたてたので、哲朗が次郎に言った。

「次郎、それは神社だよー」

「えっ！」

と、言うとは住職が「ハハハ…」と大笑いをした。そうして、怒られると思って、いた、正太たちの不意をつくように、住職とすっかり仲よくなり、いろいろな事を住職から教えてもらった。すっかりと、くつろいだ正太たちは、帰りぎわに、

「ごちそうさまでした」

と、声を上げた。

「ああ、いつでも遊びに来なさい。…それから、銀杏が欲しければ、いつでもわたしのところに言ってきなさい」

ニコリとして、住職は送り出してくれた。

「はい、いつでも来ます」

と、手を振りながら、大休寺を後にした。

—初冬の雪だるま—

月日は流れ、秋も深まってくると寒さも一段と厳しさを増し、北風がピープーと吹き荒れる。この頃になると、雪が近いことを知らせるのである。そんな日の震える朝、正太が目覚めると、ツアツツアツツアツ…というタイヤチェーンを付けたトラックの過ぎ去る音が聞こえた。正太は、もしやと上体を起こすのである。

「えー？ひょっとして」

そう言って、上体を起こした正太は、窓際に駆け寄ると窓の外を見て、目を丸くした。

「うわあー、やっぱり…雪だ」

そう言って、いつもはギリギリまで寝ているのに、この日はすぐに服を着替えたのである。口から出る息は白く、寒いのであるが少年にとっては、それほど堪えない寒さなのである。慌てて着替えた正太の右の靴下は裏返しで、親指と小指の両端から縫った後の、糸が無造作に飛び出していた。

「あら？正太早いね…」

と、言いながら節子が、味噌汁の味付けをしていた、おたまから小皿に注がれた汁をズズッとすすった。

「かあちゃん雪だよ雪…おもて」

そう言って、正太はつつかけを履いた。

「ああ、そうだよ。いよいよ冬だよ…あら？正太風邪ひくよ！」

「だいじょぶ、だいじょぶ」

と、言いながら正太は、ガラガラと外へ出て行った。そのとき、隆造が丁度起きてきて一言言った。

「なした、正太このくそ寒いのに出て行ったのか？」

「そうだよ、まったく」

「まあ、おれもあのぐらいの元気が欲しいねハハハ…今日は、遅くなるかもしれんぞ」

「あらそう？」

「ああ、陵平のところに、届物があるからな。そのついでにこれよー」

そう言って、隆造は猪口を口に運ぶ仕草を見せた。

「そうかい、じゃあ陵平のところに、漬物でも持って行ってもらうかな」

「ああ、喜ぶぞハハハ…」

そんな、会話をしている中、正太は表に立って、ニコッとして雪を握りしめて、屋根の軒下へ投げ込んだ。

「こりゃーいいぞ…今日は雪だるまが作れるかもな」

そう言って、正太は家の中に入って行った。節子は、正太の様子を見て言った。

「正太、早くしなさいよー、そんなことしてたら遅刻だよ」

「わかったって」

隆造は、それを見てニコッと笑っているだけだった。正太は、まっすぐに洗面所に向かい、歯ブラシにホワイトライオンのチューブの中間あたりを握り、白い歯磨き粉を付けた。節子は、味付けの終わった味噌汁をお椀に注いでいた。

学校へ向かう通学路では、次郎と哲朗に会った。毎年のことなれど、突然の初雪に正太たちは喜んでいたのである。

通りの脇には、ななかまどの実に覆いかぶさる形で、雪が乗っていて、道ばたの薄氷の張った水溜まりの脇には霜柱が立っていた。正太が、次郎と哲朗に言った。

「昼さあー、雪だるま作れるかもな」

すると、哲朗が笑いながら答えた。

「だめだって、こんな雪すぐに溶けちゃうよ」

「そうかなー」

と正太ががっかりしたように言った。

「だけどわからんて」

と、次郎が正太をかばうように言った。と、そのときドサッとななかまどの木から雪のかたまりが落ちた。

「なるほど」

と正太がうなずいた。温度が上がってきていたので、少し降った雪が溶け始めていたのである。

学校の正門前まで歩いていくと、正門前では数人の少年たちが、少ない雪で雪玉を作り、投げやっこをしているようすがうかがえた。しかし、雪もひとすくいすると、土が見えるほどだった。それでも、吐く息だけは白く、寒さを物語っていた。教室内では、初雪のことで話題が持ち上がっていた。

「…いや、まだ降るよ」

「…ばーか、もう溶けちゃうの。だって毎年そうだぞ」

「去年とは、違うかもしれないべや」

寒くなっていた、教室の前の左端（窓側）には、すでにだるまストーブと呼ばれる、だるまのような石炭ストーブが備え付けられていて、その中に用務員の叔父さんが着けてくれた火が、心地よく教室を温めていた。ストーブの上には、アルミ製の盥状のものが蒸発皿として乗せられていて、煙突は、はりがねを使って設置されている。この頃になると、石炭当番というのがあり、各教室の生徒たちは、石炭小屋へ行って、用務員の叔父さんから、石炭を配っても

らうのだった。ストーブは、時折バチッ！というような音をたてて、火が勢いよく燃えると、前列に座っている者に、強烈な熱が渡り、顔面が真っ赤になっていくのだった。

やがて、先生が現れ授業が始まった。そうして二時間目が終わろうとしている頃、教室の窓の外では、雪がまた降り始めた。

「あっ！また雪だ」

と、正太が言うと、担任の小坂が

「おっ、また寒くなるな」と、言った。

雪の勢いは、その後段々と増していき、ついには、牡丹雪になって、降り続いた。正太は、哲朗の顔を見て、ざまあみろというような表情を見せた。さらには、次郎が振り返り、ニコッと正太に笑みを飛ばし、握り拳を作り親指を立てて、ガッツポーズを作った。

やがて、昼休みになった。正太たちは、すかさずグラウンドに出て、雪とたわむれることになった。

「だから、言ったら哲朗」

次郎が得意気に言った。

「まあ、こんなこともあるさ」

哲朗は、照れ隠ししながら応えて、三人は笑った。

「やっぱり、雪だるま作れるよ…ほらー」

そう言って、正太は雪玉を作りコロコロと転がし始めた。最初は少年の手のひらに収まる大きさだったのだが、転がしていくと、あっという間に大きくなっていき、次郎、哲朗、正太の雪だるまは三つの大きな雪玉となった。その中でも正太の転がしていたのが、特別大きくなりもう一人では転がせないほどになってしまった。そこで正太がため息をついた。

「だっ、だめだーもう押せないよ、次郎手伝ってくれ」

「おお、いいぞ。だけどさ、この上に頭乗せなきゃ…そうだ、おれの乗せようぜ」

「おお、そうだな」

そう言うと、次郎と正太は、次郎の作った雪玉を持ち上げようとした。けれどもあまりにも大きかったために、持ち上げることが出来なくなっていた。

「だめだー、哲朗！手伝ってくれよ」

「あーん、おお分かった」

自分の玉を転がしていた、哲朗が駆け寄ってきて、次郎の玉を三人で持ち上げた。

「よーいしょ」

玉はやっと持ち上がり、正太の玉の上に乗せた。最初は端に乗せて、それから転がすようにして、玉の真上に持ち上

げたのである。完成した雪だるまは、いつしか雲の切れ間から差し込んだ太陽光線を浴びて、銀色に輝いていた。

「やったー！できたぞ」

「おお！」

そう言って、三人は笑いながら、雪だるまを見つめていた。哲朗の転がしていた雪玉は、そのままとなり正太たちは、雪だるまをそのままにして、校舎へと入って行った。

教室では、教室の後ろにあるプラスチックに入っていた、山椒魚とカエルが寒そうにしていた。そろそろ冬眠に入る時期でもあったので、動きが鈍くなっていたのである。雪で冷えた手を正太たちは、だるまストーブを囲んで温めた。

「うおー！寒い寒い」

「だけど、これまだ根雪にはならないよな」

「まだまだとけるよ」

そこに、美奈が寒そうな顔をして、近づいてきた。

「やっぱり、寒いわ」

すると、次郎が、

「そりゃあ、そうさ。だけどこんなん寒いうちに入らないよ。これからだよ。なっ！」

と、正太と哲朗の顔を見て確認するように言った。

「えーえー、いやだなー」

と、美奈が言うと正太たちが笑いながら、

「慣れだよ慣れハハハ…」

「そうかなー」

と、少し笑顔を見せた。そこへ川治がやってきた。

「ちょっと、美奈。今度の日曜日さ、私の誕生会やるんだけど来る？」

「えっ、誕生日なの」

「へへへ…そうなんだ」

そこで、正太が言った。

「なんだよ川治。おれたちも誘えよー」

「えー？ほんとに来る？」

「いくよ。なあっ」

と、正太たちは、互いに顔を見合わせた。

「ああ行くよ」

「おれも」

そこで、笑みを浮かべながら、川治が言った。

「そう、じゃあ待ってるよ…時間は昼からね。美奈も来るよね」

「うん、行くよ」

そう言って、川治は他に誘う生徒のところへと行った。

その時間帯から雪は止み、太陽光線が強く降り注ぎ、段々と雪だるまは融けていってしまった。

－川治の誕生日－

翌日曜日、川治の誕生日に行くために、正太と次郎はプレゼントを買いに向かった。

「哲朗は一緒に行かないのか？」

次郎が言うと、正太が答えた。

「なんか知らないけど、一人で買って来るってよ」

「ふーん」

と、そっけない返事をした。

正太と次郎は、平和通りにある玩具屋へ向かっていた。この間降った雪は、あれ以後、全く降らないで強い北風が

吹いているだけだった。あちこちに、大きめな茶色になった枯れ葉が落ちていて、時折風とともに、新たに枯れ葉が飛んできた。四条の平和通りに付くと、車数が多くて道路を渡るには注意が必要であった。中には、その多い車の中を、ゆっくりとダンボールやアキ瓶を乗せたリヤカーを引いた老人とロープにつながれた犬が、行き過ぎる姿も見えた。正太たちは、エンゼル堂に付き、店の中に入って行った。

「おい、ほんとに玩具でいいのか」

「おお、だいたい決まりよ」

店内には、いろいろな玩具が所狭しと並べられていた。店内の狭い通路を歩いていくと、肩や膝などに玩具がぶつかった。

「こんなのどうだ？」

と、正太が言った。すると、店主がのろのろと歩いて来て、

「いらっしゃいませ」と、言ったのである。それにあわせて、正太と次郎は、軽く会釈をした。そうして、正太が手にしている人形のようなものを見て、次郎が言った。

「それかあー、ちょっと違うんだな…ワアッと驚くようなもんがいいな」

「じゃあ、お前どんなのにするのよ」

「いやーちょっと待ってくれ…迷うな」

「うん、迷うな」

正太たちは、一通り店内を見て回った。そこで、次郎が言った。

「正太、たもちゃんもいってみるべ」

「おお、そうだな」

そうして、正太と次郎はエンゼル堂を後にした。街には、コートの襟を立てている男や風であおられて、髪が乱れた状態で歩いている女の人が寒そうな表情で大勢すれ違って行った。

「おっ、ここだよ」

たもちゃんの前に着いた二人は、店内をのぞき込んだ。

「なんか、置いてあるものは同じだな」

「でも、入ってみるべ」

「おお、自分のだったらそんなに悩まないのになー」

正太たちは、誰かの誕生日の買い物というと、大概は親からこずかいを要求して、そこからプレゼントを買っていたのである。

「これ、自分の買うんだったら、G I ジョーのマシンガンセットを買うよ」

「おれもだよ」

そうして、たもちゃんの中に入って、玩具を見ていた。

「じゃあ、やっぱり人形か」

「ああ、そうかな」

そう言って、正太と次郎は、玩具を選び店主の所へ持って行った。

「これ、プレゼントかい？」

と、店主が言ったので、「はい！」と答えると、店主は、「じゃありボンかけるね」と、言った。

「はいー」

それで、やっとのことでプレゼントを手にした正太と次郎は、川治の家へ向かった。

川治の家に着いた二人はドアチャイムを鳴らした。ピンポンという音ともに川治が出てきた。

「ああ、入って」

川治の家は、緑の垣根に囲まれていて、門から少し奥まったところに、玄関があり、家もたいそう大きな家だった。

庭には、冬仕度のため水が抜かれた池があり、ここには、夏場に金魚や鯉が見られたが、今は冬眠用の深みに潜って、じっとしているようだった。ドアから玄関に入ると、玄関の床には、モルタルに埋め込まれた丸めの石が無数に埋め込まれていた。川治は、クラスでも結構金持ちの家だったのである。そうして、その奥から川治の母、良子が笑顔で

現れた。

「あら、正太くんと次郎くん、こんにちは、しばらくね」

「ああ、はい」

「はい、おじゃまします」

「どうぞー」

そう言って、玄関から居間に入って行った。

居間には、既に美奈が来ていて、二人が入って来たのを見て、ニコリと笑った。さらに数人の女子生徒が、長めのテーブルに着いていた。居間の中には、大きなひぐまの剥製や、油絵、トラの皮のムートンがあり、さらに柱には、縦長の大きな柱時計の振り子が、ゆっくりと揺れていた。テーブルの上には、オレンジジュースやサイダー、さらには、鶏の空揚げ、やスパゲティーなどの料理とカップエビセンなどの菓子類がびっしりと配置されていた。

「やあー」

と、正太が軽く挨拶をした。

「哲朗はまだか？」

次郎が席に着いている面々を見た。よく見ると、招待されている男子は、正太たちだけだった。

「ねえねえ。座って」

「ああ」

そうして、空いている場所に正太と次郎が席に付いた。正太と次郎は、集まっている面々よりも、ほとんど料理に目がいていた。その様子を見て、横にいた田中まゆみが小さな声で言った。

「ちょっと、いやしいよ」

「ハハハ…そんなことないって」

そのとき、ピンポンとドアチャイムがなり、哲朗が来た。

「おお、哲朗か？」

「ああ、どうぞどうぞ」

哲朗は、頭を掻きながら入ってきた。

「なんだ、おれが最後か？」

「そうだよー」

「哲朗。ここだ」

正太は、人差し指で最後にに残った空いていた場所を指し示した。

「おお」

そうして、川治が集まっている中にこやかに入ってきた。

「じゃあ、集まったから始めようか…みんな、ジュースの栓を抜いて」

ジュースやサイダーの栓が、抜かれそれぞれのコップにトクトクと音を立てて、つぎ込まれた。

「あっ！おれジュースとサイダーを混ぜるんだ」

「おれも」

「じゃあ、まゆみー始めの挨拶を…」

「挨拶？乾杯か…ハハハ…」

次郎が下品そうに言った。

「ちょっと、静かに」

「それじゃー、恵子の誕生日を祝しておめでとうございます。…えーと、それじゃー乾杯します」

「なーんだ。結局乾杯じゃあないか」

「かんぱーい！」

ガチャガチャと、コップを合わせたあと、一斉にジュースが飲まれた。それと、同時に川治の母良子が入ってきた。

「みんな、どんどん食べてよ」

「はい！」

それを聞いて、次郎と正太は、早速鶏の空揚げを掴み食べ始めた。

「うめー」

「おお、うめー」

ほかの者も、それぞれその紙の皿に、料理を取り食べ始めた。

「川治の母さん料理上手いんだなー」

「そう？」

「ああ」

ジュースは、サイダーで割るのが、流行っていたのでほとんどの者が、サイダー割りをしていた。集まった中でもとりわけおとなしい須藤ゆりは、サイダーでは割らないで、ジュースを飲み紙皿に取った料理も少しつつ口に運び上品に、食べていた。次郎は珍味のイカリングを、サイダー割りの中に入れて、

「おお、スッゲー泡…これこれ見てみろよ」

「ああ、すごい」

田中まゆみがそれを見て、自分のサイダーにもイカリングを入れた。

「あれー？ どうしてこんなに泡がでるんだろー」

「ほんとだ」

正太もすでにイカリングをサイダーにつけていた。

「これーさー、サイダーだけだともっとスッゲーんじゃーねえか」

そう言って、ゴクリとサイダー割りを一気に飲み干し、透明なサイダーを注いだ。

「ほらー、スッゲーよ」

「うわー…すごい」

やがて、料理も食べ飽きてきた頃、田中が川治にプレゼントを手渡した。

「はい、これ」

「あっ、ありがとう」

それに、続くように次々と、皆がプレゼントを渡して行った。

「川治。これ！」

正太と次郎は同時に手渡した。最後に哲朗がプレゼントを渡した。

「みんな、ありがとう」

「はやく、開けて見ろよ」

「うーん」

そう言って、ほぼ貰った順番に包を開けていった。

「うわー、これかわいい」

包の中から出てきたのは、熊のぬいぐるみだった。

「ありがとう…まゆみ」

「うん」

そうして、プレゼントの多くは、人形やぬいぐるみで、川治の周りにはプレゼントだらけになった。と、そのとき母良子がケーキを持って入ってきた。

「さあ、ケーキだよ」

「うわー」

「やったー！」

という歓声があがり、ケーキがテーブルの上に置かれたのである。

「あらー随分頂いたんだね恵子…みんなどうもありがとう」

良子は、ほほえみながらケーキを置くと部屋から去って行った。さらに、プレゼントの開包が続き、正太と次郎の
も開けられた。

「あっ！リカちゃんの着替えセット」

「あっ、何この人形面白い顔してる」

と周りの者が大きな声で、包の中から出てくる度に、いろいろな声が上がった。最後に哲朗の包が開けられようとしていた。哲朗は、一瞬緊張した表情を見せた。ガサガサという包を開包する音とともに、出てきたのは、正方形に近い長方形の箱に入ったものだった。

「えっ、あーすごいこれ」

川治は目を丸くした。

「えー、こんなのもらっていいの？」

「ああ」

「どれー、恵子見せて」

「オルゴール？」

「巻いて巻いて」

川治の手の中にあるのは、バレエのマドンナの形をした、人形が透明なドーム型をしたケースの中に納められたオルゴールだった。ギリギリというネジ巻きが回されて、テーブルの上に置かれると、白いマドンナ姿のバレリーナが白鳥の湖のメロディーに合わせて、上がったたり下がったり回転したりして、踊り始めた。他の女子は、耳元で小さな声でヒソヒソと笑いながら話している光景も見受けられた。

「哲朗…なんかわからんけど、すごいもん買ってきたべや」

「いやあー」

と、頭を掻いて顔を真っ赤にしていた。

「ありがとう哲朗」

料理やケーキさらには、プレゼントの披露が終わったところで、今度は、ゲームが始まった。トランプをやったり盛り上がりだしたのだが、川治が突然、

「そうだ、かくれんぼをしようよ」

と、言い出したので全員でかくれんぼをすることになった。

「ただし、範囲は家の中だけだからね」

「じゃあ、鬼決めだ」

「じゃんけん、じゃんけん」

「じゃんけんぽい」

「あいこでしょい…」

全員でするじゃんけんは、なかなか決まらなかったのだが、田中、哲朗、木村に絞られてしまった。

「よーし、勝負だぞ」

「じゃんけんぽい」

「あいこでしょい、しょい、しょい…」

「あっ！木村チーだ」

残された、哲朗と田中が見つめ合った。

「ようし、じゃあ三回勝負にしようよ」

「おー、いいぜ」

「じゃんけんぽい」

「勝った！」

哲朗が飛び跳ねた。けれども、三回勝負なのであと二回勝たなければならなかった。

「せーの…じゃんけんぽん」

「ハハハ…グーで勝ち」

と田中が喜んだ。

「いくぞー！じゃんけんぽん」

「あいこでしょ…しょ」

「あああ、負けた」

「ヒヒヒ…」

「何、その笑い」

「せーの、じゃんけんぽん」

「あっ！」

哲朗と田中はそれぞれ二回ずつ負けたのである。

「しょうぶ！せーのじゃんけんぽん」

「じゃんけんぽん…やったー」

「ああ、ついてねーよ。おれ鬼かー？」

とうとう、哲朗が敗北して鬼となった。皆は大笑いをして、隠れる準備をしたのである。

「じゃあ十数えるからな」

「だめよ…二十よ」

「二十！…わかったよ…じゃあ数えるぞ！ひとつ、ふた一つ…」

「きゃー」

「わー」

と騒々しい悲鳴を上げて、皆は家の中をあちらこちらと、走り回って隠れていった。母良子は、その光景を笑いながら見守っていて、テーブルの上の空いた食器などを片付け始めた。

「二十九、三十…もういいかい？」

「まーだだよ」

「もーいいかい」

「もーいいよ」

という声を最後に、哲朗は壁に付けていた頭を離し、静かに目を開けた。

「ようーし、見てれよ…隠れている場所はだいたい限られているんだからな」

ゆっくりと、部屋の中を歩いていくと、良子が哲朗の顔を見て言った。

「哲朗くん頑張って」

「ああ、はい」

部屋の奥の方では、クスクスという小さな笑い声が聞こえている。それに伴って、「シーッ！」という、笑いを堪えろという合図も飛び交っていた。先ず哲朗は、和室にある押入の戸を開けた。しかし、押入の中には誰も見えずに閉めようとしたときである。布団の上の部分が少し上下に動いているというのが、見えた。すかさず、哲朗が布団をはぐった。

「めっけ！鈴木」

「ああ、わたし一番最初ー？絶対にばれないと思ったのに」

「だって布団が動いたもん」

そうして鈴木が、ジュースの置いてあるテーブルの方に向かった。

さらに、哲朗はゆっくりと、突き進んでいった。その様子は、シンと身を沈めてどこかおかしかった。それからというもの、次々に隠れている者を発見していった。洋服ダンスの中には、三人も隠れていた。隠れている場所は、大概タンスとか椅子の下とか押入の中だった。和室の押入には美奈の姿があり、

「美奈めっけ！」

と哲朗が叫んだ。

「ちえー、見つかったちゃった。…ねえ、もうほとんど見つかった？」

「ああ、あと正太と次郎だよ」

「へえー、やっぱり隠れることに関しては、天才ね」

「ハハハ…」

少しして、一度通りかかった、廊下の方でプフッ！という、堪えきれなくなった笑いが聞こえた。

「あっ！あの声は正太だ！」

そう言って、哲朗がゆっくりと、戻って行った。ほかの者は、ニコニコしてその光景を、ケーキを食べたりジュースを飲んで楽しんでいた。声のした、方へ哲朗が行くと、首を傾げた。

「あれー？変だな！確かこの辺だったのになあ」

とその時、哲朗の頭の方で、「うっ！」と何かを堪える声が聞こえた。思わず哲朗が天井を見ると、廊下の天井にまるで忍者のように張り付いていたのだ。

「うわーっ！…し・しょうた！」

「ハハハ…やっと、見つけてもらった。この体勢つらくてつらくて、哲朗おそいよ」

「びっくりするなーもう、そんなところに張り付いて」

そう言うと、身軽に正太が天井から、飛び降りてきた。美奈は、哲朗と一緒に歩いてきてたので、その光景をみて笑った。

「やっぱり、正太すごいわ」

「へへえー」

と正太は、頭を掻いた。

「あとは、次郎だけだよ」

「あいつは、手ごわそうだな」

「ああ」

他の者は、もう隠れんぼに飽きてしまい、いろいろな話しをしていた。しかし、次郎は、隠れんぼの天才らしく、

どこを探しても見つからないのだ。

「おっかしいな一、次郎いないぞ。あいついつの間にか帰ったのか？」

もう、完全に他の者は隠れんぼのことなど忘れかけていた。そのぐらい、次郎は見つからなかったもので、川治が来て隠れんぼは、もうやめようお開きにしようということになった。そこで、今度は数人で、次郎探索に家中を歩き回ったのである。そのうち、数人の者がもう帰宅を始めだした。

「次郎！もういいぞ出てこい！」

その光景を見て、心配気になりつつある母良子が、

「ほんとに、次郎くんいないわねえー…次郎くーん、もういいのよ。出てらっしゃい」

正太、困った顔をして、頭を掻いた。

「かしーな、どうしちゃったんだ」

つらに、次々に友も帰って行き、川治と美奈、哲朗、正太、田中だけになってしまった。そうして、五人と母が、家の中で「次郎！」「次郎くん」と叫び続けた。と、その時である。良子が人差し指を口にあてた。

「しーっ！」

そうして、聞き耳を立てた。それにつれて、他の者も聞き耳を立てた。よくよく、耳を澄ますと、どこからともなく、いびきが聞こえてきたのである。

「次郎だ！」

「どこだ？」

「こっちの方みたい」

そうして、皆は一団となって、いびきの方へと進んで行った。すると、最初に哲朗が鈴木を発見した。押入の中から、聞こえてきたのである。ふすまを開けると、そこには、次郎が口を開けて、気持ち良く寝ていた。

「まあー！」

良子がそう叫び、笑いだした。

「ハハハ…次郎くん」

次郎は、良子の声と揺さぶられるのと同時に目を覚ました。ゆっくりと、目を開けると、口を開けたままの表情で、目を擦っていた。

「あれー？…あっつけねー、眠っちまった。」

「ハハハ…みんな、もう帰ったよ」

「えっ！」

美奈がにこやかに言った言葉に次郎は驚いた。そうして、押入から出てきて辺りを見回した。その様子に、良子が言った。

「次郎くん、お目覚めにサイダーでも飲みなさいよ」

新しい、コップにサイダーを注ぎ次郎に渡した。

－激量の吹雪－

十一月も中を過ぎる頃、かなり強烈な寒さの日があった。その日は、日曜で朝から随分と暗い日だった。正太の家では早朝にも関わらず、昨日の夜から大量の雪が降り続いていた。それに、強風が過多して、家の外では猛吹雪となっていた。強い風と雪が壁を叩きつけて、ガタガタピューウと鳴り、窓も真っ白に曇っていた。正太は、それらの音で目を覚ました。

「あ〜、夢かあ…なんか凄い吹雪だな」

立ち上がり、窓のある所まで歩いて行った。白く曇った窓を右手で、キュキュと擦り、外を見た。

「うわあ、なんにも見えない…こりゃあどこにも行けないよ」

そうして、がっかりした表情で、また布団に潜り込んだ。しばらく、うたた寝をしていると、やはり、吹雪の音が気になり始めた。

「正太、随分良い身分だなハハハ…」

隆造が、笑いながら正太の横をゆっくりと通って行った。

「ちがわーい。起きてるよ。…だけど、吹雪だからどこへも行けないし…」

「おう、そうか。トムとジェリーは見ないのか？」

「あっ、そうだテレビだ」

そうして、少々震えながらも、正太が起きてきた。階段を降りて、居間入ると、節子が、いつもの味噌汁の味見をしていた。居間の中央に近いところには、石炭ストーブがゴンゴンと音を立てて燃え盛り、時折煙突からの逆風で、ストーブの上の輪状の蓋の間から、黒い煙を吐いていた。

「正太、ご飯食べるのかい？」

「うーん」

そう言って、正太はテレビのスイッチを入れた。

家の外では、一メートル先が見えないほどの吹雪で、歩く者はアノラックなどをまとい、マフラーで顔を覆っていた。車もヘッドライトを灯し、タイヤチェーンを履いていないものは、走行が困難であった。

正太は、トムとジェリーが始まったので、顔を洗うことすら忘れて、テレビを見ている。

「ハハハ…」

と、笑っている姿に節子が言った。

「ちょっと、正太。早く顔を洗っといで、ご飯食べさせないよ」

「ああ」

シブシブと正太は、洗面所に向かい水道の蛇口をひねった。

「ひゃーあ…冷たい」

「あっ、やかんのお湯を使いなさい」

節子は、アルマイト製の大きなヤカンを指さして、正太の顔をのぞき込んだ。

「ずいぶん、しばれたな」

隆造が降りてきた。ステテコ姿の隆造は、不精髭を生やしていた。この日は、日曜日なので、隆造も仕事に出ることはしないのである。隆造は、ブローカーでいろいろな物の物品販売が仕事であった。したがって、取り引きがうまくいかないときは、節子のタバコ屋の収入が、生活費の主となっていた。正太、大きなヤカンを持ち、テコテコとよたりながら、洗面所に持って行った。

と、そのとき、ドンドンドンと激しく戸を叩く音が聞こえた。

「間宮さーん！間宮さーん！」

節子が、玄関へ向かい鍵を開けた。ガラガラと玄関の引き戸を開けると、ビューウという強い雪風が吹き込んできて、戸の外には隣の近藤夏江が立っていたのである。

「なっちゃん！どうしたの？」

「いや、うちのチビが居ないんだ？来てないかい」

「りょうちゃんかい？来てないよ」

正太も玄関の方にのっそりと向かい、ひょこっと顔をだした。それに気づいた夏江が軽い会釈をした。同時に、正太も頭を下げた。

「そうか…」

「まあ、ちょっとなっちゃん入んなよ…」

「ええ、…」

「で、どうしたって、居ないってどうしたの…とうさん！りょうちゃんが居ないんだってさあ」

髭そり途中の隆造が、髭を半分残しタオルでしゃぼんを拭き取り、ツカツカと歩いて来た。

「なしたって！…りょうちゃんが居ないって？」

「そうなの、朝はやくに家の前で、遊んでいたのに1時間しても、家の中に戻らないから、見てみたらどこにも居ないのよ…もし、なにかあったらどうしよう」

「こんな吹雪で？」

「いや、あの子この吹雪が気に入ったみたいで、すごく喜んでたもんだから…仕方なく」

隆造が頭を激しく掻きながら言った。

「んで、心あたりは？」

「いや」

「徳さんには言ったか？」

「いやあ、今日はあの人、札幌なんだ」

「ちょっと、とうさん一緒に探してやってよ」

「おお、わかつとる！…ちょっと、まっとれ」

そのようすを見ていた、正太が言った。

「おばさん、ぼくも探すの手伝うよ…」

「ありがとう」

りょうちゃんとは、隣の近藤家の一人娘で小学校一年生である。

「そうだ、哲朗と次郎に電話してみるわ」

その言葉に、節子が心配そうに言った。

「ちょっと、正太あんたが行方不明になっても困るんだよ」

「そうだよ、しょうちゃん。ほどほどにね」

「だいじょぶだって、おばさん。子どもは、風の子…それに、とうちゃんが行けば見つかるって」

夏江は申し訳ないという、表情をした。正太は、電話のあるところに向かい、受話器を持ち上げて、ダイヤルをギーコーギーコと回し始めた。そこへ、隆造がアノラックを着て現れた。

「なっちゃん、行こうか？」

「はい」

そうして、二人は吹き込む吹雪の中へと消えて行った。

正太は、哲朗に電話をして、次郎にも電話をしてもらうように伝えていた。やがて話を終えて、外に出る支度をした。りょうちゃんとは、近所でよく一緒のグループとなって遊ぶこともあるのだ。

「よし！かあちゃん行って来るわ」

「気を付けてね！」

「おお」

そう言って、正太は玄関の戸を開けた。開けた瞬間に、強い風と雪が吹き込んできた。正太は、耳搔けの上にかぶったアノラックの風防のヒモを強く締めて、ひと呼吸した。

「よし！」

と、自分に気合いを入れて、ザクッザクッと踏みだした。

「いやー、ひで一えなあ、こりゃあ…うぷっ！」

口の中に入り込んだ、雪を唾と一緒に吐き出した。吹雪の中では、人影も少なく、とりあえず、哲朗たちと待ち合わせていた近くの広場の前まで向かった。道路では、自動車が薄黄色に輝くヘッドライトを灯して、ゆっくりと通って行った。風圧に体を、押しつけるようにして、進んで行ったがこんなに酷い吹雪は、何十年ぶりだという気象庁の話しであった。進む先の広場には、薄っすらと、人影が見えた。ぼやけた人影は近づくにつれて、はっきりと認識できるまでになった。哲朗である。

「おお、なんか手がかりあるんか？」

「いや、なんもないんだ」

「りょうちゃん元気な子だから、さらわれない限り大丈夫だと思うよ」

「ばか、さらわれるなんて縁起でもないこと言うなよ」

「ああ、まあな」

少しして、次郎が姿を現した。

「りょうちゃんが居ないって？」

「そうだよ」

「人さらいか？」

「ばーか、お前までそんなこと言うなって！」

「とりあえずさ、遊んでいそうなところにいこうぜ」

「おお」

正太たちは歩き始め、中通りに向かった。中通りの車道には、郵便馬ソリが鈴を鳴らして、ゆっくりと通り過ぎて行く姿が見えた。

「でもさ、そんなに遠くに行っていないと思うよ」

「下水にでも、落ちたんでないか？」

「うーん」

正太たちは、子ども路と呼ばれる、子どもだけが知っている抜け道や狭い路地などを、あちこち探した。しかし、一向に綾の姿は発見することができなかった。

「どこいったんだろー？」

「でもさ、こんなに探しても居ないってことは…まさか」

「ばーか！」

正太たちは、一回りをしてもう一度広場に着いた。その時ちょうど隆造と夏江が、こちらへ向かってきていた。

「おお、正太居たか？」

「なんだ、そっちもだめ？」

「ああ…」

その後ろから、二人の叔母さんが着いてきていた。

「…どうも、居なくなったのは、りょうちゃんだけじゃないようなんだ」

「えっ！…孝治くんと英治くんも居ないの？」

と、二人の叔母さんの顔を見て、問いただした。その様子に哲朗が言った。

「ということは、三人は一緒かなあ…」

「ああ、たぶん一緒だ」

眉間にしわを寄せて隆造が答えた。

三人が居ないということは、予想していたよりも遠くに行ったということが考えられた。その分、探す範囲が広がったということにもなるのだった。それで、吹雪の方は一向に、止みそうになかった。ゴーゴーという冷たい雪が、顔に降りつけるばかりで、積雪もかなりのものとなってきたのである。家々の煙突からは、黒い煙が出ては、吹雪によって凄い勢いで持って行かれ、風の強さも物語っていた。

「ようし、もう一度手分けして、探そう」

「警察に連絡をしなくては…」

「なっちゃん。もう一度探してみてダメだったら、連絡を試みようじゃないか」

「わかったわ」

「みんな、声を出して、呼びながら探すんだ、いいな…よし行こう」

そうして、皆は三方に分かれて探し始めた。正太たちは、一度通った子ども路を、逆周りで進むことにした。

「りょうちゃん！」

「こうーじ！」

「えいじー！」

吹雪の強さに、かなり立てる声も半分以上かき消されながらも、搜索は続いた。正太たちの足元では、ザクッザクッ…と積雪を踏みしめて、吹雪を顔に受けて進んで行く。

「あいつら、どこ行ったんだよ！ばかやろー」

と、いら立ち始めた次郎が厳しい言動を吐いた。

「次郎、落ちつけて」

と正太が言った。皆は、寒さと風でかなり疲れていった。

それから、酒屋を通り過ぎたところで、哲朗が足を止めた。

「うむ！いま、なんか声聞こえなかったか？」

次郎と正太も立ち止まり、顔を見合わせた。

「シッ！」

「あっ！聞こえるぞ！…どこだ？」

少し、三人は聞き耳を立てていた。そうして、同時に声を上げた。

「車庫だ！」

酒屋の隣には、貸し車庫が十台分ほどあり、その中から孝治や英治の声が聞こえてきた。

「次郎！うちのとうちゃんを呼んで来てくれ」

「おお分かった」

そう言って、次郎は駆け出した。正太と哲朗も、その後、貸し車庫に向かって走りだした。貸し車庫の前に行くと、どの車庫の中に居るのか、声の出る方をあてにして近づいた。

「これか？」

「孝治！どこだ？」

「しょうちゃん、こっちこっち！」

「哲朗。この中だは」

「ようし！」

「待ってれよー、今開けるから…」

車庫のシャッターは、降りていて孝治たちは、閉じこめられた形となっていた。

正太と哲朗は、シャッターの下を持ち、力を込めて持ち上げた。

「よいしょ。…あれー？だめだよ、これ上がらない」

正太たちは、シャッターが持ち上がらないので、ガッカリとしてシャッターを見た。

「正太。これ鍵がかかっちゃってるよ」

「鍵か？…ヤバイなー…孝治！中には、りょうちゃんもいるのか？」

「いるよ、泣いてる」

「中は、どんなだ？」

「真っ暗で寒い」

「もうちょっと待つんだぞ！…いまとうちゃんが来るからな」

「わかった」

吹雪は衰えもせず、なおも続いていた。シャッターの下にも、雪が積もっていた。首を傾げた哲朗が、

「だけど、どうして鍵がかかってんだ」

「どうしてだ？…孝治！どうして、この中に閉じこめられたんだ」

「…わかんないけど、上にぶら下がったらじょっぴんかった」

「ぶら下がった？」

「そうか、孝治たち半開きのシャッターにぶら下がったんだ。それでシャッターが降りてきて、鍵がかかったんだよ、きっと…」

「…そうか！」

そこへ、駆け足で次郎が現れて、隆造たちが来たのである。隆造は、駆け寄ると指でシャッターを指し示し言った。

「この中か？ あいつら…」

「そうなんだよトウチャン。だけど、鍵がかかっていて開かないんだ」

「どら」

そう言って、隆造も同じようにシャッターを持ち上げた。

「うむ！…だめだな」

「開かないですか？」

と夏江が心配そうな声を出した。

「りょう！中に居るの？」

「かあーちゃん…うわーん…」

「泣くんじゃないの…今、開けるから、もう少し待ちなさい」

「暗くて怖いよー」

隆造は、車庫の上にかかれている『浜田』という看板を見た。

「この車庫、浜田さんのだな。…浜田さん居ないのか？」

すると、夏江が言った。

「だめだわ。浜田さんなんだか一週間程、仕事で札幌に行くって、言ってたもの」

「そうか、…」

少し、考えていた隆造であったが、

「ちょっと待ってろ…」

そう言って、酒屋の森山商店へと向かった。残された、主婦と子どもたちは、車庫の中の、子どもたちを励ましていた。

さらに、少し待つと、隆造が森山の六さんと、一緒にこちらに戻ってきた。

「なに、間宮さんこん中かい？」

「ああ、そうなんだ」

そう言って、シャッターの前まで来ると、正太たちにシャッターを持ち上げる振りをしてみせた。

シャッターは、少しだけ持ち上がった。隆造は、シャッターのところにしゃがみ込み、頭を低くして叫んだ。

「孝治！」

「はい」

「いいか、今渡すものを受け取るんだぞ。ふたつ渡すからな」

「うん」

そういうと、手に持っていたマッチと細目のロウソクをシャッターの下の際間から、送り込んだ。

「受け取ったか？」

「うん」

マッチとロウソクを受け取るのを確認すると、隆造は、正太たちに首軽く振って、合図した。それで、正太たちは、シャッターを降ろしたのである。隆造は、膝についている雪を払うと、立ち上がり叫んだ。

「いいか孝治。今渡したのは、マッチとロウソクだ。おじさんの言うとおりにつかうんだよ」

「うん」

「よし、それじゃあ。英治にロウソクを持って貰え。どっちが上か分かるな？ヒモのついているのが上だぞ」

「おじさん分かるよ」

「よし、じゃあ今度は、マッチを擦る番だいいか？」

「でも、おじさん子どもがマッチを擦るとオネショをするって、かあーちゃんが言ってた…」

孝治の母をそれを聞いて、少し笑い、

「孝治！いいのよ。今だけ使っていいのよ」

「分かった」

「よし、孝治マッチで火をつけて、英治の持っているろうソクに火を付けるんだ」

「わかった、やってみる」

隆造たちは、シャッターに耳を付けるようにして、中の音を聞いていた。少しの沈黙があったが中の音は、吹雪の音でかき消されてしまっていた。

「おじさん、ろうソクに火がついたよ…うわあー明るい」

隆造は、少し笑みを浮かべみんなの顔を見回してうなずいてから、もう一度シャッターに向かって、話しかけた。

「よし、よくやった孝治…英治いいか、やけどをしないようにしろ、ろうが垂れてくるぞ」

「うん、分かった」

「孝治！その次は、言った通りやってみるんだ…いいかシャッターの下に横向きになっている針金のような棒が見えるだろう？」

「えーと、えーと…これかな」

「うん、たぶんそれだ、それを右か左に動かしてみろ」

「分かった」

そうして、隆造は正太たちにシャッターを持ち上げる準備をさせた。しかし、中の孝治からは、残念そうな返事が帰ってきた。

「おじさん！動かないよ、少ししか…」

「うむ…ちょっと待て」

隆造は、考え込み新たな結論を出した。

「孝治！りょうちゃんは、どうしてる？」

「泣き止んだみたい」

「そうか。孝治その棒は硬いんだよ…だから、りょうちゃんにロウソクを持って貰い、英治と二人で動かして見ろ」

「分かったよ、おじさんやってみる」

「りょうちゃんこっちにおいで…これを持って…」

隆造は、もう一度正太たちに目をやり、持ち上げる準備の合図を送った。その瞬間カチャリ！と音が聞こえた。

「いまだ！」

そのかけ声と同時に、シャッターが鈍い音を立てて、ガラガラガラ…と開いたのである。

「やったー！」

という喜びの悲鳴がこだまして、今度は吹雪の叩きつける音よりも大きく感じられた。

「りょう！」

「孝治！」

「英治！」

と、それぞれの親が、子どもを抱きかかえて、喜んだ。

「やったな、間宮さん」

「ああ」

「とうちゃん凄いや」

哲朗と次郎も笑みをこぼしていた。子どもと、親は隆造に頭を下げて、その場を去って行った。酒屋の六さんは、笑みをこぼし隆造の肩に軽くポンと手を乗せて、去って行った。

「さあ、お前らも家で休んでけや」

「はい」

「さあ、いくべ」

と、行って隆造、正太、と哲朗たちが間宮たばこ店へ向かった。

－天地の境目は真っ白－

吹雪は、どういうわけか昼間でパタリと止まって、青空がさしてきた。間宮家で暖を取っていた。正太たちは、午後から出かけることにした。昼食は、間宮家で友だちを含めて全員で取った。

「なんか、さっきまでの吹雪が嘘のようだねえ」

と節子が、食器を片付けながら言った。

「晴れたからさ、ジェスロやシンにも連絡してさあ、常磐公園の例のつるの所へいくべ」

「そうだな、雪が積もったから、きっと面白いよな」

「おお、そうだな」

「じゃあ、おれ電話してみるわ」

そう言って、正太は電話機の方へと向かった。

それで、連絡がついたあと、ドアがガラガラと開いた。

「せっちゃん！」

「あらー、なっちゃん。たいへんだったねえ」

「いやー、迷惑かけちゃって…これ！糠漬け食べて

「あら？」

「まあ、せっちゃんこの粕漬けにはかなわないけど…」

「そんなことないって…ちょっととうさーん、なっちゃんだよ！」

それから、きれいに髭を剃った隆造が顔を出した。

「おお、すまんなあ。…おい、いかの沖漬けあったろ。あれあげれや…」

「いやあ、そんなもらってばかりだから…」

と、気の毒そうな表情を見せた。

「いか嫌いかな？」

「そんなこと、ないけど…」

「うんじゃあ、遠慮するな」

「どうもどうも」

正太たちは連絡がつき、出かけようとした。

「あっ、どうも」

と、正太が軽く会釈した。

「しょうちゃん、どうもねさっきは…」

「へへへ…」

と照れ隠しをした正太である。

「おお、なっちゃん、そんなところに居ないで上がれ」

「そうだよ、はやく」

と節子もせついた。

「いやあ、…じゃあちょっと」

正太たちと、入れ替わりに夏江が間宮家に上がり込んだ。

快晴の下、正太たちは哲朗、次郎とともに常磐公園へ向かっていた。何かを言うと、口からは白い息がふわっと舞い上がった。しかし、吹雪の情景とは、これ程までに一変するものかというほど、白く重く積もった雪が、キラキラと太陽光線を浴びて、ダイヤモンドのように輝いていた。

「おまえのとうちゃん格好よかったよな」

「おお、なんかすげえーよな」

「そうか？へへへ…おれは、その子だぜ…おれも格好いいべ」

「それは、ちょっとなあ」

「ハハハハ…」

「ウハハハ…」

そうして、三人は雪を手ですくい、おにぎり程のかたまりにして、常磐公園に着くまでの間、ぶつけやっこをしながら歩いた。

常磐公園では、ジェスロや慎一郎がすでに来ていた。公園では、木の枝にたっぷりと白い雪が乗っかり枝が、重みでたわんでいた。カラスが樹頂で正太たち様子を見守り、カアーカアーと、大きな声を上げている。やがて、カラスがバサッ！と飛び上がると、枝に積もった雪が下の枝に落ちて、それがさらに下の枝の重たい雪に降りかかり、ドサッ！と音を立てて下まで落ちた。もう、この時期になるとガチョウの姿も見られなくなり、ひっそりと静まり返った静かな公園となっていた。

「いくか！」

「おお行くべ」

「さっき、すごかったぞ」

「何が？」

次郎がジェスロたちに、綾の救出劇の説明をしていた。

「へえー、正太のおじさんもたいしたもんだな」

「ああ、たいしたもんだ、たいしたもんだ」

「たいしたもんだ、たいしたもんだ」

もう事件は既に終わっていたので、ジェスロや哲朗は冗談っぽく言った。午前中の吹雪が嘘のように、晴れ渡り始め。池の上には薄っすらと、氷が張っているのが、太陽の輝きの反射によって確認することができた。

やがて、天文台のある小山を通り過ぎて、青少年科学館の脇を通り過ぎると、堤防へ上がる階段があった。階段には、やはりドッサリと雪が積もっていて、すでに階段の役目を果たしてはいなかったが、正太たちは、その階段から堤防の上に上がって行った。上に上がりきると、堤防からは、アーチを描いた肌色の旭橋と石狩川が見えた。

「いやあー、これだけ雪があれば落ちてもいいぞ」

と次郎が言った。堤防を七メートル程川下へ歩くと、大きな木が公園側にそびえていて、その太い幹にはツルが巻き付き、そのうちの一本が、丁度少年たちがぶら下がるのに都合のよい位置にあった。ぶら下がっている一本のツルは、太さは三センチ程あり、ターザンのようにツルにつかまって、堤防から公園内側へと空中をかなりの高さのまま遊泳することができたのである。

「おれが、先にやるって」

次郎は、駆け足でツルにつかまり、右足で地面を蹴り上げた。つぎの瞬間には、ツルは大きな弧を描いて、木の幹の方へと振れて行った。

「あーあ、いいな。つぎは、おれの番だからな！」と、ジェスロが言うと正太が、右手でジェスロを押し退けて、

「だめだよー、おれだおれー」

「ずるいよ、じゃんけんだ」

そう言って、残ったメンバーでじゃんけんをして、ツルにつかまる順番を決めたのである。次郎は、太い木の幹まで到達すると、両足で幹を蹴った。

「そうりゃー！」

その反動で、再び正太たちのところへ戻ってきたのである。

「いやー、おもしろいぞ…もう一回！」

「あっ、ずるいぞ」

「ハハハ…」

しかし、次郎はすでに地面を蹴っていて、木の幹めがけて動き出していた。ツルのぶら下がっている枝は、ギギギーと鈍い音を立てて、ツルにぶら下がった少年を支えていた。

「ああー、次郎ずるいは…あいつずるいから、もう一回行くつもりしてるぞ」

「おお、絶対に押さえてやる」

振り子状になっている次郎に、皆の目が集中した。幹から折り返して戻ってきた、次郎は案の定ほかの者に順番をゆずる気配を見せないで、視線も感じて両足をバタバタと暴れるようにして、つかまられないようにしながら戻ってきた。

「じっ次郎、ずるい…！」

「いやーだねハハハ…」

正太とジェスロは、次郎の蹴り上げている両足を捕まえようとした。そこで、両手を出したが、ジェスロの方は、次郎に振り切られ、正太の方は次郎の足を、しっかりと捕まえた。しかし、正太は自分の足元のバランスを崩して、次郎の左足に捕まったまま、もう一度振り子の原理には、逆らえない状態となり、木の幹の方へ動いて行った。

「ああああー」

「うわー！」

しかし、足を捕まえている手が、堪えきれなくなって足から離れてしまったために、正太は雪の堤防を転がり始めた。

「うわああー！」

深い新雪の中を雪煙が立ち登り、回転しながら正太の体が、堤防の下へと向かっていた。それと、同時にツルにぶら下がった次郎は、下を転がる正太を見つめながら、大きな木の幹にも気をつかっていた。正太は、一番下まで転がって止まった。次郎は、幹を蹴って皆のところに戻りつつある。

「ハハハハ…なにやってんだよー」

と他の者は、笑っていた。次郎は、呆気にとられていたがやがてスタッ！と皆のところで止まった。正太は、少し黙って倒れていたが、やがてムクッ！と起きあがった。頭や顔には、雪が乗っかりさらには、鼻の穴にも雪が詰まっていた。

「うぷっ！」

と言って鼻息を吐き、両手で雪を払いのけながら次郎の方を見た。次郎も正太の方へ目をやり言った。

「すまんすまん」

「おおー！このやろうやったな！…ハハハハ…」

しかし、正太は、怒る訳でもなく笑顔を返して笑った。

「やっぱり、雪があるからいいぞ」

正太は、ゆっくりと膝まである雪の傾斜を、ザックリザックリと上り詰めてきた。と、そのときである。哲朗とジェスロが後ろから次郎を押し倒したのである。「うわあっ！」と、叫んだ次郎は、正太と入れ替わりに傾斜の下に落ち

て行った。そうして、ジェスロは、ツルにつかまり次郎がやったように、振り子状に楽しんでいた。

「ハハハ…やったなー！」

次郎は、下で笑いながら叫んだ。それからというもの、哲朗や慎一郎も代わるがわるツルにつかまって、遊んでいた。それで、段々とエスカレートしていき今度は、一人ならず二人同時に、ツルにぶら下がって、振り子をやっていた。

「おおーホホホ…」

「あーハハハ…」

「やっほー！」

とはしゃいでいたのだが、慎一郎とジェスロが同時にぶら下がって、さらには、次郎が後ろから飛びつく形で、二人にぶら下がったときである。ギギギーミシミシミシ…という、ものすごい音を立てて、ツルを支えていた枝が折れたのである。三人は、一斉に雪の中に落下した。ズザーン！という落下音が聞こえ、哲朗と正太が目丸くして、その様子に見い入った。つぎの瞬間、三人は、起き上がり顔を見合わせ、次に折れた枝を見上げた。

「あーあ、次郎ぶら下がるからだよ。ー」

「あーあ」

「いてー」

ジェスロは、丁度一番下敷きになっていたのも、右手を左手で押さえていた。慎一郎は、目を細目ながら、軽く静かに笑い

「あああ…」と、言った。

目を丸くしていた、正太と哲朗は次郎の方を見て言った。

「おまえ一、三人もぶら下がったら折れるよ」

「だめべや一、せっかくいいところ見つけたのに」

しかし、次郎は、困った表情をして頭を掻いているだけだった。

その後正太が、気まずい雰囲気緩和するように言った。

「まあいいや、こっちに行ってみるべ」

そう言って、指さしたのは石狩川の河原のほうだった。こちらは、完全に雪原と化していて広大な河原へ降りるには広い堤防を、降りる必要があった。慎一郎やジェスロも堤防の上まで上がってきたので、河原を眺めた。

「おお、あの坂を下ってみるべ」

とジェスロが張り切って言った。

皆は、堤防の深雪の中をさらに、突き進み滑り降りるのに手ごろな傾斜を求めている。

「おい、ここでいいべ」

「おお、いいべや」

そういうと、少年たちは傾斜に座るようにして、滑って行った。ツルのところで遊んでいた頃から夢中になっていたもので、気が付かなかったのだが、天気は昼過ぎの晴天から、白い曇ったものへと変化していたのである。この頃为天候というものは、丁度高い山の上のように、頻繁に変化するのであった。

「おい、シン遅いぞ早く来いや！」

「うーん」

そういつて、慎一郎はアノラックの風防をかぶりシュルシュルと雪面を下ってきた。しかし、深雪が深いので完全に下までは、滑らなく途中で股の下などに雪が溜まり勢いを殺していた。下まで降りるとゆっくりと傾斜を上がり、再び傾斜を下った。数回滑り降りると、前に滑った跡が残りその部分が続けて滑ることにより、より一層加速できるものとなるのである。しかし、少年たちのズボンは、段々とビショビショに濡れてきて、不快感を与えるものへと変化していくのだ。やがて、少年たちもすっかりと遊び疲れて、堤防の下から上を眺めて見て叫んだ。

「あれー？空と堤防の区別が付かない」

「なんだって？」

「ほんとだ」

すでに、空は真っ白になっていて堤防の上部と空は同化し、境界線の区別がなかった。

「もう、帰るか？」

「おお、何だか足冷たくなってきたよ」

と、その時である。もの凄い早さで吠えながら駆け寄ってくる四匹の犬の姿があった。オウンオウン！

「うわっ！…」

「やべえ！」

少年たちは、凶暴な牙をむき出しにして向かってくる犬に、恐怖していた。犬は堤防から現れ、人間が深雪を歩くより遙かに上手に、かけ降りることができた。

「あっちいけ！」

「いやーおう」

皆は、慌てて深雪を漕ぐように逃げようとしたり、滑った跡をかけ上がろうとしたりした。しかし、逃げれば逃げようとするだけ、犬は追っかけた。それでも正太だけは、じっと身構えて言った。

「みんな動くな！」

しかし、そんな言葉は聞こえるはずがなく、一斉に散らばりつつあった。と、そんな恐怖のなか、突然ピーっと冷却しきった乾燥した空気の中を、かなり高い音程で、響きわたる音がこだました。次の瞬間、追っかけていた犬は、クルリと反対方向に回転して、走りだした。

「ジョーン！ストーム！カムバック！」

その声のする堤防の上には、一人の女性が四本の綱を持ち、手招きしていた。先ほどのかん高いピーという響きは、その女性が発した手笛だった。犬たちは、その女性めがけて一目散に戻っていき、少年たちは、フー！とため息をついた。やがて、犬は女性の周りにたどり着き、両脇に二匹ずつ寄り添う形でゆっくりと、歩いてきた。

「なんだ？ありゃー」

「すっげーよな」

次郎とジェスロが驚いたように言った。皆は正太の方に戻ってきた。そうして、呆然と立っていると、犬を連れた女性が正太たちのいる堤防の真上まで歩いてきて言った。

「ぼくたち！ごめんね。…もうだいじょうぶよ」

その通った声が、正太たちに伝わり皆は、軽く頭を下げて挨拶をした。

「ちょっと、行ってみるべ」

と正太は笑いながら言うと、皆は怪訝な表情を見せた。特に慎一郎は、目を細めて眉間にしわを寄せていた。

「こわいよ、おれ」

「おれも」

そう言った、皆の方を振り返って見て、正太は笑顔のまま、

「じゃあ、お前らまってれや」

「あっ正太！」

次郎は叫んだが、正太は堤防を上がって行った。

「こんにちわ！」

「あら、こんにちわぼく」

「それっ…シェパードでしょ？」

「あっ、知ってんのね…そうよ、シェパード。さっきは、驚かしてごめんなさい。この子たちも襲いに行ったんじゃないで、遊びにいったのよ…でも怖いわね…フフフ…」

「いや、ぼくはちっとも恐くないよ」

女性は、高価そうな青いコートをまとい、長い髪を三編みにして上に束ねていた。しかも、正太にとっては見ように濡れるような真っ赤な口紅と、きらめくイヤリングが気になった。四頭のシェパードは、口を開けてしきりに黒いブチ混じりの舌を垂らし、ハアハアと荒い息をしていた。呼吸と同時吐き出される息が四頭分白い湯気となって上がっていて、さらには、体毛の間からも陽炎のようにユラユラと湯気が上がっていた。その四頭の黒い目の八個がギラギラと興味深かそうに、正太の顔を見ていた。

「だいじょうぶよ、ぼく。触っても」

「いいの？」

「どうぞ！…シット！」

女性は、人差し指を立てると、犬の顔に向けて押しつける動作をした。すると、シェパードたちは、サッと腰を落とし座った。

正太は、ゆっくりと右手を差し出し、左側の一番先頭に座っているのに、手を伸ばした。

「あっ、ダメダメ…手は低い位置からね」

「こう？」

「そうよ」

シェパードは、その会話を聞いて、一瞬女性の顔を見て、再び正太の方を見た。正太の手は、シェパードの顔の右横に近づき、その近づいた手にシェパードは黒く輝く鼻を、ピクピクと動かした。つぎの、瞬間シェパードは、正太の手をペロリとなめた。

「うわっ…ハハハ…」

それと、同時に正太は、シェパードの顔に触れることができ、何度も撫でてやった。シェパードは、それに対して、何度もペロペロとなめ返した。

「フフフ…もうだいじょうぶね…ジョン。よかったね。良い友だちが出来て…」

そう言うと、ジョンと名付けられているシェパードが、低い声でウオン！と吠えた。そのようすを見ていた、次郎たちが、お互いの顔を見合わせて騒いでいた。

「おい、正太すごいじゃないか」

「おーおー、行ってみるか？」

「おう、行ってみるべ」

そうして、次郎たちは、堤防を静かに登り始めた。しかし慎一郎は、一番最後で首を傾げながら、不満そうな表情でついて行った。

「皆！早く来いよー。だいじょうだって」

その声で、次郎たちは堤防を上がりきり、シェパードの前まで来た。次郎たちも、近づき正太と同じように、シェパードを撫でてやった。と、その時である。一番後ろにいた、シェパードがウオン！ウオン！と声を上げて、走り出した。それは、慎一郎の方へ駆けて行ったのである。慎一郎は、

「ウウウワワワ…」

と言って、オドオドと右に左に、逃げようとした。しかし、シェパードの方が足が早く、慎一郎の後ろに回り込んだのである。ウオン！と再び声を上げた。

「ウウワー！」

と言って、慎一郎は飛び上がったのだが、シェパードが慎一郎の尻を鼻先で、つついているのだった。

「メリー！…カム！」

女性がそういうと、慎一郎の後ろに居た。シェパードは、女性の方へ戻ってきた。

「ごめんなさい！ぼく。…あなた、苦手なのね。…それをメリーが見破って、仲間に入れって、誘いに行っただけなのよ。恐がらないで」

それを聞いて、皆が大きな笑いを上げた。

「シン！来いよー、恐くないってー」

先ほどまで、恐がっていた次郎たちも、すっかり慣れてしまって、もう堂々たるものだった。慎一郎は、相変わらず目を細めて苦笑いをしていたが、ジェスロが、強制的に右手を捕まえて、へっぴり腰になっているままの慎一郎を引っ張ってきた。

「うわっ、うわっ」

と、慎一郎は拒むように言ったが、ジェスロの怪力にはかなわなかった。

「ぼく、そんなに無理に、ひっぱらなくてもー、いやなものはいやなのよ」

「おねえさん…いいんだよ。こいついつもそうなんだから…少し鍛えないと」

女性は、少し困った表情のまま笑っていた。

「ほらー」

ジョスロは、慎一郎の手をシェパードの口の横に近づけた。すると、シェパードは慎一郎の手をペロリをなめた。

慎一郎は、目をつぶっていたが、時折目を開け閉めして、シェパードの顔をのぞき込むと、力の入っていた腰がリラックスして、さほど恐がらなくなった。そうして慎一郎は、いつも細める目を珍しく丸くして、笑った。その光景を見て、他の者も笑ったのである。

「ハハハ…だから大丈夫だっていったろ」

「あなたがた、すっかり気に入ったみたいね」

「うん」

「わたしは、この子たちを連れて毎日散歩に来ているから、いつでも触らせてあげるわ」

「ほんと！」

「ええ」

「ねえー、おねえさんどこから来ているの？」

と正太が尋ねた。

「ああ、わたしは公園の外れにあるところから来ているの」

「へえー！…じゃあ犬小屋も大きいのかなあ」

「そうねえー大きいわ」

「へえー」

そういうと、哲朗が皆の方を向き言った。

「おい、そろそろ行くか」

「おお、行くか」

「おねえさんどうも」

そう言って、軽く会釈をすると

「じゃあ、また今度ね！」

「バイバイ」

「バイバイ」

と言って別れた。

ー仲間はずれー

教室では、窓についた霜の上に哲朗が指で、絵を書いていた。丁度朝の始業時間前だった。だるまストーブも勢い

良く燃え上がり、蒸発皿の上には、ビュューという音ともに白い湯気が上がっていた。数人の生徒たちは、ストーブの周りを囲み、話しに花が咲いていた。しかし、どうも気になる情景があったのだ。それは、美奈の様子である。彼女は、あまり女子生徒とは遊ばないらしく、特に元クラスで一番人気の香川まゆみは、美奈を避けていたのだった。だから最近、美奈はほとんど教室内で一人でポツリと黙って、教科書などを眺めていることが多かった。ときどきは、誕生日にさそった川治が話しかけに来る程度だったのだ。その様子を正太や哲朗たちが察知していて、困った表情をしていたのだった。

「ちょっと、なに一あれ」

「どれどれ」

「あの服」

「毎日、違うわよね。…どういうつもりかしら」

「いいきなもんよ」

そんな会話が、女子生徒の間では交わされていた。

哲朗は、横目使いで、美奈の方を見て、次郎と正太に言った。

「なあー、最近美奈まずいよ」

「ああ、そうだよな」

と、正太が言った。

「だけどさ、あれは只のないものずくしだよ…気にしないさ」

次郎は、苦笑いを浮かべて言った。

「そんなこといっても、やっぱりつらいよ」

「そうだよな」

そこへ、担任の小坂が入ってきた。生徒たちは、いつものように駆け足で椅子に着いたのだ。

「起立！」

「おはようございます」

出席の点呼が始まった。

「あいつ、東京っ子だからなあ」

「ああ、仕方ないよな」

小坂は、出席を取り終えて、連絡事項を告げた。

「最近、大雪のため軒下などのツララも大きくなっているので、軒下はできるだけ通らないように。この間は、旭川体育館で軒下を歩いていた人が、屋根から落ちてきた雪の下敷きになり、大けがを負うということがありました。

…次郎、正太、哲朗。お前らが一番危ないからな…」

生徒たちは、三人の顔を見て、ガハハハ…と大笑いをした。三人は、真っ赤な顔をして、周りを見回して言った。

「先生一、そりゃーないよ…シンとか、いろいろ危ない奴いるよー」

慎一郎は、その言葉に目を細めて、次郎の方を見た。すると、川治が、

「シンなんか、そんなドジしないよ…やっぱり、あんたらさ」

その言葉に賛同するかのように、生徒たちは一斉に、

「そうだ！そうだ！」

と言った。それに対して小坂は、ニコニコしながら言った。

「まっ、ということだ。お前ら三羽ガラスもそうだけれど、みんなも気をつけろよ…さっ一時間目は、音楽か？さっさと音楽室へ行けよ」

「はい！」

と言って、生徒たちは席を立ち上がった。

音楽室の中では、黒い年期の入ったグランドピアノに座った柳田がいて、しきりに譜面を見て曲作りをしているようだった。生徒たちは、その姿をチラッチラッと見ては順番に席に着いていった。やがて、全員が席に着きしばらく黙って前を見ていると、譜面を見たままの状態ですくみながら言った。

「おー、ちょっと待ってくれな、今思いついたもんだから…」

「はい」

と生徒たちは言って、静まっていた教室が少しずつざわめき始めていた。それにも関わらず、柳田は、トンボ鉛筆の2 Bで譜面にお玉杓子を書き込んでいた。五分程経っただろうか。柳田は生徒の方を向き、ニコニコしながら言った。

「おお、済まんなー、じゃあ始めるか」

それで、ざわめいていた教室は、沈黙状態となり日直が立った。

「起立！」

「れい！」

全員が椅子につくのを確認すると、柳田は教科書を開いた。

「さあ、今日は輪唱の勉強ですね」

と、額に浮かび上がっている血管をピクピクさせながら、青黒い顔色で神経質に言った。

生徒たちは、教科書のサイクリングの歌という頁を開いていた。

「はい、輪唱はわかりますね。まず、グループを作りましょう。机の列ごとに1、2、3…と分けます。それで、最初に1班が歌い始め、1小節が終わると2班はじめるといったようにどんどん重ねて歌って行くんですよ。まずは、全員で一緒に歌ってみましょう…」

そうして、合唱が始まったのである。柳田の神経質そうに細い指は、グランドピアノの白い鍵盤の上を流れていき、メロディーが聞こえてくる。音楽室の上の方にはベートーベンやバッハなどの有名な作曲家の肖像が飾られていて、窓側の角には、一列に並んだオルガンが数台ある。

…サイクリング、リンリンリン…と、一斉に合唱は行われていて、中には口だけをパクパクと動かしている生徒もいるようだった。柳田は、そういった生徒がいても普段は、あまり指摘をしない存在だった。ただ、全校朝礼のときにもあったように、ときどき厳しく指導することもあるのだ。

「はい、大体全体の歌の雰囲気がつかめてきましたね。…それでは、各グループ毎に歌ってみましょう。まずは、最初のグループいきますよ」

そう言うと、ピアノを奏ではじめて、丁度歌の入る手前で「はい！」と合図を送った。それを、1班2班と同じように繰り返して行き、一通り終わったところで、柳田は立ち上がった。

「えー、それでは輪唱に入る前に、この曲を歌っているレコードがありますから、実際に聞いてみましょう」

レコード用のターンテーブルの蓋を開けると、レコードを取りだしサーッ！と静電気防止用のスプレーをふりかけて、赤いビロード色の盤面拭きで、数回レコードの表面をなぞったのである。その後、静かにターンテーブルの上にレコードが置かれ、回りはじめたターンテーブル上のレコードにゆつくりと針を降ろしていった。針が降ろされると時折プツプツという音が鳴り、ターンテーブル上のアームは、レコードの起伏に応じて、上がったたり下がったりを繰

り返した。やがて、メロディーが流れてくると、生徒たちは複雑な表情をしたまま、じつくりとメロディーを聴いていた。柳田は、少し笑ったような表情で、じっとしていた。

…サイクリングリンリンリンササイククリリング…と輪唱がきれいに流れて行くが、あまりの素晴らしさに、どことなくおかしくなった生徒たちは、曲が終わるとガハハ…と大笑いをした。

「すごーい！…なんか凄いよせんせー」

すると、柳田は立ち上がりターンテーブルの方へ向かい、笑いながら言った。

「そうですね。ちゃんとやれば、こういう風にできるわけですね。…これを今からやるんですよ」

「いや、せんせ。おれ絶対間違えそうだわ」

「ハハハ…がんばりましょう」

そうして、レコードをジャケットにしまい込み、ピアノの椅子に戻った柳田は、右端のグループを指さして言った。

「さあ、入りますよ。最初は、合図をしますから、そうしたら次の班も歌いはじめていってください。じゃあいきます」

やがて、メロディーは流れてきて、

「はい！」

という声と、同時に生徒たちは歌いはじめた。…サイクリングリンリン…やがて、1小節目が終わる手前で、柳田

は2班の方へ目をやり、一瞬目を大きく開けて、そろそろだという表情をして、すぐに「はい！」と合図を送った。ここで最初の輪唱が始まった。そうして、次々にメロディーの上にメロディーが重なり、一応輪唱らしくなったが、次郎やジェスロが間違えたらしく、吹き出していた。最後の班がメロディーを歌い終えて、曲が終わると笑いながら次郎が言った。

「だめだよーせんせー、どうしてもおれ他の班の歌に惑わされて、変になっちゃうよー」

「まあ、しかたないでしょう。難しいですからね。でも、一生懸命に歌えば、大丈夫ですよ。はい、もう一度いきましょう。今度は、合図しませんから自分たちで判断して、歌いはじめて下さい」

そうして、音楽の授業が進んでいった。

一時間目の音楽が終わると二時間目は、小坂の国語の授業だった。授業はほとんどの教科を担当が教えて、ときどき教科毎に専門の先生に換わって行われていた。それで、生徒たちは先生からの問題提起があると、競うようにして「はい！」という元気の良い声で手を上げて発言していた。

「このオトキチの場面で、オートバイサーカスを見た。○○○とあるけれど、ここにはどんな接続詞を使ったらいいか？さあ、わかる人」

すると、生徒たちは一斉に手を上げた。

「はい！」

「はいはいはい」

「はい」

そ、それは凄い勢いで教室中に声が渦巻いていた。それで小坂は、一堂を見回して、手を上げている香川まゆみに目をやり、人差し指を指して言った。

「よし！香川」

「はい！…そしてがいいと思います」

「そうか。他には意見はあるか」

すると、美奈が再び手を上げた。

「はい」

「よし、小栗答えてみろ」

「はい、…そこは、やはりそれでとかの方が、前の文でもそしてとなっているので、いいかと思います」

「ほほう…」

その答を聞いて、香川は美奈の方を睨みつけるようにした。

「…そうだな、確かに2回使うと文がうるさくなるな」

そこで、突然香川が叫んだ。

「先生！ちょっと待ってください。べつにここは、そしてでもいいと思います」「そうですよ。香川さんのいうように、そしてでもいいと思います」

香川と仲良くしている田中が援護するように言った。さらに、他の女子生徒も、

「先生。なんだか依怙贔屓していると思いますが…」

「うむー！エコヒイキはしていないぞ。確かに小栗の言った表現方法が合っていると思うぞ」

「おーこわ、こわ」

と次郎が、ちゃかすように言った。美奈は、その様子に真っ赤な顔をして黙っていた。その気まずい雰囲気のままその問題は、取り残されたまま授業は進んで行った。

放課後になって、正太は美奈の方へ近寄った。美奈は笑いながら、

「なに？」

と言ったので、正太が答えた。

「あのさ、犬見にいかねえか？」

「犬？」

「ああ、このあいだみんなで堤防歩いてたら、でっかいシェパードを連れておねえさんに会って、それで四匹もいる

んだけど、凄いだよそれが一…で、そのねえさんがいつでも触らしてあげるって言うんだ」

「へえー、じゃあ行ってみようかな」

「おお、いくべ」

と、正太と美奈は、笑いながら話していた。そこへ、哲朗と次郎が来た。美奈は、二人の顔を見て言った。

「ねえ、あんたがたも行くんでしょ…犬見に」

「ああ、いいよ」

と哲朗が応えたが、次郎は頭を掻きながら「これ、今日影山んちに行く約束したんだ」

すると、正太が笑いながら「そうか、じゃあ三人で行ってみるべ」と言い学校を後にした。

その日の放課後は、晴れていた。石狩川を望む常磐公園側の堤防では、正太、哲朗、美奈がゆっくりと歩いていて、白い雪からの照り返しが、ひどく強くまぶしい状態だった。

「なあ、美奈…最近、仲間外れにされてないか？」

「そう？」

正太の質問に軽く答えた美奈は、笑みを浮かべて次郎の顔ものぞき込んだ。

「そうだよ、最近あいつらひどいよ」

「うーん？そうかな…でも、いいの。どこへ転校してもこんなことはあるの。少しでも、友だちができればいいわ。…
ほら、正太や哲朗や次郎くんのように」

正太と哲朗は首を傾げながら言った。

「おまえ、ほんとにそれでいいのか？」

「なにー！それ二人同時に言わなくてもいいじゃない、ハハハ…」

そこへ、正面から向かってくる人影があった。

と、思ったとたんに、ワン！ワン！ワン！という声とともに四頭のシェパードが走ってきた。そのあと、前と同じようにその人影の人は、ピー！と高い口笛を鳴らした。シェパードは、あっという間に進路を一八〇度回転して、人影の方へ走って行った。やがて、人影の人は誰であるか、はっきりと認識できるくらい近づいてきた。

「こーんにーちわー！」

と、正太が大きな声で叫んだ。ちょうど、その人がすぐ目の前まで来ると、笑顔で挨拶をしてきた。

「あら！この間の…こんにちわ！」

そういうと、シェパードは四頭前と同じように、その人の両わきにピタリとついて、その人と正太たちを交互に見ていた。

「うん、またシェパードを見に来たんだよ…ジョン！」

と、シェパードに声をかけると、ウオーン！と返事をした。

「すっかり、慣れたのね。…今日は、女の子も一緒なのね」

「はい」

と、美奈が言った。

「いいわよ、触っても」

それを聞いて、美奈は首を軽く縦に振って近づいた。

「すごい大きいんですね」

「そうね」

正太は、真っ先にジョンの方へ行き、首を撫でてやった。そうして美奈の方を振り向き、「美奈こいよ…ほらー」と言い手招きした。美奈は、「ううん」と言って恐る恐る手を出した。静かにジョンの首へ手を伸ばし、触れてみたのである。ジョンは嫌がる仕草を一つも見せずに、相変わらず舌をハアハアとやっていた。

「うわあー」と、声を出したあと、美奈はにっこりと笑った。

「そうだ、このたちの訓練を見せてあげるわ…」

そう、言って後ろを振り向いた。

「えっ、どんなの？」

「まあ、見てらっしゃい…ジョン、ストーム、ゴー！」

そう言うと、シェパードたちは一斉に走り出した。一〇メートル程走ったあと、

「カム！」と言うと、今度は一斉に向きを変えて、戻ってきた。

「おー、すげー！」

と正太たちは驚き、さらに女性は「ストップ！」と手の平をシェパード側へ向けて言うと、勢い良く走っていたのが、ピタリと止まった。

「シット！」と言って、人差し指で合図をすると、四頭は伏せの姿勢をした。

「待て！」とつけ加えるように指示をしたあと、女性は正太たちの方を見た。

「どう？…感想は？」

すると、正太たちは目を丸くしていて、互いに見つめた。

「すげーなあ！なんでも、言うこと聞くんだね」

「ほんと、びっくりしたわ」

と驚きを現していた。女性は自信気に、笑みを浮かべながら、

「いまジョンたちには、待てと命令してあるの。だから、次の命令を出すまではそのまま待っているのよ…試しに、歩いて行きましょうか？」

「えっえー？」

女性は歩きだし、正太たちも一緒について行った。五メートル程進んだところで、黙って伏せをしている状態のシェパードを見て哲朗が行った。

「まだ伏せてる」

「さあ、もっと行きましょう」

七メートル、一〇メートル、一五メートルと行ったところで、美奈が言った。

「ねえ。寂しくないのかな、置いて行かれると思わないのかなあ」

「大丈夫よ。ジョンたちとは、信頼関係で結ばれているのよ。もちろん、最初からじゃあないわよ、訓練したからのよ」

「へえー」

ピー！、「カム！」と口笛と手および合図の言葉でジョンたちは、一斉に立ち上がり、女性めがけて駆けてきた。

「来た来た…ハハハ…すごい、すごい」

ジョンたちは、人間の走るスピードでは想像のできない速さで、女性の元へ駆け寄った。

「よしよし！」と、女性は四頭の首を撫でてやった。さらに、手にしていた綱に、一頭ずつ順番に繋いでいった。

「さっ！いらっしやい。わたしの家は、すぐ近くよ。甘いものでもごちそうするわ」

「あっ、ありがとう」

そうして、笑いながら着いて行った。少し歩くと堤防に交差する道に、人影があった。その人影は、胸にカメラをぶら下げていて、手を上げて近寄ってきた。

「あの一、すみません。一枚いいですか？」

見ると分厚い、コートをもとった、髭を生やした男でどうやら写真家のようなだった。

「いいわよ」

と、女性がいうと写真家は、「あっ、そのポーズがいいなあ」と言ってパチリとシャッターを切った。

「どうもね！…」

と言って手を振って写真家は去って行った。

かなり、歩いたと思われるが、堤防を降りていくと家の割に広い敷地の垣根を回した所があり、その前で女性が言った。

「ここよ」

門の前までくると、表札があり『西井』とあった。

「おねえさん、西井って言うんだー」

「あら、ごめんなさい、自己紹介もなかったわねえ。そうよ直美というの」

「ぼくは、正太」

「わたしは、美奈」

「ぼくは、哲朗」

「じゃあ、入って」

そういうと、門をくぐり玄関より、右端へ行った。

「ちょっと待ってね」

そういうと、直美は大きな犬小屋の扉を開けて、ジョンたちを中に入れた。

「さあ、いいわよ、いらっしゃい」

大きめの木製の焦げ茶色の扉を開けると、扉の裏側には、カランカランと心地よい音でなる鐘が取り付けられていて、玄関が望めた。直美に続いて、正太たちは入って行った。

「お邪魔しまーす」

と、正太たちは挨拶をして、玄関を上がった。入ると、中から洒落た老婦人が現れた。

「あらー？ 小さなお客さまね…ホホホ」

「あっ、どうも」

「こんにちは」

正太たちは、玄関から部屋の方へ案内された。玄関には、木で掘られた大きな恐い顔をした面が掛けられていたりや、綺麗にアレンジされた花が花瓶に生けられていた。ローズウッド風のフローリングの上には、分厚い刺繍の施されたカーペットが見事に敷いてある。玄関から見ると正面には、2階への螺旋階段があり左手には、居間へ通ずるドアがあった。正太たちは、2階へと案内され螺旋階段を上がりはじめた。

「おねえさんの家ってなんかすごいんだね」

「あら、そう…足元気をつけてね」

「はい」

螺旋階段の廻りには、輝くステンレスのパイプが張り巡らされている。やがて、2階へ到達して、部屋のドアを開けると、そこには一四畳ほどの部屋があり、直美はその中へと入って行った。

「どうぞ。あそこよ」

指さした方には、黄土色の大きめのソファがあり、正太たちは腰掛けた。

「フワフワだよこれ」

哲朗が笑いながら言った。

「ほんと、フワフワ」

直美はその様子に笑みを浮かべたまま、奥の方へ行った。三人だけになった正太たちは、顔を見合わせて喋りだした。

「おねえさんって金持ちなんだな」

「なにか、すごいよな」

部屋の壁には大きなゆっくりと動く振り子が、金色に輝き時を刻んでいた。

奥から、お盆を持って静かに歩いてくる直美の姿があった。正太たちの前までくると、お盆が降ろされて、その上にはケーキとコーヒーが乗っていた。それを、一つずつ配っていき、正太たちは突然のご馳走に、顔が緩んだ。

「さあ！どうぞ、召し上がれ」

と、上品な口調で右手の先を少し細めて、ご馳走を指した。

「い・いただきします」

「あっ、お砂糖とミルクは、これね！」

「はい」

そういうと、哲朗が貝殻をモチーフにした、ガラスの器に銀色のホタテの殻状の砂糖入れの蓋を開けた。

「あれー！おねえさん、これー？砂糖」

「それ、コーヒー用の砂糖なの…入れてごらんなさい」

「へえー…美奈ほら、砂糖」

「サンキュー」

正太は、コーヒーの砂糖を入れている二人とは、対象的にケーキをフォークを使わずにかぶりついていた。

「ねえー、みんな陽學小学校よね」

「うん」

「あー、でも美奈は、東京から転校してきたんだよな」

「うん」

「東京から！」

「そ・そうだよ」

正太がイチゴの乗ったケーキを喉に詰まらせながら言った。

「それでさあー、おねえさん。なんか最近美奈の奴みんなから、仲間外れにされててさあ…」

「そ・そんなことないよ」

と美奈は、否定した。

「そんなことあるよ」

と哲朗が否定を覆した。

「仲間は外れって…どんなふう？」

そこで、口の周りに付いている生クリームを拭き取りながら、正太は言った。

「だからさ、特に女子なんだけれど、毎日違う服を着てくるとか、先生は、えこひいきしているとか、すごいんだよ…なっ！」

と哲朗の顔を見る。

「ああ、美奈もなんか言ってやればいいんだよ。ねえ、おねえさん」

「で、あなたがたとは、仲良くしてるんでしょ？」

「へへへ、まあね」

「じゃあ、それでいいじゃない。きっと、うらやましいのよ…気にしないで…そのうち分かってくれるから」

笑みを浮かべながら、美奈の方にのぞき込む直美に、美奈も笑顔で答えた。

「だいじょうぶだって、ゼーンゼーンへっちゃら。だって、転校何回でもしてるけど、こんなこと、よくあるもん」

「そうそう、そのいき！」

四人は、一斉に笑って言った。

「そうだそうだ…がんばろー！…ハハハ…」

「美奈ちゃん、困ったことがあったら、いつでも遊びにいらっしゃい、歓迎するわ」

「あ・ありがとう」

「お・おねえさん！ぼくたちは？」

「ああ、あなたがたもどうぞ」

「はい」

そうして、四人はその後も笑いながら有意義な時間を過ごした。

－ 雪中行軍探検隊 －

冬は、どんどんと深い雪の世界に入って行き、屋根にもたっぷりと雪が乗り、大きなつららもぶら下がっている頃だった。少年たちは、こんな吹雪の大豪雪でも寒さを感じることもなく、トンネル作りや雪合戦が行われていた。降り積もった雪のため、玄関から路地に出るには、雪で作られた階段を登って行かなくてはならないのだ。車道の淵には除雪した雪が、もうこれでもかと言わんばかりに、山積みされていて、少年たちは、冬休みの真っ最中であつた。その日は、美奈を含めて数人の仲間で、雪中探検をすることになっていた。

「シン！早くしろ行くぞ」

次郎が一番遅くやってきた慎一郎に発破をかけていた。

「よーし！全員揃ったな。行くぞ！」

「おー！」

と行って少年たちは、軒下へと向かった。この頃は、美奈もほとんど正太たちと、どんな場所へでも遊びに行くようになっていた。家々の軒下は、鋭角な物や変形したもの、二つが合体したものなどの、さまざまなつららが今にも落下しそうな危険な匂いさえ、漂っていたのだが、少年たちは、一向に構わなかった。と、いうより、恐怖を知らなかったのだ。第一関門の屋根に上がるという目的があったが、これは少年たちにとってはかなり、たやすいことだった。というのも積雪のため路地が、夏と違って高くなっているため、低めの小屋などの屋根に簡単に上がることができるのであった。そこからは、大屋根へと移ることができたのである。

「さあ、上がったぞ…そこに、足をかけて来るんだ。…哲朗早く来いよ！」

先頭に小屋に上がった正太が、哲朗に手招きをした。

「ああ、ここだな」

「おお、…ほら！」

そう言って、正太は哲朗に手を貸した。次から次へと少年たちは、小屋の屋根に上がって行った。次は、美奈の番だった。

「美奈！…しっかりつかまれよ」

そのとき、次郎が美奈の尻を持ち上げたのである。

「ちょっと！次郎やめて…Hねえー」

「まてやい、おれは、そんなつもりじゃないよ」

困った表情の次郎に正太が追い打ちをかけるように言った。

「やめろよ一次郎」

そうして、正太の両手には、力が入り「よいしょ！」と言って持ち上げた。

「ハハハ…上がった、上がった」

と、美奈は喜んだ。小屋の屋根も少年たちで満杯になってきて、正太は大屋根に登ろうとしていた。

「ジェスロ！次郎を頼むぞ」

「おお分かった」

新雪の乗った大屋根に正太が一步踏みだし、ザクッ！という音とともに三馬印の長靴が深く沈んだ。そこで、右足をふんばりグググ…という音のあと、左足が持ち上がった。ゆっくりゆっくりと一步ずつ上がって行き正太は、後の者へ手招きした。

「来いよ！」

正太の足跡に合わせて、あとの者がついて行った。屋根の上では、所々雪が動き滑る場合があるので、先頭の正太は慎重に進んで行った。そうして、丁度大屋根の頂点に達した頃、正太は一度立ち止まった。

「おおー、良い眺めだ。全部見えるぞ」

手を眉の上に添えるようにして、ゆっくりと見渡した。

「早く上がって来いよ」

と後ろを振り返り、正太は白い歯を見せて笑った。哲朗や慎一郎が次々と登ってきた。この大屋根を越えれば、また、隣の家の屋根へと冬場は、少年たちにとって格好の探検ルートとなるのである。どこまでも、どこまでも重たい雪の屋根は白く続き、幻想的な世界でもあった。全員が上り詰める頃、正太は、さらに大屋根を降りて次の屋根へと進んで行った。

「みんな！そこ、滑るから気をつけろよ」

「分かった！」

屋根の上といえば、ディズニーの映画でメリーポピンズというのがあり、チムチムニーチムチムニー…と歌いながら、煙突掃除屋が屋根の上を実に華麗に渡っていく姿を思い出すが、正太たちの探検もこれに近いものがあった。さらに、正太は、屋根の谷間にたどり着き隣の屋根に差し掛かろうとしたときである。突然、下からウワンウワン…と履き物屋の犬が吠え出したので、驚いたのだ。

「こんな、早くしろ！見つかるぞ」

その途端に、一斉に少年たちは、屋根の上を走りだした。

「うわー！」

「きゃー！」

そうして、少年の半分の渡り終えたときに、下から今度は、犬ではなくて履き物屋の六蔵が、屋根の方を覗き込んだ。

「こらー！…誰だー！屋根に登ってるのは…」

「や・やばい！見つかったぞ…ジェスロ早く渡れって！」

「わ・分かったってば」

そうして、最後に次郎が隣の屋根に、移りその屋根を掛け上がって行った。

「ひえー！ヤバかった」

「おお、危なかったぞな」

下では、履き物屋の六蔵が、左手を腰にやり右手を眉の上に添えて、屋根の上をのぞき込み、

「うむー！ねずみ小僧か？ハハハ…」

と、一人でうなづいていた。六蔵も少年期には、かなり危険な事をやってきたようだった。

「まあ、気をつけて行け」

と、小さい声で言い、履き物屋の中へと入って行った。

隣の屋根を越えようとしていた少年たちは、結構急斜面な屋根を滑るようにして下って行った。

「わー！ハハハ…」

「きゃほー！」

屋根越えは上り下りの連続で、下ったかと思えば、また登るのである。そうして、幾度か屋根を越えたところで、難関が待ち受けていたのだ。というのも、今までの屋根は、ほとんどくっついた状態のつながりだったのだが、今度はよほど勢いをつけて、ジャンプしなければ、隣の屋根に移れないという間隔だった。

「おい、正太どうする？」

と、ジェスロが心配気に正太の顔をのぞき込んだ。

「うむー、飛ばばいけるかな」

「ほんとカー？」

「ああ、…よし！俺飛んでみるわ」

「あぶないよ」

と慎一郎が言ったが、正太は勢いをつけるために一度後方へ下がり、息を飲んだ。

「はあー」と、息を吐いたあと、助走を始めた。美奈が心配そうにして、見守り飛ぶ瞬間に手で顔面を覆い、指の間から様子を伺った。

ドサッ！と音がして、正太が着地した。その瞬間に、後ろを振り向き笑顔を見せた。

「ぜんぜん大丈夫だー…こいこい」

手招きしている正太に、みんなもホッとため息を漏らして、互いの顔を見合わせた。そうして、うなづいたので、次にジェスロが飛び越してくることになった。

「おれ！…いくわ」

「おお」

正太は、飛び越して来たジェスロをつかまえるために、両手を広げて待ち受けの姿勢を見せたのである。

「さあ！早く」

「おお、行くぞ」

ダッダッダッ…と助走し、ジェスロが宙を舞った。瞬間的に、ジェスロの口がひきつって「ワオー！」と声を上げた。しかし、ジェスロも無事に、着地して正太がジェスロを支えた。

「ホオーッ！…やったね。お前らもぜんぜん大丈夫だから、早く来いよ」

と、急に元気になった。哲朗が後ろから次郎に軽く押されて、

「哲朗早く…次はお前だ」

と言うのだが、哲朗は、後ずさりして

「よせよー、次郎先に行けよー」

と言った。

「いいのか本当に、後は余計に怖いぞハハハ…」

「いいよ、お前先に行けよ」

哲朗は、普段は結構しっかりとしているのだが、どうも高所恐怖症らしく、こういった場面では、必ずとっていいほど恐がるのだった。

「しゃーねえーなー、じゃおれが先に行くわ…こんなの簡単だべや」

そう言って、次郎は助走も付けずに、ジャンプしようとした。

「次郎！危ない」

ドサッ！ドドド…と、次郎は足を滑らして、屋根と屋根の間に落ちる形となったが、唯一両手で両屋根を支えて、ぶら下がった。

「ああっ！」

「やったー！」

「次郎！」

叫びながら、正太、ジェスロ、哲朗が次郎の側まで駆け寄って来た。

「次郎、大丈夫か」

「くっ、くそー！…あっあっあああ…」

次郎は、手が滑って、また少し落ちかかった。その手を正太たちがつかまえて、引っ張った。

「せーの！」

足をバタバタさせながらも、次郎は、落下せずに屋根の上に戻ることが出来たのである。

「ひえー、危なかったー」

「気を付けろよな。たくー」

両屋根を挟んでみんなは、笑った。しかし、まだ飛び越していない者は、次郎の一件で恐怖したのである。

「いいか、思いっきり助走すれよ」

「ああ、次郎みたいになりたくないからな」

と哲朗が叫び、今度はは勇気を出して、哲朗が、

「やあー！」

と、声を出して屋根の上でジャンプした。無事に着地した哲朗は、ふうーとため息をついた。次は美奈の番で、彼

女は明るく笑いながら、

「いくよー！」

と、叫び軽くジャンプした。それからは、全員次から次へとジャンプしていった。

屋根から屋根へといろいろな家の屋根を越えてきた彼らは、三階建てのビルの屋上にたどり着いたのである。歩く箇所が平坦なので、少年たちは小休止を取ることが容易にできた。

「おいおい、こっちに来いよー！」

と、次郎が叫んだその方向には、換気口の大きいのがあった。この換気口は、屋上の床から立ち上がり、上で横を向くように曲がっているものであった。高さは丁度、少年たちの背の高さ程で、その口の間口は、一メートルの五〇センチ程であった。換気口の中を、のぞき込んでいた次郎は、ニタニタと笑いながらアノラックのポケットから2 B弾を取りだした。

「ヒヒヒ…これだよ、これ…」

皆も次郎の方を見て、驚いた表情で近づき正太が言った。

「次郎。なんで2 B弾持ってるんだ？」

「まあね！何かにつけて、持ってるわけよ」

そう言って自慢気にマッチにすり付けた。シュボッ！という音とともに、2 B弾からは、煙が噴射して、その煙の

出ている 2 B 弾を換気口に投げ込んだのである。しばらくして、換気口からはボカーン！という音がした。

「すっげー！」

と、ジェスロが叫んだ。そのとき次郎は、自慢そうな顔をした。換気口は、音が反響するので、いつもの 2 B 弾の音よりより一層大きな音響となってこだまして、少年はキャッキヤ、キャッキヤと騒いでいた。

「スゲスゲ！…次郎。数本まとめて投げ込むべ」

「おお、やってみるべ」

次郎は笑いながら 2 B 弾を 5 本ほどまとめて着火し、換気口へ放り込んだ。ドカ！ドカ！ボカーン！という、連発の響きがこだまして、興奮は絶叫へと変わっていった。相変わらず慎一郎は、目を細めて笑っているし、美奈もキャッキヤ、キャッキヤと騒いでいた。哲朗は次郎の隣へ行き、マッチの箱を持つ役目をしていた。

「よーし、もう一回やるべ」

「おー、やるべ、やるべ」

シューという音の後、再びドカドカという爆発音がこだましたときである。屋上とその下の階とを繋ぐ、屋上に張りだした小さな小部屋状態のところの金属製の古びたドアが開いた。

「こらー！…お前らだな…」

そこには、白い調理着に白い前掛けをしたゴツイ顔をした男が立っていた。男の前掛けには、魚の煮汁のシミのよ

うなものが付着していて汚く、頭髪は短く、さらに上くちびるには、古い傷の跡があり、それがより一層恐さを増幅させていた。正太たちは、突然登場した男に蒼白した表情で、黙ってたっていた。丁度へビに睨まれたカエルのような状態だった。

「…やっと、捕まえたぞ。こないだから換気口に爆竹投げ込みやがって！…どこの生徒だ。こらボン！」

しかし、この間からという言葉に引っかかった次郎は、反論するように言った。

「こ・こないだからって…ぼくたち、はじめてやりましたけれど…」

「なっ何だこいつ、ウソ付くのか！…こりゃー先生に言わないとだめだな」

そこで、正太が援護するように言った。

「ちょ、ちょっと待って下さい。ぼくらが2 B弾落としたのは謝ります。でも、本当に今日が初めてです。ウソは言いません」

男はみんなの方を見回した。ジェスロもうなずくように首を縦に振っていた。

「ふーん、そうか、いずれにしても…だめだぞ、ここにそんなもの投げたら、ここは、厨房につながってるんだからな、今度やったら先生に言うぞ。そうだ、おまえら、ここに遊びにくる連中しらないか？しゅっちゅうボカーン！とやられるんだ」

「知りません。…なあ、みんな！」

「知らないよ」

「ああ知らない」

そこで、きつい表情になっていた男が、顔を緩めてドアの方へ向かった。

「おお！今度そいつら、見かけたら俺に知らせろよ…おれはこの下に居るからな」

「わかりました」

ギギギーと重たいドアを開けて、男が階下へ降りて行った。ドアが締まると正太たちは、顔を見合わせた。

「めーだ！」

と、次郎があかんべーを試みせた。

「ふうー！びっくりしたなーもう」

「次郎！お前じゃないんだろうな」

「ち・違うって！本当に」

正太は、みんなの方を見て言った。

「どうする？」

「今日は、帰ろうよ」

「そうだな」

そう言うと、正太たちは今度は屋根の上を歩いて行くのをやめて、重たいドアを開けて階下へ下った。降りる途中、全員は静かにゆっくりと歩き、先ほどの男に出くわさないようにして行った。

「おい、この店か？」

「分からん？」

「どうしても、いいけど早くいくべや」

「わーっ！」

と言って、少年たちは駆け出した。

－極寒の集団下校－

冬休みも終わり、学校では一番寒い時期を迎えていた。この頃になると、あまりにの寒さのため雪の量も減り、ダイヤモンドダスト現象と呼ばれる空気中の水蒸気が凍る状態になる。この情景は、キラキラと黄金色に照らされた、凍った水蒸気がクリスタル状で綺麗なので、この名前が付いた。しかし、実際はかなり寒くて、綺麗どころではないのである。インフルエンザも流行し、学校では学級閉鎖になるクラスもあった。こんな中低学年を連れて集団下校ということが行われるようだった。交通事故の多発で、低学年の児童の指導も兼ねてのことだ。

「正太。今日集団下校だってよ！」

「おお、知ってる」

「だけど、寒いよなー」

「いやいや、しばれるんじゃないかいだよ」

「それって、北海道弁丸出しだよ」

錆色のだるまストーブは、ゴンゴンと音を立てて燃え盛り、煙突の根元部分が真っ赤になっていた。時折ボホッ！と逆風で炎が開口部から吹き出しながらも教室を温めていたが、窓の縁は真っ白に凍り付くのだ。そこへ、担任の小坂が入ってきた。

「よーし、終わるぞー」

そういうと、生徒たちは自分たちの席についた。

「えー、今日は集団下校だから、寄り道はできないぞ…次郎」

「先生！なんで俺の名前を言うんだよ」

その言葉でクラスは、どっと笑った。

「ハハハ…そうか、次郎は寄り道しないもな？」

次郎は、笑いながら頭を掻いていた。

校舎の外では、低学年から高学年までがザワザワという騒々しさと、赤、黄色、青と色とりどりのヤッケやアノラックをまとい、寒いので足をバタバタと上下に足踏みをさせていた。

「さあー！行きますよー」

と小坂が、正太たちの地区を受け持ち、低学年を中央に挟む形で、家路に向かった。

「いやー！寒いでや！」

「ほんと、鼻が凍る」

哲朗はそう言うと、意識して鼻で息を吸い込んでみて、その度に、怪訝な表情をしていた。

「だけど、いいよな隣のクラス」

「いいよな、うちももっとみんな風邪引けばいいんだよ」

「そうだよな」

隣のクラスは、風邪を引いているものが、続出しているため学級閉鎖になっているのだ。先頭を歩いている小坂は、時折後ろを振り返り、列が整列されているかを確認していた。その度に正太、次郎、哲朗の三人と目が合って、正太たちは笑いを返すのである。小坂は、その態度に一瞬、睨んだような目をさせては、正太たちと同じように笑うのであった。ある意味では、小坂と正太たちとの間に一種の信頼関係のようなものがあつたのかもしれない。

「だけど、相変わらず美奈も可愛そうだよな。あそこまで、仲間外れにしなくてもいいと思うけどな…」

「まあな、仕方ないよ。おねえさんの言ってたように、時が解決するさ」

正太は哲朗に一人で納得したようにして、答えた。

「そういえばさ、この頃ねえさんどうしてるかな？」

「ああ、そういえばな。…そうだ、今日あたり行ってみるか？」

「おお、そうだな」

そこで、次郎もニコリとして、

「行こうぜ！」

と張り切って言った。

「こら、伸吾！飛び出したら、だめだぞ！…列に入って！」

正太は、低学年の伸吾が列から外れて、車道に出ようとしていたのを、止めた。

帰宅した正太たちは、打ち合わせどおりに西井直美の家に来ていた。

「今日は、ジョンたちの散歩は？」

「今日は、もう終わったのよ…早くに」

「ふーん、そうなんだ」

直美は、花柄の付いた白い紅茶の入ったカップを、正太たちの前に置いた。それで、思いだしたように言った。

「そうそう、最近美奈ちゃんが、よく遊びに来るのよ。彼女と話しているとなかなか楽しいのよ」

正太と哲朗は、顔を見合わせた。

「そうかー。あいつ、おねえさんの家に来るんだー」

納得したように、話を続けていると、下から直美の母が上がってきた。手にはお盆を持ち、シズシズと歩いてきた。

「さあ、お菓子でも召し上がれ」

と言って、テーブルの上に置いた。

「あら、ママどうしたの？」

「これー、さっき頂いたのよ」

「花島さんから？」

「そうなのよー、このお菓子おいしいから、たくさんお食べー…じゃあ、ごゆっくり」

そういうと、母は再び空になったお盆を抱えて、階段を降りて行った。直美は、階段を降りていく母を見送ったあとに、さらに思いだしたように言った。

「そういえば、美奈ちゃんまた、転校するんだってね…おとうさんも忙しい方なのね」

「えっ！」

正太が大きな声を上げた。

「あらっ！ひょっとして知らなかったの？」

直美が、拍子抜けな表情をして答えた。正太は、ひどく驚いた表情をしていた。

「だっ、だって俺聞いてないよ…そんなのー」

「おれ、だって聞いてないよ…次郎は？」

「ぜんぜーん」

三人は、顔を見合わせて驚いたが、正太が一番驚いた表情をしていた。

「ねえ、おねえさん。それいつ聞いた？」

直美を少し考えるようにして答えた。

「うーん、そうね一週間ほど前かな」

「どうして、俺たちに言わないんだ」

「そうかー、美奈ちゃん」

直美は、一人で納得したような表情をしていた。

「どうしたの、おねえさん？」

「うん？いや、何でも…」

直美は言葉を濁すようにした。そうして、目の前に置かれているお菓子を、ひとつ摘み、包を開けた。

「あなたがたも、食べなさい」

「はい」

と言って次郎が取った。哲朗も、その後から一つ摘んだ。しかし、正太は呆然としているだけで、お菓子には手を付けなかった。

「う・うまい！」

「ほ・ほんとだ…これ旨いよ。おれんちじゃこんなの買って来ないもな」

次郎は、ニコニコしながら、お菓子をほうばった。

「あら？正太くん…おいしいわよ」

「えっ？ああ…」

「なしたんだよ正太。ボーッとして」

と次郎が正太の方を見て、言った。

「しかたないよ。正太は、美奈のことが好きなんだから…」

その言葉に正太は、振り向き言った。

「えっ！ち・違うぞ。そんなことないぞ…お・おれも食べよっと」

そう言って、正太はお菓子を摘み、口に入れた。

「あっ、旨い…本当だ…ハハハ…」

哲朗は、そのようすを見て、首を数度縦に振って納得という表情をした。その目の先には直美の顔があり、直美も哲朗の表情に合わせて首を振っていた。

「このお菓子ね。なんだか、お見合いを迫られている方からのもののなのよ」

「えっ！お見合い…？」

直美は、笑みを浮かべて続けた。

「そう、私はいやだって、言ってるのよ。まだ、結婚したくないからね。でもこうやって、何度も挨拶に来るのよ」

「ふーん、おねえさんも大変なんだね」

「まあね、いろいろあるのよ…人生って」

「人生か？…分からないや」

「そうね…フフフ」

「ハハハ…」

そうして、三人と直美の会話は続いた。

－悲しい別れ－

翌日学校へ行くと、正太は真っ先に美奈の所へ飛んで行った。

「ひどいよ、黙ってるなんてー」

「うん？」

「うん？じゃないよ。また、転校なんだって？…」

美奈は、少し困った表情をして、微笑みながら言った。

「ああー、うん。そうなんだけど、どうして知ってるの？」

そのようすを見ていた田中がこれはという表情をして、香川の方へゆっくりと腰を低くしながら進み、近づいた。

田中は香川にコソコソと話し込み、香川はヒョッ！と驚いた表情を見せた。しかし、香川の驚いた表情の奥には、いつもと違う目の光があり、じっと美奈を見つめた。それは、睨むようにではなく、何とも言われぬ悲しい表情だった。

続いて、教室の入り口を駆けてくる川治恵子の姿があり、川治は美奈のところへ駆け寄った。

「ちょっと、美奈転校するんだって？次郎から聞いたよ。今…」

その後ろからは、次郎と哲朗が教室へ入ってきた。その情報は、次から次へと蜜蜂の伝達のように伝わり、今まで仲間外れにしていた者までみんな美奈の周りに集まった。

「えっ！えっ？どうしちゃったの？これ…ちょっと…」

「どうして黙ってたんだよー」

「ひどいよー」

そのとき、集団の外から声がした。

「おーい！どうしたんだ？…席に付けー！」

その声は、担任の小坂の声だった。それに、気づいた生徒たちは、一斉に席に戻っていった。その生徒の散った中央には、美奈の姿があり、涙を流して立っていた。小坂は、その姿に美奈を呼んだ。

「小栗。どうした？…そうか、よしこっちに来い」

「はい」

そう言うと美奈は、教壇の前へと歩いた。そこで、小坂が小栗の頭を軽く押さえ、みんなの方を向いたのである。

「えー、今日は悲しい知らせです。すでに、そのことで集まっていたようだけれど、小栗くんが急遽転校することになってしまいました。お父さんの都合で、また東京の学校へ行きます。えーっ、担任の私としても、あまりに突然の事で、驚いているのですが、お父さんの都合ということで残念ながら、転校ということになりました…小栗。ひとこと言うか？」

突然の集まりの動揺から、立ち直った美奈は「はい」という元気のよい返事の後挨拶をした。

「突然のことなので、わたしも残念ですが…えーっと、こんなに驚かれると思わなかったから…短い間だったんですが、東京へ転校することになりました。でも、向こうへ行っても、みんなのことは、忘れずに手紙を書くから…」

「絶対に書けよー」

と次郎が叫んだ。

「みなさん、本当に短い間でしたが、ありがとうございました」

そうして、美奈は頭を下げた。その瞬間教室では、拍手が沸き上がった。拍手の中、自分の席についた美奈は、辺りを見回した。不思議なことに、今まで散々に仲間外れにしていた、女子生徒は涙を流していて、住所を教えろとか、電話教えろとか、小さい声で美奈の方に言っていた。美奈は、すっかりと笑顔に戻り、それぞれの言葉に対して、うなづくように首を縦に振っている。担任の小坂も教室が少しざわめいていたが、今日だけは、黙っていた。

その後は授業が始まったが、全体的にしっくりといかない歯車が一個なくなったような、そんな雰囲気の中で行われていった。

一時間目が終わると、美奈の所にみんなが殺到した。真っ先になって、やってきたのは、驚いたことに香川であった。

「美奈ごめんね。冷たくして」

それに同調して田中も、

「わたしも、ごめんね」

と言った。そのようすに正太と哲朗が顔を見合わせて、ニコリと笑った。結局のところ、クラスのみんなは、東京からの珍客ともいえる美奈に劣等感を覚え、なんとなく仲間外れにしていただけなので、それが、いざ居なくなると大変寂しい気持ちの方が優先してしまったのである。そうして、転校は明後日ということも判明して、登校は今日までということだった。

「いいや、ゼーんぜん。手紙書くからね」

「うん」

クラス中がその雰囲気が続いたままで、放課後まで続いた。

正太たちは、美奈に記念になるような贈り物をしようと、次郎、哲朗といつもの三人トリオで、平和通りへ来ていた。

「だけどさ、突然だよなー」

「おう」

と、次郎と哲朗が会話していると、正太が言った。

「おれたちも、面食らったけどさ、美奈だって可愛そうだよな。しょっ中、転校して…」

「それも、そうだよな」

極寒の寒さは、身にしみ入る厳しさで、行き交う人々からの口や鼻からは、真っ白い息が吐き出され、その白い息もすぐには消えずに、しばらく宙を舞う状態だった。人々はオーバーの襟を立てたり、マフラーを首に巻き付けたりして、正太たちも、耳にははちまき状の耳かけをしていた。行き交う人々の表情も厳しく、皆、眉間にしわを寄せていた。

「だけどさ、おれー。転校ってしてみたい気もする」

「なんだって？」

と、哲朗の突然の言葉に、戸惑ったように次郎が言った。

「分かる」

正太は、哲朗の言わんとしていることが、分かるようだった。

「だって、転校するとさ、そこで結構人気者になったりする場合だってあるし…」

「そうなんだよなー」

「なんだ、そんな事か？ハハハ…」

「それに、友だちも増えるし」

「それもそうだな」

と、納得したような表情になった次郎は、がっかりしたような表情をした。

「だけど、家は絶対に転校はないよ。だって商売してるからな…正太だってそうだろう」

「ああ、そうさ。けど、やっぱり仲いなくなった友だちと別れるのはいやだな」

「そうだよな」

と次郎は、どっちつかずの曖昧な、言葉を発していた。結局、友が減っていく美奈が居なくなるということの影響は、クラス中で大きな穴が開いたものとなるのだった。

－記念の手紙－

美奈が出発する当日となった。残念ながらその日は、通常の授業のある日で教室には、朝一度顔を見せただけの美奈だった。小坂と共に教室に現れた美奈には、クラス中の生徒が集まり、いろいろな贈り物を渡していた。そうして、最後に一番親しくしていた正太の手から、寄せ書きが渡されたのである。

「うわー、どうも！…ありがとう」

「おれたたちのこと、忘れんなよー！」

「絶対に手紙よこせよー！」

いろいろな注文が付いた頃、美奈の出発する列車の時間の関係もあり、美奈は教室を去ることになった。

「じゃっ！、小栗そろそろ行かないと」

「はい！…じゃあみんな元気でねー！」

そう言うと、手を振りながら教室を去って行った。生徒たちは、教室から出て廊下で全員手を振り美奈を送ったのである。階段を降りて行った後、生徒たちは教室に戻り慌てて、教室の凍り付いていない窓を開けた。窓を開けると、すっきりと晴れ渡った青空の中に、教室内の暖まった空気が陽炎となって舞い上がり、冷たい風が教室内に吹き込んできた。教室から見えるグラウンド辺りの雪の小道には、人影が二つ現れた。一つは、美奈もう一つは、美奈の父で立派な髭を生やしていた。父は教室の生徒たちの方を見て軽く会釈をして、一度美奈の方を見た。そうして、静かに歩き始めた。美奈は、これ以上振れないという程手を振り、後ろ向きで、歩いて行った。それは、見えなくなるまで手を振っていたのである。

美奈が見えなくなった教室では、がっくりとしたような雰囲気の流れ全体的に静まりかえった。

「あーあ、行っちゃった」

「あーあ」

階段を上がる音が聞こえて、小坂が上がって来た。小坂は、綺麗に包装された包を持っていて、教室に入ってきた。

「さあっ、席に付け。…小栗が行ったが、勉強は始まるぞ！」

「えーえー！」

「何がえーだ！…ハハハまあ仕方ないな。美奈のおとうさんが、みんなよろしく伝えてくれと、言ってたぞ。あっそれから、これなあー、お父さんからみんなに御礼だ。…えー、今日の日直！」

そうして、小坂は黒板の方を振り返り、もう一度正面を向いた。

「次郎！小森！…これをな、みんなに配ってくれ」

「はい」

そう言うと、小坂は包を開けた。そこには、お菓子があり日直だった次郎と小森が二手に別れて、お菓子を配った。

その日の放課後、正太は西井直美の家へ向かっていた。門の中に入ると、家の脇からシェパードのジョンたちの吠える声が聞こえてきた。玄関の前で、ドアチャイムを鳴らすと、キンカンコンと金属の響きわたる音が聞こえて、ドアがカチャリと開いた。静かに開いたドアからは、直美が顔を出した。

「はいー！…あらー？正太くん。今日は一人なの？」

「うん、まあーね」

「どうぞどうぞ、入って」

「ジョンたちも寒いのに元気そうだね」

そう言いながら玄関の中に入った。直美は、首を縦に振りながら笑みで応えた。

「さっ、上がって」

「あら、こんにちは」

「ああ、おじゃまします」

直美の母も、廊下ですれ違い歓迎されていたようすであった。

直美の部屋では、相変わらずお菓子が出され、正太の前にはコーヒーが置かれていたのである。

「あらー？随分年下の彼ね。直美フフフ…」

よく見ると、部屋には先客が居て、それは直美の友だちの、海老尾綾子であった。綾子は、結構派手な化粧をしていて、鼻が上を向きニキビのようなものが複数頬にあり、低い声で話す人物であった。

「そうね、かなり年下ね。紹介するわ。陽学小学校の正太くん…」

正太は、先客の存在を知ってから、よそよそしい態度に変わり戸惑っていた。

「あっ、こ・こんにちは…あ・あのうー、おねえさん俺帰るかなー」

「あら、いいの、遠慮しないで」

「はあー」

「…それで、これが海老尾さん…アヤでいいか？ハハハ」

正太は、軽く頭を下げた。しかし、どうも直美と違って落ち着かないという状態に陥ってた。

「ぷふー。…正太くんっていったっけ、なかなか可愛いじゃないの」

正太は、心の中でどうでもいいが、この人は苦手だと呟いていた。直美は、少し気を使って言った。

「ちょっとアヤ。わたしの彼をあまりからかわないでよー」

「あー、ごめんごめんハハハ…」

と、低い声で笑った。正太はほとんど彼女たちの、飛んでいる会話についていけず無口のままだった。そこで、直美が思いだしたように、立ち上がった。

「そうそう、正太くんに渡すものがあるんだわ…ちょっと待ってて！」

奥の方へ行くと、直美はすぐに戻ってきて小さな包を持ってきた。

「これねえー、美奈ちゃんが正太くんに渡してくれって、置いて行ったのよ…はい」

そう言って、正太の前に差し出した。正太は驚いた表情をしながら、

「えっ？美奈が…」

と叫び、直美はそれに対して軽くうなずいた。正太は、右手を伸ばしその小さな包を受け取った。

「なにかしらねえー？」

包はピンク色で小さな白いうさぎ模様がついているものだった。セロテープの部分から静かに包を剥し始めたとき、

綾子がそれをのぞき込むようにして言った。

「なに？…プレゼントか何か？…あんだ、なかなかもてるのね。まっ、結構かわいいから…ハハハ…」

そんなことは、お構い無しに正太は包を開けた。

「パンツなんかが入ってたら、吹き出すわね」

「アヤ！…」

直美は、人差し指を立てて静かにという表情をした。

正太の開けた包には、手紙が入っていて、その中には綺麗な額に入った美奈の写真が入っていた。

「あっ？…」

そうして、手紙を開けた。生唾をゴクリと飲み込んだ正太は黙読した。

そこには、『正太くんへ、とつぜん転校することになりましたが、とても残念です。せっかく仲良くなれたのにね。

何回も転校を繰り返しているのに、今度ばかりは、とてもつらかったです。それに…ズバリ書いちゃいます。私は正太

くんが好きでした。そんな、正太くんの気持ちも確かめることすらできずに、とつぜんお別れとなっちゃいました。

だから、せめて私の写真だけでも正太くんのそばに、おいてもらって、忘れられないようにと思いました。勝手言っ

てごめんなさい。それから、これは直接渡そうと思ったんですけど、何だかはずかしくてわたせませんでした。じゃ

ー！元気で…わたしもがんばります。美奈』と書いてあった。それを読んだ瞬間に、正太の顔は真っ赤になり、突然

立ち上がった。

「おねえさん、俺帰るわ…」

「あっ、あらそうー？」

「ちょっと、なんて書いてあるのよー」

しかし、正太はすでに直美の部屋を出て行った。

「ちょっと、ちょっと！…うんもー！ミステリーだわ」

綾子は最後まで、意味不明なことを言っていた。直美は、正太の後を追いかけて玄関まで来た。そうして、玄関を出ようとしている正太の顔を見て笑いながら言った。

「どうやら、その顔見ると良いことが書いてあったようね。美奈ちゃんわたしの所へ遊びに来ては、正太くんのことばかり言ってたのよ」

「うん、じゃーどーもね。おねえーさん」

「あっ、それから…」

そう言って人差し指で二階を差して言った。

「…ごめんね」

「いや、ゼーんぜん」

と言って、正太は笑いながら西井の前から去って行った。

ーエピローグー

それから、やがて陽學小学校にも春がやってきていた。正太は、六年生になり、クラス変えもなく、そのままのメンバーで全員六年生になった。しかし、あれからというもの、正太たちは西井直美の家に行くことも忘れたようになっていた。さらに、今朝担任の小坂が、新しい転校生を連れてやってきたのである。教室は、いつものように、慌ただしく次郎、哲朗、ジェスロ、慎一郎、幸田、川治…皆それぞれに、いつもどおりの生活で、美奈が抜けたことすら忘れられていたようだった。

「起立！」

「お・は・ようございます！」

と元気の良い挨拶が交わされて、転校生が紹介された。

「とうちゃん！…何やってんだよー、もう、もうかあさんが出かけるってさ。早く」

「うん？…ああ」

そうして、開いていた卒業アルバムの褐色化した写真を見ていた。そこには、新聞の切り抜きである『少年と犬た

ち』と書かれたものが挟み込まれていた。それは、直美とシェパード、美奈と正太たちが写っていた。三十五歳の正太は、フフフと軽い笑みを浮かべ、息子、五郎の声に現在へと呼び戻されて、アルバムの扉を閉じたのである。

「おおー、今行くって、かあさんに伝えろ」

「うん分かった」

正太は、すっかり忘れていた、美奈のことを思い出しながらゆっくりと、部屋を出行った。小栗美奈や西井直美はその後どうなったのか、まったく分からないままで、美奈に関してはどこに住んでいるものなのかすら分からない状態だった。そうして、正太は妻と息子の五郎とで、出かけて行った。